

ラブライブ！サンシャイン！！ ~平凡な高校生に訪れた奇跡~

syogo

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

埼玉生まれ、埼玉育ちの高校生、榮倉翔（えいくら かける）。

16年間、特に何もない、ただただ平凡な日々を送っていた。

そんなある日、父親の転勤により、静岡県の内浦へ…。

そこで翔を待ち受けていたのは、今まで平凡な人生を歩んできた翔にとって想像もできないような日々だった…。

※ラブライブ！サンシャイン!!元ネタのssです。

※恋愛ものです。

※基本、アニメのストーリーの時間軸中心で、なんとか頑張っています。

※話の展開によっては色々変わってるところもあるかもしれません。

目次

く平凡な高校生、奇跡の始まりく

第1話 く平凡な俺に訪れた転機く

第2話 く非日常は突然にく

第3話 く平凡な高校生の災難く

第4話 く平凡な高校生との遭遇く

第5話 くあれ？平凡どこ行つた？く

第6話 くヘタレな俺と天使降臨く

第7話前編 く平凡な俺とヨソロく

第7話後編 く平凡な俺とヨソロく

第8話 始業前 く平凡な高校生の入学式く

第9話 1時間目 く平凡な高校生の入学式く

第10話 2時間目 く平凡な高校生の入学式く

第11話 く廃校とスクールアイドルく

第12話 く平凡な高校生と勧誘く

第13話 く平凡な高校生と申請書と転入生く

第14話 く勧誘と嫉妬とヨソロく

第15話 く堅物会長と大喧嘩とく

第15話 その日の夜 く千歌side&曜sideく

第16話 く小動物と寺の子と墮天使とく

第16話 く小動物と寺の子と墮天使と②く

第16話 く小動物と寺の子と墮天使と③く

第17話 く不登校と揺らぐ感情とく

第18話 く小さな少女の大きな決意く

第19話 くお年頃の名前事情と鈍感高校生く

135

129

119

114

109

100

97

90

82

74

67

62

56

51

46

38

34

30

25

20

16

8

1

第20話	くスクールアイドル部（仮）、結成。く	141
もうひとつの20話	くとある少女の思いく	150
第21話	く決戦、生徒会室く	153
第22話	く立ちはだかる壁と海の音とく	164
Birth day story	く渡辺曜く	177
第24話	く休学生徒と海の音く	197
第25話	く曲作りという名の告白タイム。く	207
第26話	く嫉妬と絶望と『2年前』とく	215
第27話	く合宿をしよう！く	223
くGW合宿編く		
第28話	くGW合宿1日目く	230
第28話	くGW合宿2日目く	241
第28話	くGW合宿3日目く	249
第28話	くGW合宿4日目く	256
くスクールアイドル活動、始動く		
第29話	く芽生えた感情。気づいた感情。く	265
第30話	く彼女の思いと自分の答えく	272

く平凡な高校生、奇跡の始まりく
第1話 く平凡な俺に訪れた転機く

「……つまらない。本当につまらない。」

携帯ゲーム機をいじりながらそう呟く俺。榮倉翔（えいくら かける）、16歳。高校2年生。

埼玉に生まれ、埼玉育ち。一人っ子。父親は普通のサラリーマン。母親は…、覚えて

いない。俺が1歳の頃に交通事故で亡くなってしまったらしい。だが、母親の事は全

くといつていいほど覚えていないため、特にさみしくもないし、いない事は気にもな

らない。だって、1歳だぞ？覚えているわけないじゃないか。

と、家族構成は俺、父親の二人暮らしと少し変則だが、問題はここからだ。

俺本人が、もう、「平」が百個つくレベルの凡人なのだ。

では、俺が生きてきた16年間を紹介しようじゃないか。

1月2日生まれ。生まれたときの身長≡50センチ。体重≡3000グラム。…ド平均。

小学校入学。以来今までのすべての成績オール3。得意教科、なし。苦手教科、な

し。特技、なし。趣味、ゲーム、読書。小学校のクラブ、中学校の部活、共に卓球部。

友達は…多くもなければ少なくもない…と、お、思いたいね。うん。

ちなみに、彼女なんていたこともない。バレンタインデーも貰ったことないぜ。

……さあ、どうだろうか。あまりに平均すぎないだろうか（というか、平均よりひどいんじゃない）。

というくつつつつつそつまラナイ、将来居酒屋なんかで、「お前の少年時代の話、聞

きてえなあ〜」なんて言われても、なんにも話すことなんてない（実際話すことに

なるのかどうかは謎だが）、人生を歩んできた。そして、これからも……。

そんな俺に、転機が訪れた。

今は夏休み初日。偏差値が50くらいの、ド平均高校に入った俺は、1年間、なあ〜ん

もないまま過ごした。……あ、友達はできたよ？そこは大丈夫だよ？うん。

通知表も安定のオール3（……ちなみに、学年末テストで、全教科平均点ピッタリを取

って、担任を苦笑いさせた）。うん。つまらない。安定の平凡人生だ。

……とまあ、特になにもないまま春休みに突入。今は自分の部屋で絶賛ゲーム中、とい

うわけだ。

「なんか、ねえかなあ……。なんというか、こう……、ちよつと変わった事。

例えば……

親父が急に転勤決まるとか。」

と、今流行りの某狩猟ゲームをカチコチやりながら、そんな事を呟く俺。

……まさか、フラグを回収してしまうとは。

「ふう。今日はこんなもんで終わっとくか。」

時計を見ると午後6時。そろそろ親父が帰ってくる時間だ。

「今日の飯はなにかなあ……」

と言いつつ、部屋を出てリビングに向かう。親父が帰ってくるまでに風呂を洗って、

洗濯物を取り込んだかなくては。（※因みに、榮倉家は一軒家です。）

リビングに来了俺。まずは空気清浄機をつける。部屋に冷気が漂い始める。気持ちいい。

お次はベランダ。窓を開けると暖気が顔に当たる。さすが春。穏やかだね。

手早く取り込み、洗濯物を畳む。さすが二人といったところか、物が少ないからすぐ

畳み終わった。ま、いつものことだけどね。

最後の風呂掃除をしている途中に、玄関のドアが開いた音がした。親父だ。俺は手早

く湯船についている洗剤を落とすと、スイッチを入れて、リビングに向かった。

「お帰り、親父。お疲れ。」

「おう。」

定番の挨拶を済ませると、親父は早速夕飯を作りに取り掛かる。

「今日の飯何？」

「ん？ 唐揚げ。」 おお、俺の好きな奴じゃないか。ラッキー。

親父が米を研ぎ始めたところで、俺はまた自室に戻る。いつもは宿題をやるのだが、

今日は春休み初日。なんかそうゆう気分になれない。

「ま、初日だしな。いいかあ。」

俺はまた携帯ゲーム機に手を伸ばすのだった…

「おーい、飯できたぜーい。」

親父の声だ。時計を見ると午後7時半。もうそんな時間か。

リビングに降りる。親父はもうテーブルに着いていた。習って俺も向かいに座る。

「いただきます。」

二人同時に食べ始める。うーん、うまい。最高。

黙々と食べ進める俺。すると、親父が食事の手を止め、

「おう、翔。ちよつと話があるんだが…」

俺は唐揚げをほおばりながら、

「ん？なにさ改まって。」

珍しいな…親父が話なんて…。それよりうめえなこれ。何個でもいけちやうぜ。

すると、唐突に親父。

「お前も、もう高校生か…。17になったんだっけ？」

「まだ16。今春だろ？俺の誕生日冬だぞ。1月だぞ。」

大丈夫か親父…季節真逆だぞ。

「ちよつと前まで、こんななんだったんだけどな…」

そう言っつて、テーブルの脚の半分くらいに手をやる。……ておい。それ何年前だよ。

どう見ても60センチくらいしかないぞ。

「で？なんだよ親父。話があんでしょ？」

「お、そーだったそーだった。」忘れてたんかい。

俺は唐揚げに伸ばす手を止め、お茶を飲む。そのタイミングに、
「実はな。俺、ナイジェリアに転勤が決まったあ。」

ブフーッ!!! 思いつきり噴き出してしまった。やべえ、人生初。

「ゲホッ、マ、マジでえ!!」

「うん。」

うん。じゃない！なんでそんなにのんきなんだよ!!今人生で一番
驚いたわホント

に！てかナイジェリアってどこだよ。

動揺する俺に、親父がさらに追い打ち。

「でな、俺、単身赴任すつから。お前転校な。」

ガタタツ!! 立ち上がる俺。：あれ、なんで立ち上がった？

「なんで転校?!?!」

「いや、お前一人暮らしさせられるわけないじゃん？心配じゃん？家
事できないじゃ

ん？彼女いないじゃん？」

「彼女いないの関係ねえ!!!」

「まあとにかく、もう決まった事だ。しょうがない。お前は転校。こ
れ決定事項。」

「ど、ど、ど、どこに!?!」

「内浦。」

「どこだよ何県だよ!!」

「静岡県。」

「なんでそんなどこに!?!」

やべえ、頭が追いつかない。どうしよう。

「いやあ、な。俺の古い友人がな。そこに住んでてさあ。この話をし
たら、おう、じ

やあ家連れて来いよ。っていうからさあ。ラッキーって。」

いやなんだよその流れ!?ラッキーじゃねえだろ!?俺その人の事な
んも知らねえん

だぞ?!?てか相手も相手だなく許したな軽いなオイイイイ!!

「てな訳で。1学期から内浦の学校な?もう転入手続きしといたから。」

「行動がハエエエエ!!!」

「あ、あと。いつ帰つてこれっかわかんないから。多分、最低でもお前が高校卒業す

るまでは帰れないけど。」

「ええええええええええええ?!?!?」

「じ、じゃあもう会えないかも…つてことかもしれん、つてことか!?!」

「おう。そうだな。」

「い、いつ発つんだよ日本を。」

「お前の春休み終わり1週間前から。」

もういいよ…なんも驚かないよ…。うん…。

「じゃ、とりあえず話は終わり。飯食おうぜ。」

「ちよ、ちよつと待て、一つ聞かせてくれ。俺の居候先の家の名前、なんなんだ

よ。」

「ん?」

「高海家。」

……平凡だった俺に突如訪れた奇跡。

これから、俺の非日常な日々が始まるのだった…

第2話 　く非日常は突然にく

俺の静岡行きが決まった事の、友達の反応を紹介しよう。

「マジ？静岡？」

「いいなー」

「埼玉より全然いいじゃん！」

「静岡でしょ？……何が？」

「……お、温泉？」

不安だ。マジで不安だ。

大体、静岡って何があるんだ？マジでわからん。しかも、内浦、だっけ。……より解

らない。何があるんだろうか……。なにかあるんだろうか……。

そうこうしているうちに、春休みも残り1週間……

「じゃ、あとはよろしくなっ。あいつによろしく伝えといてくれ。」

と言つて、親父はナイジェリアに行ってしまった。相変わらず軽い。もう会えない

かもしれないのに軽い。ちよつとウルつとしてた俺の純情な心を返せ。

「……………しゃあない、いくか。」

そういつて俺も家を出、新幹線、電車、バスに揺られること3時間。

……周りに何も無い。ホントになにもない。埼玉よりない。見渡すと海、山、民家。

ド田舎だった。

「……ここで合ってるのだろうか。」

ぱつと見、旅館だ。いや、完全に旅館だ。看板に、「十千万」と書かれている。どう

やらこの旅館の名前らしい。うん、いいネーミングだ。じゃなくて。

「……どうえ!?俺、旅館に居候すんの!」

完全に一軒家の普通の家かと思っていた俺。…あんの親父。だが、親父から貰った地図は、確実にここを指している。

「……入ってみるか。」
宿泊料金取られんじゃねえの?と思いつつ、そろりそろりと入口へ。

ガラツ 「ごめんくださいーい」

なんというか、THE 旅館て感じだな。落ち着いた雰囲気。俺、ホテルより旅館のほ

うが好きなんだよなあ。

とか思いつつ、辺りをきよきよきよしている、奥から、

「いらっしやいませ〜どうぞお越しくださいませ〜。あら?」

「ど、どうも。」

見た感じ、おっとりして、落ち着いた感じのお姉さん。黒髪ロングで、声も落ち着いてる。

「お兄さん、お一人様? …お一人の予約なんて入ってたかしら?」

「あ、いえ。今日からここでお世話になります、榮倉 翔と言います。うちの父から

話が行つてると思いますが…」
するとお姉さん、

「ああ！君が翔君？待ってたわあ。私は高海志満。よろしくね。」

と、自己紹介。よかった。場所を間違えてたわけではなさそうだ。

「ここまで来るの大変だったでしょう。なにせ田舎だからねえ。」

「いえ、3時間くらいでしたから。」

「埼玉から来た…んだっけ？」

「はい。」

「ここ、なにもなくてびっくりしたんじゃない？なにせ田舎だからねえ。」

「いえいえ、そんなことないですよ。海も山も近いですし、空気もおいしいです」

し。…それに比べて埼玉なんて。ホントに何もありませんからね。」

始まる田舎主張合戦。しかしそこで志満さん、

「あつーそうだ、家族を紹介しないとね。ちよつと待ってて。」

と言つて、奥に引っ込んでってしまった。

しばらくすると、

ホラ！ハヤクキテ！カケルクンマッテルヨ！　ワカツタワカツ

タ…　ドンナヒトカナー！タノシミダナー！

声が聞こえてきて、志満さんが二人の女子を連れてやってきた。

「じゃあ、紹介するね。私が長女の志満、この子が次女の美渡、そしてこの子が末

っ子の千歌。」

「よ、よろしくお願いします。」

三姉妹だったのか…。戸惑っていると、細目で俺の事を見ていた美渡さんが、

「へえ…。翔君？だっけ。…かっこいいねえ。」

ニヤニヤしながら見てくる。…かっこいいだろうか。

隣のアホ毛がピョン、となってるオレンジ髪の子、…千歌さんだっけ？も、目を輝かせながら、

「ホントだ!!いけめんだねえ！あ、私、高海千歌！翔くんと同じ高校2

年生だ

よ!!よろしくね!!」

と、手を出してくる。手を握ると、ブンブン振られた。おお、すごい元気っ子だな。

「あとはお父さん、お母さんがいるからね。…じゃあ、とりあえず、部屋に案内する

ね。」

と志満さん。俺は二人と別れて、志満さんの後を追った。

「この部屋を使つてね。」

6畳1間の和室だった。下は畳なのに、ベッドが置いてある。…大丈夫だろうか。

他には、テレビ、本棚、机と、なんと冷蔵庫がある。なんて便利なんだ。…だが、大

丈夫だろうか、畳。

後は窓が一つ。開けてみると、前に家の壁。…景色は拝めないと思いきや、横を向い

たら海が!おお、部屋から海が見えるとは…感動だね。

「荷物はもう届いてるから、荷ほどきしちゃってね。じゃ。」

…といって志満さんがいなくなり、俺一人に。急に静かになる部屋。かすかに波の音が聞こえる。

「…よっし。部屋作り、しますか!」

…よし完成。きれいにできた。

……というか、部屋すつかすかだな。元から荷物少なかったしな。趣味ないし。 自

分で言つてて胸が痛い。

「ダイビングとか、やってみたいなあ…。せっかく海あるし。」

と、一息入れていると、

コンコン。 誰か来た。

「志満さんかな…？ はーい、どうぞー。」

ふすまの先にはアホg…、おつといけない、千歌ちゃんだ。

「荷ほどき終わった？」

「おう。元から荷物少ないしな。すぐ終わったよ。」

すると千歌ちゃん、ニコツと笑って、

「じゃあ、内浦を案内してあげる！ 外いこっ！」

と、俺の手を引っ張る。 おいおい、元気だなこりや。

十千万を出て、海道路沿いを歩く。

千歌ちゃんは小さい堤防(?)の上でバランスを取りながら俺の隣を歩く。 …おいお

い、危ないぞ。

「そーいえば、翔君はなんでうちに来たの？」

えっ？知らないの？…逆に、なんでそんな得体のしれない男子高校生
生の事を案内して

んのキミは？

半分ビツクリ、半分呆れつつ…、てか、高海父！あなたもしっかり
説明しといてくだ

さいよ…。「男子高校生が居候に来るよ」って部分しか説明されて
ないじゃないす

か…。

さすがは親父の友人、といったところか。

とりあえず、説明はしないと。

「えっと…。俺の親父が…。」カクカクシカジカ

「ふーん、そうなんだ。」

「そう。そうなんだよ。まったく、困った親父だろ？」

「ま、でも、だいじよぶだよ！千歌は全然うえるかむだから!!」

元気に笑う千歌ちゃん。うーん、本当に大丈夫なんだろうか…。

不安になってくる。実は、この子なんも考えてないだけなんじゃ

…。

そんな俺の考えなぞ露知らず、

「そーいえば、翔君は高校、どこに通うの？」

……………あ。

「…忘れてた。」

いや待て待て、落ち着け大丈夫だ。今の時代には携帯電話がある
じゃないか。ありが

とう科学。センキューテクノロジー。

「ちよつと親父に聞いてみるわ。」

そう言つて電話をかける。プルルルル…

「ん？何だよ翔。あ、もしかしてお父上がいなくなってさみしくなつたとk…」

「んなわけねえだろ!!学校だよ学校!!俺が行く学校!どこだよ。」

「あ、すまんすまん、忘れてた。お前の行く高校な。‘うらのほし’ってんだ。」

「うらのほしィ?どこだよそこ。」

「すまん、詳しいことはそつちで聞いてくれ。じゃっ。」 ツーツーツー

「っ!おい、親父!…全く。」ピッ

「お父さん、なんだって?」

「ああ、なんでも、‘うらのほし’って言う高校らしい。」

「……えっ?」

それを聞いた千歌。何言ってるの?という顔をしている。

「おっ?何?場所知ってるの?じゃあついでに案内し」その学校はね。」

ん?様子がおかしいな。

「その学校はね……」

‘浦の星女学院’、女子高だよ。」

[.....H.C.]

第3話　く平凡な高校生の災難く

「浦の星女学院、女子高だよ。」

「……………はあああああああ?!?!?」

静かな静岡……………いや、内浦に（けして狙ったわけではないと釈明しておく）、俺の声が響き渡った……………ような気がした。

というか、ホントに響き渡ったんじゃないかねえか、ってレベルの大声を出したと思う。

それくらい、驚いた。

…いや、だって、女子高だよ?!俺、男子高校生だよ?!共学なら問題ないけど、高校名にすっかり、‘女学院’って入ってるし、完全アウトじゃん!! …いや、待て。実は俺は女だったり?

と、上半身をまさぐる。うん。特に問題ない。下は……………うん。やめとこう。千歌ちゃんの前だ。

「……………えーつと、この近辺に‘うらのほし」と名のつく高校はあったり…?」

「ないよ。大体、この辺には、浦女しか高校はないもん。」

「じ、じゃあ、そこに他に男子が通ってたりは…?」

「あるわけないじゃん!女子高だもん!」

ですよねー。

思いつく限りの事を聞いてみたが……………これは……………。

まずい。非常にまずい。

と、うんうん唸る俺。…畜生、どれもこれも親父が……………ん?親父?

そうだ!親父に聞けばいいんだ!現代には携帯という便利なものが(以下略)。

「とりあえず親父にまた電話してみる。」

と、電話をかけてみる。プルルルルル…ガチャ。

「おい、親父!!どーいうこ…:」…これから仕事の都合によりけつこうの間電話に出れません、用のある人はピー音のあとにメッセーヅどーぞ……………」

「はあああああ?!?!?」

なぜ出ない?!?つい数分前には出たじゃねえかあの親父!?

もう一度電話する。 ……駄目だ、出ない。

「お父さん、どーかしたの…?」

千歌ちゃんが聞いてくる。どーしたもこーしたもないよ。やばいよあの親父。

「……電話に出ない。留守電になってる。電話に出れないらしい。」

「ええ!?どーすんの翔君!!これじゃ学校分かんないよ!?!」

「…マジでどーしよう。」

「こ、こーなったら翔君を女装させて浦女に……」

千歌ちゃんがとんでもない事を言いだしている。いや、無理だろ。一発アウトだろそれ。

と、二人で困っていると……

バラバラバラバラ……

…ん?何の音だ? …へり?

と、音のする上空を見上げると、一機のへりが。

…つて、ちよつと待て。…近づいてきてないか?

…近づいてきてるな。…つて危ねえ!!!

バラバラバラバラ……

…ん?空中で止まった…?

「な、なんなんだ一体…?」

「…あ!?!このへり、小原家のやつだ!!」

千歌ちゃんは知っているらしい。

「…お、小原家?誰だそれ?」

俺が困惑していると、へりのハッチが急にオープン。

中から、金髪の女の子が見える。

あの人が小原家の人だろうか…?

…て、ちよつと待て。なんかジャンプしようとしてないか?

ておい！マジで飛び降りてきやがった！あぶねえなおい。

「チャオ！」

「チャオ！じゃねえ（ないよ）ー！」

二人同時にツッコむ。おお、シンクロしてきたな。

「Oh〜！仲がいいのねお二人さん♡」

「あ、あなたはなんなんですか!？」

なんか、内浦に来てからハチャメチャだな。まだ3時間くらいしか経ってないけど。

「えーつと、榮倉翔クンって君で合ってるかなあ？」

「は、はい。そうですね…。なんで知ってるんですか!？」

「だって、君、浦女に転入してくる予定の子でしょ？知ってるわよ♡」

「いや、だって俺、あなたの事知らないですよ？」

ホントに誰だこの人。だって、こんなインパクト抜群な人、会ってたら絶対忘れないと思うもん。

「あ、sorry〜！自己紹介がまだだったわね！私は、小原鞠莉よ♡浦女の3年生で、新学期からの浦女の理事長になったの♡気軽にマリー、って呼んでね♡」

「あ、榮倉翔です初めまし…ってええええ!?理事長!？」

千歌ちゃんもビックリしてる。そりやあそうだろう、だって高校生で理事長なんて聞いたことがない。大体、理事長なんてなれるのか？高校生で？

「理事長になれるのかって？そりやあモチロン、お金の力よ♡」

考えを読まれた。ぐあ、ていうか、お金で理事長になれちゃうのかよ。：大丈夫かな、あの学校。

「ま、私の事はどーでもいいのよ…。それより、翔クンに理事長として話があつて来たの。」

急に真剣な顔つきになる鞠莉さん。：いや、ていうか、色々気になつてしょうがないんですけど。

「浦女が女子高だって事はもう知ってるわよね？」

「ええ、まあ。さつき知りましたけどね。」

「そう。本来なら女子高に男子が入るなんて事はまずムリなんだけど

…。この辺に、他に高校ってないのよ。1つも。この辺、人が少なくてね…。周りの学校もほとんど廃校になっていっちゃって…。男子高校生はこの辺には1人もいない。キミがココに来るって分かった時、かなり悩んだわ。でも、ココにしか来れる場所がないなら、シヨールがないか、って、OKしちゃった♡」

「えええええ!? 軽すぎませんか!? 大丈夫なんですか!?!」

「まあ? 私立だし? 私理事長だし? なんとでもなるわっ♡」

大丈夫か理事長。

「……でも、鞠莉さんが許可してくれてなかったら、俺、プータローだったんですね。ありがとうございます。鞠莉さん。」

「礼には及ばないわぁ♡そ・れ・よ・り!」

鞠莉さんが近づいてきて、耳元でこそつと、

「今まで、彼女いなかったんでしょ? 浦女でなら選り放題よ? ハーレムね♡」

「ちよっ……!」

「じゃ〜ね〜! バイビ〜♡」

と、へりに戻って、飛び立って行ってしまった。

「行っちゃったね……」

「おう……」

ぽかん、とたたずむ俺と千歌ちゃん。

というか、それよりさ……

親父…俺の何をしゃべったんだよ……。

第4話 く平凡な高校生との遭遇く

「…一体、なんだったのだろうか。」

夕焼けに染まる空を見上げながら、そう俺は呟く。

時刻は午後5時。俺と千歌ちゃんは砂浜で立ち尽くしていた。

「ま、まあ、いいじゃん!!学校も決まったし!これで千歌と同じ学校だね、翔くん。家も同じだし…。ずうっと一緒だあ。」

にししつ、と千歌ちゃんが笑う。俺はその言葉にドキつとする。そうだ、考えてみれば俺、女子高に入るんだ…。しかも男一人。

恥ずかしい事に、俺は女子への耐性がない。彼女なんて今までいたことないし、クラスの女子とだって、最低限レベルの会話しかしてこなかった。あれ…。自分で言ってる胸が痛い。

「お、おう…。そうだな。学校でもよろしくな、千歌ちゃん。」

照れからなのか、少し早口にそう答える俺。ちくしよう、今まで女子と接してこなかった(というか機会がなかった)俺が恨めしい。

なにせ男は俺しかないのだ。…なんとか普通に対応できるようにしなくては。

「うん…よろしく!…あつ!せつかくだから学校にも行ってみる?

私、案内しちゃ…。」

千歌ちゃんの話が止まる。ん?なんだ?

千歌ちゃんの視線の先には、堤防の上を見ているように見える…。

ん?待て、誰か…。いる?

目を凝らして見てみると、制服を着た女の子が見える。なんだ…?なにしてるんだ、あの子?

と思っていると、女の子が動いた。上着を脱ぎ、スカートも脱いで、水着姿に…。…っておい!まさか…ウソだろ?

千歌ちゃんも同じことを感じたようで、

「ウソでしょ…まだ4月だよ…!?!」

…っつて、走り出した。お、おいつ!!

俺も走り出す。…間に合えつつ!!

「……たあああああああつ!!」

「待て（待って）!!」

ガシツ。間一髪……俺と千歌ちゃんがギリギリで女の子を止める。痴漢、とか言われるかもしれないが、なりふり構ってられない。

「放してっ！行かなくちやいけないのっ!!」

「待って！死ぬから死んじやうからっ！」

「と、とりあえず落ち着……!?!」

「「あつ……」」

ぼっちやーん。

「………で？4月にも関わらず海に飛び込もうとした理由は？」

場所は堤防横の砂浜。うへえ、海水がベタベタして気持ち悪い……おまけに寒い。やつぱり春とはいえ水かぶった後の風は冷たい。

「……海の音を聞きたかったの。」

と、水着姿で体育座りをしている女の子が話す。

身長は160センチくらいだろうか。キリツとした目に、赤に少し茶色がかかったような髪をストレートに下ろしている。…美人だ。

「…海の音？」

くしゅっ、とくしやみをした千歌ちゃんが聞く。…おい、マジか。水に濡れてもなおアホ毛が立ち続けているとは…。

「私、ピアノで曲を作ってるの。…でも、どうしても海の曲のイメージが浮かばなくて…。」

「へえ〜！曲を！作曲なんてすごいね！…こっちら辺の高校？」

…俺は千歌ちゃんのコミュ力の高さに尊敬する。俺、初めて会った

人にそんな事聞けねえよ…。

「…東京。」

「東京…!?わざわざ?」

「わざわざっていうか…。」

口ごもる女の子。…なにか特別な事でもあるのだろうか。

答えたくない、と感じたのだろうか、千歌ちゃんが質問を変える。

「あなた…名前は?」

「私?私は…。」

桜内梨子。」

辺りはだんだん暗くなってきている。風邪をひいてしまうから、と、梨子さんはそそくさと帰ってしまった。…結局何しに来たんだろうか。

しかし、濡れているのは俺たちも同じなので、とりあえず家に帰ろう、ということに。

「結局あの子、なんだったんだろ…。」

横を歩く千歌ちゃん。相変わらずアホ毛は健在だ。…どうやったから立たなくなるんだろうか。

「見た目からして…女子大生っぽかったように見えたけどな、俺。」

「翔くんもそう見えた!? 大人っぽかったよね、美人だったし!」

おう、やっぱり女子目線から見ても美人だったんだなあの人。…でも、ちよつと変わった人だったよなやっぱり。

そうこうしてる内に十千万に到着。…やばい、寒さの限界だ。風呂に入りたい。

だが、俺も男だ、レディーファーストの事は知ってる。

「千歌ちゃん、風呂にでも入ってきたら? 俺の事はいいからさ。そのままじゃ風邪ひいちゃうぜ?」

ホントは俺も入りたい(けて下心はない)が、客用の大浴場を使うわけにもいかないだろう。部屋の布団にでもくるまろう。

そう思つて2階に上がろうとする俺。が、千歌ちゃんが俺の服を引いて止める。ま、まさか…!?

「あ、あのさ…。そのままで翔くんも風邪ひいちゃうし…。その…。」

ま、ま、まさか…?!?!?

「一緒に入る?」

……マジすか？

第5話　くあれ？平凡どこ行つた？く

……えつと、今の状況を整理しよう。

俺は榮倉 翔。16歳、高校2年生。

親父の事で故郷を離れて内浦に来て…、千歌ちゃんと会って、鞠莉さんに会って、梨子さんと出会って…。

その梨子さんのせいで今凍えてて、千歌ちゃんに風呂を譲った。：うん、覚えてる。千歌ちゃんとはつい数時間前に出会ったばかりだ。昔からの幼馴染とか、恋人とか、そーいう関係ではない。うん、断じてない。

…それは千歌ちゃんも解っているハズだ。

…では、もう一度聞いてみよう。

「えーつと、千歌ちゃん…？い、今、何て言った…？き、聞き違いだよね？」

すると千歌ちゃん、下を向いてもじもじしながら、さつきより小さな声で…

「だ、だからね…？そのままだと翔くんも風邪ひいちゃうし…。その…、

一緒に入らない？……つて。」

…マジだった。聞き違いじゃなかった。

その瞬間、体中がボツ、と火がついたように火照った感覚に落とさ

れた。顔が熱い。おそらく、誰が見ても一発で分かるようになってくらしい、赤いと思う。前を向けない、千歌ちゃんの方を向けない。やばいやばい、何も考えらんねこんな時どうすりやいいんだ大体こんな状況人生で一回も考えたことねえよやべえええええ!!!

……どのくらいたっただろうか。

数分、もしくはたったの数秒だったかもしれない。

「そ、その……。俺、いいよ。入んなくて……。いいから、とにかくいいからっつっ!!」

沈黙を破ったのは俺だった。……ムリだ。俺にはそんな度胸ないっ!

そう言い残すと、千歌ちゃんの反応よりも早く、ドタドタと2階に上がって行く。

「えっ……。ちよ、ちよつと……!」

そんな千歌ちゃんの声が聞こえた気がするが、一度も振り返ることなく、全力疾走で自室へと戻って行くのだった……。

……

「……………」

…うわああああ俺のヘタレエエエエ!!!

「クソっ、クソっ、なんだよ俺えええ!!なんだよあの断り方!!もつと
気のきいた言い方あっただろ畜生おとおお!!!」

ぼすん、ぼすん、とベッドに顔を埋めながら叫ぶ俺。

やばい…、あれじゃまるつきり俺が意識してるようじゃん…。この
後、ドーやって千歌ちゃんと顔合わせりやいいんだよ……。

そうだよ。千歌ちゃんは善意で、親切心で言ってくれたんだろう
に、一人で勝手に意識しちゃって…。馬鹿すぎる。バカケルだ、俺。
「ホンつとに…。この後ドーすれば……。」

顔真っ赤になりながら、布団にくるまり眩く俺。どうも内浦に来て
から、「普通な日常」とは縁遠くなってしまったようだ……。

「……………翔くんのばか。」

ぽちやーん。水滴が落ちる音がやけに大きく聞こえる気がする。

従業員用（というか高見家の）のお風呂に入りながら、私は眩く。

「あのままじゃ風邪ひいちゃうじゃん…。別に、私は一緒に入ったっ
て、気にしな……!?!」

そこまで言って、ハツとする。何言っただ、私。翔くんは男の子
だ。

バシヤバシヤ、と湯船のお湯で顔を洗う。

…でも、どうしてだろう。

翔くんは、つい数時間前に会ったばかりの全然知らない人だ。趣味とか、好きな食べ物とか…、本当に何も知らない。知っているのは、名前だけ。

それなのに、初めて見たときから少し、あの男の子に惹かれていた自分がいる。

海に落ちて濡れてしまったのだから、元はと言えば、私が梨子ちゃんに向かっていきなり走り出してしまったからだ。声をかけて止める、とか方法はあったのに…。

「はあ…。私、バカチ力だなあ…。」

この感情は何だろう。色々な考えがぐるぐると頭の中を渦巻く。その思考を止めるように、ブクブクと湯船に沈んでいってしまうのであった…。

……

コンコン。扉を叩いている音がする。

「…翔くん？その…、お風呂空いたから、入って。ホントに風邪ひいちやうよ…？タオルとか、脱衣所にあるから…。」

千歌ちゃんの声が扉越しに聞こえる。心なしか、どこか、言いつらそうな感じに聞こえる。それもそうか…。俺、チキって逃げちゃった

もんな…。

「そ…それでね？さっきのこととか…私、気にしてないから！ほ、ほら、私も急に変な事言つて、翔くん混乱させちゃったでしょ？ごめんね…？…お風呂、入つてね。」

そう言つて、千歌ちゃんの気配が消える。恐らく、部屋に戻つたのだろう。

「……とりあえず、風呂入るか。」

そう言つて体を起こし、部屋を出る。服は、もうすっかり乾いていた。

第6話 くへタレな俺と天使降臨く

ぴちよーん…。

湯気立ち込める風呂場で、俺は湯船に浸かっていた。

…それにしても、広い。大浴場、とまでは及ばないまでも、3く4人で余裕で入れる広さの風呂だ。

そのデカイ湯船の真ん中で湯に浸かりながら、俺は色々と考えていた。

「…今日はすっげえ濃い1日だったな。居候先は旅館だし、こんな風呂デカイし。…それと、女子高の入学も決まったんだよなそーいえば。」

急に不安になる。…鞠莉さん、大丈夫だろうか。

「急に海に飛び込む変な人にも会ったし…。すっげえ美人だったよなあ、あの人。梨子さん、だっけ。」

何だったんだろうなあの人、と苦笑いを浮かべつつ、頭の上に乗せていたタオルで顔を拭く。

「後は…、千歌ちゃん。最初に会ったときからグイグイ引つ張ってくれたし、明るいし…。いい子だよなあ。」

あと、かわいいし。すっげえかわいいし。

「…突然、「一緒に入る?」なんて言われた時は、すっげえ驚いたけど。内浦の子たちって、みんなこんな感じなんかな?」

と、言ったところで瞬時に思い直す。ないない、そんなこと。

さっきの事だって、俺が風邪ひくから、って事で善意で言ってくれたことなんだから。

…後で、しっかり謝つとかないとな。

そう結論を出すと、ざぼつ、と思いきり立ちあがった。

.....

俺は、風呂上がりで濡れた髪をタオルで拭きながら、千歌ちゃんの部屋に向かった。

コンコン。

「千歌ちゃん？いる？俺。翔だけど。」

いまさらなんだが、千歌ちゃんの部屋つて、俺の隣なんだな。プレートに「千歌の部屋」と書いてあり、吊り下げられている。

しばらくすると、部屋のふすまが開き、千歌ちゃんが出てきた。

「あ、翔くん？お風呂入ったんだねっ。うちの風呂、広いでしょー。」
明るく出迎えてくれた千歌ちゃん。髪の毛がしっとりとしている。それもそうか、風呂入ったんだもんな。……相変わらずアホ毛は跳ねているが。

「立ち話もなんだし、入りなよっ！さ、どーぞどーぞ〜。」

「え？あつ、ちよ、ちよっ……」

するっと俺の後ろに回り込み、背中を押して部屋に促す。俺はよたよたっ、と千歌ちゃんの部屋に入った。

中に入った瞬間、ふわっ、といい香り…というか、みかんの香りが俺の鼻孔をくすぐる。…なぜみかん？

部屋の広さは俺の部屋と同じ。勉強机が端に置かれていて、部屋の中心にはカーペット。その上に、ちやぶ台が置かれている。それと本棚、ベッド。…ベッドの上に、いくつか海の生き物のぬいぐるみが置かれている。あ、こいつ何て言うんだっけ。…そうだ、ダイオウグソクムシだ。

「てきとーにすわって！あ、みかん食べる？」

そう言つてスクールバッグの中からみかんを取り出す千歌ちゃん。…学校に持つていつてるんすか。

ありがたくみかんを貰い、一粒口に入れる。風呂上がりで渴いた喉に、みかんの甘酸っぱさが広がる。…うまいなこれ。

「で？なにか私に用でもあったの？」

「おお、そうだったそうだった。じゃあちよつと失礼して…。」

と言つて、千歌ちゃんの方に正対、正座。そして思いつきり頭を打ち付ける勢いで…。

「さつきはすいませんでしたあああ!!!」

「ええええええ!!」

古き良き日本の伝統、土下座。誠意を伝えるにはこれが一番。

だが千歌ちゃん、あんぐり口をあけている。あれ、誠意が足りなかったか。よしもう一度。

「すいませんし…「もういいよっ!!!」

思いつきり止められた。

「いや、だつてさつき、思いつきり逃げちゃったし…。千歌ちゃんは善意で言ってくれただけなんだろう？勝手に一人でテンパっちゃつて俺…。」

「だ・か・ら!!気にしてないって!!…こつちこそごめんね？いきなり変なこと言っちゃつて。」

…逆に謝られた。なんだ？この子は天使か？

「わざわざそんなことのために来てくれたの…？優しいね、翔くん

は。」

なんか感謝されてる。…おかしい、悪いのは俺のハズなのに。

「いや、でも…」もういいって!!」「

「じゃあ、仲直りの握手ねっ! …はい、これで終わり!」

千歌ちゃんに手を握られ、ぶんぶん振られた。

「じゃ、そろそろご飯だから行こっか!今日は、翔くんの歓迎会らしいよ…?」

ニヤっ、と笑う千歌ちゃん。

まだ納得できてない気もする俺だが、これ以上うだうだ言っても仕方ない。千歌ちゃんと仲直りできた、それでいいじゃないか。

そう自分で思い込み、千歌ちゃんの後を追って下へと降りていくのであった…。

第7話前編　く平凡な俺とヨーソローく

4月6日、浦の星女学院の新学期前日。

俺はいつも通り、朝7時に目を覚ます。「休みの日くらい、寝ててもいいじゃん」なんて言われたりもするが、ずっと寝ていて一日を使うのはもったいない…、というのが俺の持論だ。

なので、いつも通り起き、カーテンを開ける。外は晴れやかな青空。…うん、今日もいい天気だ。

いつも起きるとすごい寝癖を直し、パジャマから着替えていると、下から志満さんの声。

「お〜い、朝ごはんだよ〜。」

はーい、と返事をし、下へと降りると、朝食がすでにテーブルに並んでいた。今日のメニューは…、おお、うまそうだ。

高海家は、基本的に全員がテーブルにそろわないと食べられないルール。すでに志満さん、美渡さんはテーブルについている。高海父、母は旅館のお客さんの朝食作りがあるので、基本的にはいない。

だから、残るは一人なのだが…。

「来ない。」

そう、アホ毛のあやつである。…いつものことだが。

「ごめんね、翔君。今日も、お願いできる?」

「…はーい、行ってきますー。」

いつも通りの志満さんとのやりとりをし、千歌ちゃんの部屋に向かう。

…そう、千歌ちゃんは寝起きが究極に悪いのだ。いつも、「明日はだいたいじょーぶだからあ〜」なんて言ってるくせに、一向に改善余地がない。

「まったく、勘弁してほしいよ…。」

はあ、とため息をつきつつ千歌ちゃんの部屋に到着。ガラっ、とふすまを開け、カーテンを全開に。

「お〜き〜ろおおお!!」

千歌ちゃんの掛け布団を引っぺがす。…最初はかなり抵抗があつ

たんだが（はいはい、ドーセチキンですよすいませんね）、1週間も続けたらさすがに慣れた。

「……………うくん、あと5分…。」

「もう下で5分待ったわああ!!」

掛け布団を引っぱがしてなお、ごろごろとベッドで抵抗する千歌ちゃん。…これを毎日やるのかと思うと、ため息がでるよまったく。

…格闘することさらに3分。

やっとこさ起き上がった千歌ちゃん。…疲れた。

「ふわあく。翔くんおはよお。」

「おはよお。じゃない!!早く下行くぞーほらほら!!」

…結局、全員がテーブルに着いたのが俺が起こしに行ってから10分後。

イライラしている美渡さんをなだめながら、少しぬるくなった味噌汁をすするのであった。

……………

「ここに来てから、もう1週間か…。」

朝食を食べ終わり、身支度を済ませた俺は、明日から通う学校「浦の星女学院」へ向かって歩いてた。

何のためかって？そりやあ明日から学校始まるし、場所の確認のためを決まってるじゃないか。…え？行くの遅くないかって？

それは1週間前に遡る。

俺が内浦に来た初日、高海家は盛大にもてなしてくれた。

特に夕食がすごかった。盛大な、食べきれないほどの量の料理。

それに舌鼓を打っていると、美渡さんが言ったのさ。

「んじゃ、今日から翔クンも高海家の一員となったことだし、…：精一杯働いてもらわないとねえ？」

ニヤリ。…俺はその笑みの意味を理解していなかった。

次の日から、俺は死んだ。

広辞苑くらいあんじゃないの？というレベルのマニュアルを読まされ、浴衣、布団、シーツの洗濯、補充、メイキングなど。

さらに大浴場の掃除、部屋の掃除、玄関の掃除。

おまけに厨房に入れられ小物料理作り、フロントでの受け付け、電話対応など…。

朝から晩まで働きまくった。…ここ、旅館だっけと忘れてたぜ。

…と、いうわけで今日まで行く暇がなかったのだ。ホントは、千歌ちゃんにもついてきて欲しかったのだが、旅館の仕事があるから、と地図だけ渡された。

…今まで、高海家だけで切り盛りしてきたんだよなそっぴいえば。改めて、凄さを感じる。

今日は1日休みにしてもらっていたのだが、少しでも負担を軽くさせるために、やつぱり手伝おう。と、急ぐために駆け足で浦の星に向かうのであった……。

第7話後編　　く平凡な俺とヨースローく

…。

……。

……………遠い。

…かなり走った。体感、7〜8キロくらい走ったんではないだろうか。

ちらり、と地図を見る。地図には、「道なりに進んで、浦の星女学院前」のバス停まで行つて、そこにある坂道を登った先」と解説が書いてある。

そうなのだ。走り始めてしばらくしてから気づいたのだが、バスが出ていたらしいのだ。なぜ、もつとよく地図を見ておかなかったのか…。正直、もう限界。卓球部にこの距離は辛すぎるぜ…。

ひいひい言いながら、さらに走ること十数分。

……………やつと見つけた。

「浦の星女学院前」と書かれたバス停を見て、安堵する俺。よし、ここまでくればあとは坂道を……………!!?!?

…見た瞬間、へなへなと俺は座り込んだ。

かなり急な坂道が目の前にはあった。……………だが、俺が見ていたのはそこじゃない。

遠くにポツン、と見える建物。あれが、浦の星女学院なのだろう。

…そう、ポツン、と見えるのだ。ポツン、と。

つまり、まだ到着には時間がかかり、おまけに坂道を登って行かないといけないわけで……。

今度から、色々なことに確認を怠らないようにしよう（特に地図）、と自分に言い聞かせるのであった……。

……

「…はっ、…はっ、…はっ、…はあっ。」

死ぬかと思った。

残りの力を振り絞り、全速力（すっげえへろへろだったが）で坂道を駆け上がり、…やっとの思いで到着。

明日は筋肉痛だな。確定で。…明日から学校なのに。

半分涙目になりつつ、校門を見上げる。

‘私立 浦の星女学院’

ぱっと見、普通の学校、という感じ。…いや、普通じゃない学校って何なのかは知らないけども。

三階建ての校舎が目の前にある。それと体育館らしき建物、校庭。

…入って行ってもいいんだろうか。

しかし、せつかくここまで来たんだ。（しかも徒歩で）少しくらい見学しても罰は当たらないだろう…、と思い、おそるおそるではあるが、浦の星女学院に足を踏み入れるのであった。

………

「うーん、駄目か…。」

早速、校舎にでも入ってみようと思ったのだが、鍵がかかっている。ガラス戸越しに校舎を覗くが、人の気配はない。

「開いてないんじゃないだろうかねえよなあ…。」

確かに、今は春休み中だが。…でも、教師だって色々仕事があるはずなんじゃないだろうか。大体、一人くらいはいるもんなんじゃないのか…？

その時、頭に鞠莉さんが思い浮かぶ。…そうだ、この理事長鞠莉さんだ。あの人なら、「今はホリデーなんだからあ、センセたちも休みましよ！休校休校♡」なんて言ってホントに休みにしてそうだ。

とりあえず、開いてない事にはしようがない。

「あ、そーいえば。ここって、プールないんかな？」

俺の通っていた小、中学校にはプールがあった。25メートルの競泳プール。暑い夏の日に水に浸かれる有り難い授業。授業のある前日は、楽しみで眠れないときもなんだかあったものだ。

そんな昔の思い出に苦笑しつつ、それとなくプールを探して歩く。…いや、別に「プールがあれば、女子の水着姿拝める！」なんて決して思っていない。うん。するとどこからか、

ぼちやーん。

何かが水に落ちた音。…でも、小石が水たまりに落ちたとか、そんな軽い音ではなく、もう少し重い感じ。

「別に雨が降った、とかそういう訳じゃないしなあ…?」

不思議に思った俺は、その音のした方へ歩みを進める。

体育館の角を曲がったところで、俺は異様な物を発見した。

白い柱が立っている。…飛び込み台だ。

なんで飛び込み台!?と思うも、プールを見つけたことの喜びで、若干ニヤケ顔になる（けてして女子の水着が（以下略）。

……ん?

その飛び込み台の上に、誰か登っている。…女の子?

「あれ…。なんかこのパターン、見たことあるよーな…。」

その子は台の端に立つと、大きく深呼吸をし、構えて……。つておい！またかよ!?

「まだ4月だつちゆうに!!どんだけ気が早いんだこの辺の子たちは!!」

疲労した足に鞭打って走り出す。…だが、その子は俺に気づくこともなく台からジャンプ。

「早まるなあああ……おおう!?!」

その子の飛び込みを見て、俺は理解した。

その子は「海の音が…」とかそういう理由じゃなく、練習で飛び込んでいるのだと。

…俺は競技の飛び込みを全く知らないから、うまく説明できないが。

空中に浮いた瞬間、足を抱え込み、そのままクルクルと前回り…1、2、3回?回った後は体を1本の線のようにピン、とはりそのまま着水。すげえ、着水音が超静か。

そういえば、さつき聞いたぼちゃーん、つて音もあの子だったんかな…?なんて思いつつ、プールへと近寄る。フェンス越しにプールを見ると、ちょうどさつきの女の子がプールサイドに上がろうとしていたところだった。

すげえ、もう一回やってくんないかな、なんて思いながらその子を見ていると、プールサイドを歩いてこつちの方へ……。ヤベ、気付かれた?

…って、あれ？フェンス5メートル前くらいで、急に歩みを止めた。
一体何を…？と思った矢先、いきなりこっち側にダッシュ。

「ちよ、ちよっ!?なにを!?」

「…とりやああああああ!!!」

と、フェンスに向かってジャンプ。そのままフェンスにしがみつくと、なんとまたいでこっち側に来た。…このフェンス、2メートルくらいあるんですけど!?」

「捕まえたっ!!覗き魔だなあ!?へんたーい!!」

「ちよっ!?待て待て、誤解だ!!」

「問答むよーう!!…どりやああああ!!」

「うわああああ!?」

どしーん。いきなり服をつかまれ、そのまま足をかけられた俺は、なす術もなく地面へ。…うおお、痛え。

「ここは女子高だよ!?キミ、男の子だよね?…なにしてんの!」

ぐい、っと詰め寄られる俺。

身長は…、155センチくらいだろうか。ボーイッシュな顔立ちに、ベージュ?に軽く白がかかった感じの髪が肩まで伸びている。癖っ毛なのだろうか、髪先端がクルクルつとしていて。ぱっちりした目。服装は競泳水着。…それもそうだ、さっきまで飛び込みやってたんだから。う…、それにしても目のやり場に困る。

「い、いや…。俺は、けして怪しい者ではなくて…。」

「じゅーぶん怪しいよ!!」

やばい、すっげえ警戒されてる。このままだとマジで警察とか呼ばれるかもしれない。…それはマズイ、転入前からそんな騒動、起こしたら絶対マズイ。

「お、俺は…!明日からここに転入することになって…。学校がどんななのか見に来ただけなんだ!」

顔を赤くしながら、なんとかさそう答える俺。するとその子は目を丸くして、

「え!?じゃあ、キミが千歌ちゃん家に来た、って男の子?」

「あ、ああ…。そうだけど。」

なんで知ってるんすか。…すると、ずずいっ!とさらに俺との距離を縮めて……って、近い近い!!

「うわあ〜!!じゃあ、キミが翔くんなんだあつ?……あ、私、渡辺 曜 っって言うんだ!よろしくね!」

すっ、と俺の手を取り、ギュツと握手。…おおう、この子、結構握力強い。

「あ、さつきはごめんね。ここ、女子高だからさく。てつきり、不審者が来たのかと思っちゃって。」

にこっ、と笑いかけてくる、えつと…渡辺さん。か、かわいい。ボーイッシュな感じにかわいさもプラス。カツコかわいいとはこのことか。

「私ね、千歌ちゃんとは幼馴染なんだ。だから、キミがここに来ること、教えてもらっててね。名前、翔くんで合ってるよね?…それにしても、イケメンだね。さつき初めて見たとき、ちよつとドキドキしちゃった。」

俺って、そんなにかっこいいんだろうか……??謎だ。

「あ、ああ。俺の名前は榮倉 翔。改めてよろしくな、渡辺さん。」

「あ、名前で呼んで!私も、翔くん、って呼ぶから!」

…何だろうか、内浦の子達って。基本的にコミュ力が高すぎやしないか?

俺、初めて会った人に、「名前で呼んでくれよ。」なんて、言えないぜ?

「じ、じゃあ…。よろしくな、曜ちゃん。」

「よろしく!翔くん!」

これが、俺と曜ちゃんの初めての出会い。

…ちなみに、旅館の事は、すっかり忘れてた。

第8話 始業前 く平凡な高校生の入学式く

……いい、痛いいい。

4月7日、午前7時。

今日は浦の星女学院の入学式だ。新学期、しかも、新しい学校。大体、漫画とかドラマとかだと、「期待と不安を胸に抱きながら……」とかいう心情なところなのだが……。

それどころじゃない。

現在、俺はベッドの上でぐったりとしている。……そう、筋肉痛だ。しかも、全身。

昨日、俺は自分の不注意により今まで走った事のないレベルの距離を、自分が出せるだけの早さで走った。

俺は小、中と卓球部だった。……そんな奴がそんな事したらどうなるか?……そう、こうなる。

しかも、走っただけなのになぜか上半身まで筋肉痛というおまけ付き。

「や、ヤバい……。冗談抜きで動けねえ……。」

昨日、寝る前から覚悟はしていたのだが。……まさか、こんなレベルの痛みだとは思わなかった。今までの中で1、2を争うレベルだ。

「せ、せめて、カーテンを……ぐふっ。」

1歩も動けない中、美渡さんが起こしに来るまで何もできない俺なのであった……。

.....

「……だ、だいじょうぶ？翔くん。」

…なんとかバスに乗ることができた俺と千歌ちゃん。一番後ろにだらくつと座る俺に、隣に座っている千歌ちゃんが声を掛けてくる。「お、おう…、なんとかか…。」

バスの中には俺たち以外誰もいない。…さすが、田舎といったところか。バスで座れなくなる、ということはこの先もなさそうだな。

傍から見ると、俺の座り方はすげえ態度がデカイ奴に見えるかもしれないが、…どうせ誰もいないのだ、今のうちに体力を戻しとこう。

ちなみに、さつきまで全く動けなかった俺がどーやって車内までこられたのかというと……。 「美渡流 筋肉回復ストレッチ」とかいいうやつをやってもらったからである。 ……思い出すだけで怖い。

…確かに、動けるようにはなったが。一つ一つのストレッチ毎に、俺の悲鳴が近所に響き渡っていたのは言うまでもない。(ちなみに、

その悲鳴で千歌ちゃんが起きた、というのは別のお話)

…と、俺は新たな環境に思いを馳せる余裕もなく、バスは浦女に向けて海岸通りを走って行くのだった。

「……………つ、ついた…。」

ヨロヨロと坂を登り切る俺。道中で拾った木の棒を杖代わりに突きながら、「私立 浦の星女学院」の正門をくぐる。時刻は…、あぶねえ、ギリギリだ。

ちなみに、千歌ちゃんはいない。俺に合わせていると遅刻してしまうかもしれないし、俺はまず理事長室に行くことになっていたので、千歌ちゃんを先に行かせたのだ。 ……正解だ、ナイス判断。俺。

玄関で靴をスリッパに履き替える。 ……ん？なんで上履きじゃないかって？

それは、昨日の夜に遡る。

「……………そういえば、俺、明日どーすりやいいんだ!? 学校の場所しか分かってねえぞ!? 制服は!? 上履きは!? 体操着はああ!?!」

…と、前日に気づいた俺。 ……が。

まるでそれを見透かしたかのようなタイミングで電話が。 ……鞠莉さんだった。

「Good evening! 1週間ぶりね♡ 元気にしてた?」

「鞠莉さん! ちようど良かった!!」

「そろそろお困りかと思って♡ 色々あるんじゃない?」

ぐあ、先読みされてた。

「俺、制服とか、色々ないんですよ。…大体、何着て行けばいいんですか？男子用の制服、ないでしょう？」

「Oh〜！それはノープロブレムよ！…翔くんには、セーラー服を着てもらおうもの♡」

「は!?!嘘ですよね!?!」

「うん、嘘よ♡」

……この人、俺で遊んでるな。

「まあ、冗談はこのくらいにして…。明日は学校に来たら、まず理事長室に来て？そこでああなたの制服とか、色々渡すわ♡」

「は、はい。解りました。」

「じゃあ、明日会いましょう♡オヤスマシ〜」

…ということなのだ。

だから、俺は今手ぶら+私服。傍から見たらただの不審者だ。…だからだろうか、坂を上ってるあたりから周りの視線が痛いのは。

「まあ、男がいるってだけで珍しいもん…。…早く理事長室行こ。」

そそくさと、理事長室に向かうのであった…。

理事長室は案外すぐに見つかった。

恐る恐るノックを試してみる。…返事がない。

「し、失礼しまーす…。」

ガチャ。 中に入った。

：おお、The 理事長室って感じた。

下には高そうなカーペットが敷かれ、左右には本棚がずらっと。正面には窓が一面で、高そうな机と椅子。

その椅子に、鞠莉さんが座っていた。

「チャオ！1週間ぶりね♡翔くん？」

第9話 1時間目 く平凡な高校生の入学式く

「…おはようございます、理事長。」

うやうやしくお辞儀する俺。…というか、中にいたなら返事してくれよ!!結構、中に入る時ビクビクしてたんだぞ!!

そんな俺の心情を悟っているのか、ニヤニヤしている鞠莉さん。…チクシヨウ、俺、めっちゃ遊ばれてるじゃんかこの人に。…俺って、そんなに分かりやすい奴なのだろうか。

そんな、なんともいえないモヤモヤを抱きながら、これまたなんともいえない顔をしていると、

「だくかくらあ、マリーでいいって♡…それに私、この学校の3年生でもあるんだから。『理事長』なんて呼ぶのは変でしょう?」

「……………解りました、鞠莉さん。」

「もおく、つれないわねえ。」

…っ、疲れる。

「…で?鞠莉さん。俺の制服とか、色々用意してもらってるって話ですけど…。」

「ああ!すっかり忘れてたわ♡……………はいっ!制服はこれを着てね!翔クン専用につった特注品よ♡」

そう言っつて机から紙袋を出し、俺に渡してくる鞠莉さん。

「おお!ありがとうございます!…正直、不安でしたよ。鞠莉さんの事だから、「制服?ごめくん、忘れちゃった♡」とか、言い出すかと……………!?!?」

紙袋から出てきたのは、グレーのスカート。…ま、まさか。

急いで残りも取り出す…っつて、おい!!思いつきりセーラー服じゃねえか!!

「思いつきりセーラー服じゃねえすかああああ!!!」

「うん、やっぱり、翔クンもセーラー服でもいいんじゃないかと思っつて♡」

「え?!?だって、昨日はセーラー服は嘘だって…!!」
「うん。嘘よ♡ ……はい、本物はこつち。」

………なんなんだこの人はああああ!!!

「も、もうマジでやめてくださいよ…、本気でセーラー服着ないといけないと思っただじやないですか…。」

「あら?別にいいのよ?セーラー服着ても。きつと似合うわよ♡」
「いえご遠慮しておきます早く制服くださいお願いします。」

鞠莉さんが机から取り出したもう一つの紙袋を震える手で受け取る俺。…も、もう大丈夫だよな?ちゃんとした男用のやつだよな?

祈るような気持ちで紙袋から制服を取り出す。

…良かった、ちゃんとした。

安堵の息をふかあく吐き、制服をまじまじと見る。

見た目は普通な感じだ。ズボンは灰色で、Yシャツに、赤いネクタイ。紺色のブレザー。…おお、俺、中、高(以前の高校)と、学ランだったから、新鮮な感じだ。

「ありがとうございます、鞠莉さん!良かった、ホントに良かった…。」
「気に入ってくれてなによりだわ♡後は、ジャージとか、体操着とか、色々この中に入ってるから! はい、どーぞ♡」

そう言っつて、これまた大きい紙袋を俺に手渡す鞠莉さん。ずしん、と重みが腕に加わる。…お、重い。

また変なの入ってますように、と祈りつつ、鞠莉さんにお礼を言う。

「それじゃ、それに着替えたら、早速2年のクラスに行つて!あなたのクラスは、1組よ♡ といつても、1組しかないんだけど…。」

そ、そうだったのか。道理で静かなわけだ…。ここに来るまでも、空き教室っぽい所、何箇所があったもんなあ…。

「わ、解りました。…それじゃあ、着替えてから向かいますね。鞠莉さん、色々ありがとうございます。」

「それじゃ、また会いましょう?グッバイ♡」

最後まで、独自のノリをしている鞠莉さんの元(理事長室)を離れ、ひとまず着替えるためのトイレを探す。

……だが、その時俺は気付いた。下手したら1番の問題点に。

「……って、女子高だよな。……男子トイレ、あんの？」

ぽかーん、とする俺。だって、そうだろう？基本的に女子しかいないのなら、男子トイレの意味ないじゃん。

「こ、これは……。もしかして、最悪の場合は……。女子トイレを使うしかないのか……？」

自分で言っただけ顔が赤くなる。……ヤバい、男子トイレを見つけないと。

そう言っただけ、一人歩きだす俺。頼む、あってくれ男子トイレ。俺はお前がいないとダメなんだ。

若干ヤバめの独り言をつぶやきながら、一人学校探検が始まるのであった……。

……

「……ここが、2年1組で合ってる……よな？」

俺は、扉の上にかけて下がっている『2-1』のプレートを見上げながら呟く。

……ちなみに。俺が理事長室を出た後、女生徒の視線を浴び続けながら学校中を歩き回った結果、……男子トイレ、ありませんでした。

ヤバいだろこれ、どーすんだよ……。と思っていたものの、歩き回っている時にすでにチャイムが鳴ってしまっていたため、これ以上遅刻するわけにもいかず。……廊下の隅っこでとりあえず制服に着替えたのだ。

「後で鞠莉さんにトイレの事は言うとして……。これ、入ってもいいのかな……？」

目の前には、ぴつちりと閉められたドア。

俺は、さつきから入るべきか、いや先生が出てきたりするまで待つべきか、ドアの前でうろうろしていた。

いや、俺が普通にこの学校に前から居て、全員顔見知りだったら、「おつはよーございまーす。すいませーん、遅刻しましたあ。」なんて、軽いノリで入ることはできるさ。

でも、今の俺の立場は別の学校から来た転入生。……そんなことで、きるわけがない。

……でもなあ、遅刻したのは俺の責任だし、ここは自分から、いやいやでも……。とかうんうん唸っていると。

キセキダヨ!! 声が教室から聞こえてきた。……ん？千歌ちゃんの声？

なにが奇跡なのかは分からないが、その声で謎の勇気が少し出た俺

は、

「ええい、ままよっ！」

勢いでガラっ、とドアを開ける…

……なんだこの光景は。

目の前に広がっていたのは、東京に帰ったハズの桜内 梨子と、なぜか立ちあがって「おお、ジュリエットよ。」みたいなポーズをしている千歌ちゃんと、いきなり入ってきた俺に向けるクラスのみんなの奇妙な視線＋顔だった……。

第10話 2時間目 く平凡な高校生の入学式く

…………ど、どうすれば。

ドアを開けてから3秒。このカオスすぎる教室の光景+空気に、俺の脳内の緊急サイレンがウーウー鳴り始めている。

目の前の壇上には、突然の俺の登場で驚いたような顔をしている梨子さん。

そして教室の後ろの方の席には、立ちあがっている千歌ちゃん。…おい、いつまでロミオポーズしてる気だ。いいかげんその腕を下ろしてはくれないか。

さらに、千歌ちゃんの隣の席に座っているのは、昨日プールで会った、曜ちゃん。…あの、なんでジト目で見てるんですか。俺、この状況でどうしたらいいかわからないんですけど。

…………さらに固まること10秒。

俺が教室に入ってから、誰も一言も発する事のないまま時間が過ぎる。

このままだと、何時間でも膠着状態が続いてしまうんじゃないかと、と思っただけ。

梨子さんの隣に立っていた先生が、動いた。

「さ、さあ！桜内さんは、高海さんの前の席が空いてるから、あそこに座ってね。…それと、榮倉君。次はあなたの番よ。こっちに来て。」

その瞬間、まるで止まっていた時が動き出したかの様な感覚に陥った。体中こわばっていた筋肉の力が抜け、脳内サイレンも鳴りやむ。…ああ、ありがとう先生。あと、梨子さんと千歌ちゃんとの存在が強すぎて忘れててごめんなさい。

「は、はい。」

先生に促され、梨子さんが席に向かう。席の方を見ると…、やつと千歌ちゃんも座ったようだ。席に着いた梨子さんと小声でなにか話

している。…って、曜さん？なぜ、あなただけ俺に対するジト目が継続されているんですか。俺なんもしてないじゃないですか。

そんなジト目（＋クラスの視線）を浴びながら、梨子さんがいた壇上へ向かう。

「さ、さあ。自己紹介をしてね。」

先程の沈黙を打ち破ってくれた救世主様に促され、クラスのみんなの方向を向く。…うっ、クラスのみんなの視線が痛い。

膠着状態が解けたとはいえ、微妙な空気感はいまだ残っている。…まあ、当然だろう。転校生が来ることは、まず貴重だろうし、それが同時期に二人、しかも俺は「男」なのだ。みんなが警戒するのも無理はない。

…くっ、切り出しづらい。

しかし、これ以上延ばしてしまっても、より苦しくなるのは明白だ。心の中でそう感じた俺は、口を開き…

「埼玉県から来ました。 榮倉 翔 といいます。これから、よろしくお願いします。」

軽く頭を下げながら、そう言い切る。…よし、言えた！出来たぞ俺！良く頑張った！

…と、少し安堵して顔を上げると。

は?? と首をかしげているクラスの人たち。な、なぜだ!?!ちゃんと名前言ったぞ!?!なにかおかしい所あったか!?

と、しどろもどろしている俺に、先生が横からこっそり耳打ちする。

（榮倉君。…なんでこの学校に来たのか言わないと!）

…ああ。

そうだった。ここは「女子高」。基本的に男がいるのはおかしいのだった。

「え、えつと…。父親の転勤が理由で内浦に来ることになりました

クラス全員からの視線を浴びながらの俺の説明は、実に10分以上

続くのであった……………。

……………

「な、なんとか乗り切った……………」
椅子に座りながらため息をつく俺を、両隣りに座っている千歌ちゃん、曜ちゃんがクスクス笑う。

場所は変わって体育館。入学式に出席するために、あの後すぐに移動したのだ(俺の自己紹介、もとい釈明が長すぎてすぐ移動になった、というのは別の話。)

「転入初日から、遅刻するのが悪いんだよっ。」

教室ですつと俺をジト目で見つけてきた曜ちゃん。…ちなみに、なんでジト目で見てきたのか聞いたところ、「男の子のクセに、自分から動かなかったから。」らしい。

…いや、だつて女子の視線が痛かったんだもん。緊張してたし。あんな空気だつたし。

俺の考えてることがバレているのか、軽いジト目をしてくる曜ちゃん。…はいすいません、言い訳しません。

「そ〜そ〜。さっきの話もすつごく長かつたし！一言、『チカの家に住んでます。』でいいじゃん。」

「余計誤解を招くだろうがっ!!」

さらに俺が口を開こうとしたところで、体育館内に先生のアナウンスが流れる。…どうやら、式が始まるようだ。

「新入生、入場。」

パチパチパチ、と拍手を浴びながら、1年生たちが体育館内に入ってくる。…お、おお、少ないな。

ざつと見て40人弱くらいだろうか。約一クラス分か…、俺はそんな事を考えながら、少しの期待を持って男子を探す。

…が、いるわけもなく。

大きめの制服の裾をつかみながら、どことなく緊張した表情の新入生たちは次々と着席していく。

「かわいいね〜。新入生たち!…特に、あの子達。かわいいなあ〜。」千歌ちゃんが俺の制服を引っ張り、指を新入生の方に向ける。

その先には、赤い髪のツインテールの子と、その隣の薄い茶色の髪を下ろした子の後頭部が見える。

「そ、そうなのか?…良く見えたな。俺たちの横を通ったのって、つい数秒だろ?」

「にっし、かわいい子には目がないのだよ♡」

……。
全校生徒、約100人。全員の声が、体育館内に響き渡るのだった

第11話　　廃校とスクールアイドル

「なんて理事長だあの人……。」

筋肉痛の足をさすりながら、帰りのバスに揺られる俺、千歌ちゃん、曜ちゃん。　　：ちなみに、俺が真ん中で、両隣りに二人が座ってる。両手に花とはこのことか。

「ほんとに統廃合になるのかな……？」

ボソツ、と呟く曜ちゃんの声が、誰もいない車内に少し響く。

「さあなあ……。俺、この町に来たばかりだから良く知らんけど、：そんなに人が少ないのか？」

「うん……。翔くんも、浦女以外の学校が全部廃校になったのは知ってるでしょ？だから、ついに順番が来たのかもね……。」

正確には『統廃合』だから、どっかの学校とくっついて新しい学校になるのだろうが、それでも浦女の校舎には通えなくなってしまうのだろう。

そのことにショックを受けているのか、千歌ちゃんも肩を落とし、下を向いたままだ。

が、いきなり肩が震えだして……。　　ん？なんだ？どうして……

「奇跡だよ……!!!」

ガバツ！と顔を上げた千歌ちゃんが叫んだ。　　：おい！バスの中だぞ!!

「ど、どうした千歌ちゃん!?　　ん？、なんかさつきも聞いたような……。」

あれ、デジャブかな。

「統廃合って！あれだよね、廃校と同じ事だよねえ!？」

「そ、そうだけど……。なんで嬉しそうにしてるの千歌ちゃん!？」

と、隣に座っている曜ちゃんのツツコミ。

「これって、『あの伝説のスクールアイドル』とおんなじ状況じゃん!!　　まさに、奇跡だよ……!!!」

そう叫びながら、俺の肩を掴み、ぐわんぐわん揺らす。　　：おい！だ

から車内だつて！

「奇跡だよ〜!!」

「落ち着けつつの!!!」

流行語大賞でも狙つてんのか、つてレベルで連呼する千歌ちゃんを
曜ちゃんと二人で抑えながら、帰路に着くのであった…。

……

「はああああ……、疲れたああ……。」

場所は変わつて千歌ちゃんの部屋。ちゃぶ台を三人で囲んでいる。

「…で？何が奇跡なんだ？千歌ちゃん。」

志満さんが持ってきてくれた熱い茶をすすりながら尋ねる。

「…え!?分かんないの!?この奇跡な状況が!!」

「うん、さつぱりわかんない。」

曜ちゃんとおぼちりハモる。 …おお、息が合ってきたな(??)

「あれだよ…あのポスターの人たち!『ユーズ』だよ!」

ゆ、ゆーず?

千歌ちゃんの指さすふすまを見ると、9人の女の子がポーズをとつ
ているポスター。左下に『μ s』という文字が記されている。

「この人たちが『ユーズ』っていうのか?」

「ええ!?知らないの!?伝説の9人だよ!」

「ごめん、知らない。」

またハモる。

「…で？その人たちがなんなんだ？」

「この人たちが通ってた高校、『音ノ木坂学院』もね、廃校の危機だったんだって。…でもね！この9人がスクールアイドルを始めて、『ラブライブ』で学校を有名にしたことで、廃校を阻止したんだよ！」

『ラブライブ』、『スクールアイドル』。聞いたことはある。

『スクールアイドル』…。芸能事務所を通さず、学校の中で結成されるアイドルの事…だった気がする。ご当地アイドル的な感じなのだろう。

『ラブライブ』…。そのスクールアイドルたちの頂点を決める大会…だったっけ？

「その人たちは第二回『ラブライブ』で優勝。知名度が一気に上がった事で廃校がなくなったんだって。…私、ファンなんだあ。」

ふーん…。この人たちが優勝したのか。『ラブライブ』が開催されていた事は知ってたけど、別に興味はなかったし、特に気にもしてなかったな。

…というか、思ったんだが。

これを言っちゃ怒られるかな、なんて思いつつ、千歌ちゃんに意見。「この人たち…、確にかわいいけどさ。なんというか…、『普通』じゃない？」

そう。普通。

一目見たとき、「ん？」って思った。ステージ衣装っぽいものを着て、ポーズを決めているから、アイドルの類なんだろうなあ、とは思った。…でも、なんというか、『普通』なのだ。かわいいはかわいい。だが、オーラがない。そんな感じ。どこにでもいる、普通な女子高生な印象だ。

そんな俺の感想を聞いて、千歌ちゃんが少しうつむく。…やばい、怒らせたかな。

「だから……衝撃だったんだよ。」

そう言つて、スマホを取り出す千歌ちゃん。動画アプリを起動し、俺たちにある動画を見せてくる。

『START・DASH!!』

「マジか…。」

「すごい…。」

動画を見終わった俺と曜ちゃんは、衝撃を受けていた。凄いい。

見た目は、本当に普通の女子高生なのだ。なのに、歌、ダンス、表現力、すべてが見ていて圧倒される。

本当は、「凄い」なんて一言で表しては失礼なのだろうが、それしか出てこない。…それくらい、感動した。

「この動画を見て以来、私、大ファンになっちゃった。すごいよね…、おんなじ女子高生なのに。すごいキラキラしてた。優勝したのも納得だよ…。」

千歌ちゃんの目が凄いい輝いてる。相当憧れてるんだな。

「ああ、確かに凄い。…でな、俺、千歌ちゃんの言いたいこと解ったわ。」

「あ、翔くんも解った？奇遇だねえ、私も。」

と、二人して千歌ちゃんの方に向き直る。

「スクールアイドル、始めよう！」「としない（か）!?!」

…やっぱりか。

これが、『奇跡の物語』のまだ序章であることは、まだ翔は知らない。

第12話　く平凡な高校生と勧誘く

「……で？本気でやろうと思ってるのか？」

時刻は午後6時半。曜ちゃんは、終バスが来るから、とついさつき帰って行った。…さすが田舎だな、終バスが超早い。

「うん！　こんな偶然、もう神様が「やれ」って言ってるようなもんだよ!!　明日、すぐに部活を立ち上げる!!」

「ま、まじ…?」

いつもながらに思うが、千歌ちゃんの行動力には驚くものがあるねまったく。…いきなり明日からって、すげえな。

「ち、ちなみに…。もう部員のアテがあつたりは？」

「……へ？」

ぽかーん、とする千歌ちゃん。…ああ、なんも考えてなかったんだな。

「ま、まあまあ！明日から勧誘していけばいいよ!!　なんとかなるなんとかなるっ！」

…ホントに大丈夫なんだろうか。

「翔くんも手伝ってね!　…なんてったって、男の子の転校生だし？　目立つ事間違いなしだもんねえ。」

「ま、マジすか…。」

ぐへへ、と笑う千歌ちゃん。…もしかして、最初から俺を使う気満々だったんじゃない。

「じゃ、明日は早く起きてね!　あつ、曜ちゃんにもメールしとかなきゃー!」

そういつてスマホに向かい、メールを打ちこんでいく。

「ホントにやるのか…。」

不安な気持ちでいっぱいになるのであつた…。

.....

ピピピピツ、ピピピピツ……。カチツ。

眠気で重い瞼をこすりながら、いつもより一時間早い起床になんとか成功する俺。カーテンを思いっきり空ける。 ……うん、今日もいい天気だ。

「さて……。いいだしつペは起きてるといいんだけどな……。」

そういって、パジャマ姿のまま隣の千歌ちゃんの部屋へ。 ガ
チャ。

…まあ、予想はしてたけどさ。

相変わらず、起きる様子もなくベッドで安らかな寝息を立てている千歌ちゃん。

「ったくもう……。しょうがねえな。」

そう言って、今朝も眠れるアホ毛との格闘戦が始まるのであった……。

「まったく……。自分で言い出した日くらいは起きようぜ……。」
「えへへ……。」

いつもより約45分早いバスに何とか間に合い、息をつく俺と千歌ちゃん。千歌ちゃんの小脇には、『輝け！ スクールアイドル部（仮）大募集!!』と書かれたチラシ。

…これを昨日、いきなり作り出すとか言い出すからなあ。結局、日をまたぐまでかかってしまったため、いつもよりか眠い。

「だって、早い方がいいでしょ？ ああ…、楽しみだなあ〜！」
「そうだな…、はあ…。」

果たしてうまくいくのだろうか。不安で仕方ないまま、バスは今日も浦女へ向かう。

………

「スクールアイドル部でーすっ!!」

校門の前、絶好のポジションをとった俺と千歌ちゃんと、途中から合流した曜ちゃん。

「お願いしまーすっ!」

「お願いしまーす…。」

なぜかノリノリでチラシを配る曜ちゃんを尻目に、俺も登校してくる生徒たちにチラシを配る。

その俺たちの後ろで、どっからか持ってきたみかんの段ボールに乗り、これまたどっからか持ってきたメガホンで、千歌ちゃんが声掛けをしている。おでこには、『スクールアイドル愛』と書かれたハチマキ

をしている。

「あなたも、あなたもっ！スクールアイドル、やってみませんか？」

「輝けるアイドル!!」

「スクールアイドル〜!!!」

ぴゅおおおお……。。

「全然、受け取ってもらえなかったよ……。」

「俺もだ……。」

がつくしうなだれる俺たち三人に、少し冷たい風が吹き込む。

「……おっ?」

何かに気づいた千歌ちゃんが、顔を上げる。

つられて見上げた先には、赤色の髪の毛のツインテールの子と、薄い茶色の髪の毛の女の子。

「美少女……?」

思わず声が漏れる俺と曜ちゃん。……ってあれ、千歌ちゃんがいな……!?

「あの一!」

「ずら!?!」 「ヒギツ!?!」

「スクールアイドル、始めませんか!?!」

瞬間的にその子たちの前に立ち、チラシを見せる千歌ちゃん。は、早い。そして距離が近い。

鼻がくつつついてしまうんでは、という距離までずつ、と接近する千歌ちゃん。……おいおい、二人がめっちゃ驚いてんじゃねえか。

「だいじょーぶ!悪いようにはしないから!あなたたち、きつと人気が出る!」

「で、でもマルは……。」

困っている薄い茶色の髪の毛の子。ちらつ、と後ろを見る。そこには、チラシをガン見している赤い髪の毛の子が。

「興味あるの!?」

嬉しそうに、その子の手を取ろうとする千歌ちゃん。…指先が軽く手に触れたその時。

「……………び、ピギヤアアアア!!!」

みるみる顔が赤くなり、いきなり叫びだした赤髪の子。…うおっ!?
なんだ!?

「ルビィちゃんは、究極の人見知りずら…。」

茶色の髪の子が、ボソツ、と呟いた瞬間。

ガサガサっ!!

…ん?なんだ?頭上の木から音がしたような…って!?

「きやあああああ!!!」

すたっ。木の上から落ちてきたのは、これまた大層な美少女。…親方、空から女の子が。

「うううう…足… …ぐえっ!!」

さらに、その子の頭上から、飛○石ではなく、バッグが。見事その子の首筋に直撃。…だ、大丈夫か?

「い、色々大丈夫…?」

心配そうに恐る恐る近寄る千歌ちゃん。その瞬間。

ギランツ!

いきなり、目がキリツとなったその女の子。青と紺の間のような髪の上に鞆を乗せながら、「ふ、フフフフ…」といきなり笑いだす。

…変な所でも打ったんじゃ?

「ここはもしかして…、地上?」

「…「うえっ!」」

「…「だ、だいじょぶじゃ…ない…。」」

ヤバい奴だ。全員がそう感じたに違いない。

「ということは、あなたたちは下劣で下等な人間ということですか…?」

「うわっ!」

思いつきり引く曜ちゃん。

「それより足…。大丈夫?」

っん、と足をつつく千歌ちゃん。びくつと足が反応する。…絶対痛がつてるな。

「痛っ…！たい訳ないでしょう？この体は単なる器なのですから。」

「おお、まだ突き通すか。」

「ヨハネにとつては、この姿はあくまで仮の姿…。…おおつと！名前を言ってしまったね…私は、墮天使ヨハ「善子ちゃん!!」」

…ん？

「やっぱり善子ちゃんであ〜！花丸だよ！幼稚園以来だねえ〜！」

「は…な…ま…るう!? に、人間風情が、何を言つて…」「じゃ〜んけ〜ん、」

「ぽんっ！」

唐突に始まるジャンケン。花丸…？ちゃんがグー。善子？ヨハネ？ちゃんが出したのは…。

なんだこりや。

今まで見たこともない、指がぐにやぐにやしている手。…こりやなんだ？チヨキ？

「そのチヨキ…！やっぱり善子ちゃん!!」

「善子ゆーなあ!!」

「いい？私はヨハネ。…ヨハネなんだからねえ〜!!」

そう言い残すと、脱兎のごとく逃げていくヨハネ(善子?)ちゃん。

「あつ！善子ちゃん！」 「マルちゃん!!」

「善子ゆーなあ〜!!」

それを追いかける二人。…あつという間にいなくなってしまった。

「「あの子達…。」」

「後でスカウトに行こう！」 「何者なの(なんだ)？」

ええ…。

そつちかよ、と二人で千歌ちゃんを苦笑いしながら眺めつつ、さて、とりあえず教室に行こうか、と歩きだそうとすると。

「あなたたちですの？このチラシを配っていたのは。」

不意に、後ろからの声。

「いつ何時、スクールアイドル部なるものがこの浦の星女学院にできたのです?」

振り返ると、そこには黒髪ストレート、前髪ぱつっんの美人さん。
ん?…ちよつと待て、タイが緑色、ってことは…。

「あなたも一年生?」

のんきなトーンで問いかける千歌ちゃん。おい、違うぞ、その人は多分…。

「千歌ちゃん!違うよ、その人は新入生じゃなくて、三年生。しかも…。」

コシヨコシヨ、と耳打ちする曜ちゃん。…やっぱり三年生だったか。だが、なんだ?最後の部分がよく聞き取れ…。

「嘘つ…!? ……生徒会長!?!」

…終わった。

まだ設立もしてないのに。

第13話　く平凡な高校生と申請書と転入生く

「…で？設立の許可どころか、申請書も出さないまま勧誘活動をしていたんですの？」

生徒会長に強制連行され、生徒会室まで連れてこられた俺たち三人。目の前では、椅子に座りながら大きな机に頬杖をついて、こちらをジツ、と見つめる生徒会長。その机の上には、千歌ちゃんの名前一人が書かれた申請書が。

「いや、悪気はなかったんです。ただ、部活動の勧誘期間だし、いいかなって。」

えへへ、と笑いながらごまかす千歌ちゃん。

…確かに、入学式から一週間は勧誘期間らしいのだが。さすがに、まだ部活として申請もしてないのにやってるのはまずいだろう。俺と同じ事を思ったのか、小さくため息をつく生徒会長。…机の申請書に目を落とし、千歌ちゃんに問いかける。

「…部員は何人いるんですの？ …見たところ、ここには一人しか書かれていませんが。」

「今のところ…。一人です。」

後頭部を掻きながら、言いづらそうにそう答える千歌ちゃん。…ホントに他にアテがなかったんだな。

それを聞いて、生徒会長がワナワナし始める。手に持っている申請書が、軽くクシャクシャになる。…ヤバい、怒り始めたぞ。

「…部の申請には『最低五人以上』必要なのは知っていますわよね？」

それを聞いた千歌ちゃん。ヘラヘラっ、と笑いながら、
「だ〜から勧誘してたんじゃないですかあ〜！」

バンツ!!

申請書を机に叩きつける生徒会長。…ヤバい、相当御立腹だ。

それでも、怒りを爆発させることはなく、(それでも相当ギリギリっぽい) 静かに立ち上がった生徒会長は、千歌ちゃんを指さし、

「……とにかく。こんな不備だらけの申請書、受け取れませんわ。」

冷静を装って静かにそう告げる。

「ええ〜!!!」

思いつきり不満を言う千歌ちゃん。おい、やめろ! 火にガソリンをぶちまけるような事するんじゃない!

(千歌ちゃん、一回戻ろう?)

(そうそう、一回戻って態勢を立て直そうぜ。)

左右からコソコソつと耳打ちする。

「…わかりました。じゃあ、五人集めてまた持ってきます!」

俺たちの説得に納得したのか、千歌ちゃんはそう言うのと、

「しつれいしました!」

少し強い口調でそう言っつて、生徒会室から出て行ってしまった。

…っつておい!! 俺たちを置いてくなよ!!

「…し、失礼しました。」

俺と曜ちゃんも、冷やかな目の生徒会長の視線を浴びながら、そそくさと生徒会室から退出するのであった…。

「はあくあ……。五人かあ……。」

教室に向かって歩いていく途中、千歌ちゃんがため息交じりに呟く。

「もうおおっぴらな勧誘はできないしね……。」

と、隣を歩く曜ちゃん。…確かに、少なくとも校門の前であんな風に勧誘するのは不可能だろう。100%生徒会長にまたなにか言われるに決まってる。

「あの生徒会長も、なんか怖そうな感じだったしな。」

仮に、五人揃えたとしても、本当に承認されるかどうか怪しいものだ。

…と、不安な雲行きのまま、教室に到着。

「あっ!!梨子ちゃん!おっはよー!」

教室に居た梨子ちゃんの姿を捉えた瞬間、一気に表情が明るくなる千歌ちゃん。…おいおい。

「まあ、千歌ちゃんだしね……。」

…梨子ちゃん、おっはヨーソロー!

軽く笑う曜ちゃんも梨子ちゃんに挨拶。…っておい、なんだそのユ

ニークな挨拶は。

「おっす、梨子ちゃん。」

と、俺も軽く挨拶し、自分の席に着席する。因みに席は梨子ちゃんの隣。後ろには曜ちゃん、右後ろには千歌ちゃん、という感じだ。窓際の席なので左には誰もいない。：うーん、日が差し込んで気持ちいい。

「お、おはよう。千歌ちゃん、曜ちゃん、榮倉君。」

まだ慣れない環境に戸惑っているのか、しどろもどろそう答える梨子ちゃん。：って、俺も転入生なんだけどね。

「昨日は梨子ちゃんの周り、凄かったねえ。色んなこと聞かれたでしよ?。」

「う、うん。まあ…、ね。」

曜ちゃんの問いかけに、少し俯き加減にそう答える梨子ちゃん。：確かに昨日は凄かったな。

入学式が終わり教室に戻って早々、クラスの女子たちに囲まれていた梨子ちゃん。結構大変そうだったな。：え?俺のところには来なかったのかって?うん。一人も来なかったよ。：あれ、また目から汗が。

「そのせいで昨日は梨子ちゃんとなんにもできなかったんだから!梨子ちゃん、今日は一緒に帰ろーね!」

明るく笑う千歌ちゃんに、少し困ったような、でも嬉しそうな表情をする梨子ちゃん。：う、かわいいな。

「いや、それにしても、梨子ちゃんが高校生だなんて思わなかったよ!絶対大学生くらいだと思ってたもん!」

「そ、そんなことないよ。」

少し頬を赤らめ、胸の前で手を軽く振る梨子ちゃん。：うーん、大人っぽいなあ。

美人で、かわいくて、プラスおしとやかそうで。完璧だな。

「やっぱり、東京の子は凄いいええ。：ね、梨子ちゃんは東京の何高校に通ってたの?」

千歌ちゃんの明るさで緊張がほぐれたのか、少し表情が緩む梨子ちゃん。

「え？私を通つてた高校…？ 言つても解らないと思うけど…『音ノ木坂学院』っていう所。」

それを聞いた瞬間、千歌ちゃんの目が思いつきり開いて…、

「き、奇跡だよおおおおお！！！！」

いきなり叫ぶ千歌ちゃん。…おい！だからうるさいって！
すると千歌ちゃん、梨子ちゃんの手をガバツ！と取つて、

「じ、じゃあ、梨子ちゃん、あの『ユーズ』と同じ学校に通つてたつてこと!?!」

「ゆ、『ユーズ』？」

「『ユーズ』だよ、『ユーズ』！ あの、伝説のスクールアイドルの!!
すると梨子ちゃん知らないのか、首をかしげて、

「す、スクール…アイドル…?」

困つたように聞き返す。

「えっ!?知らないの!?スクールアイドルだよ!?!」

「ご、ごめんなさい。私、ピアノばかりやってきたから…、そういうのに疎くて。」

おお、ここにもいたか、知らない人。…実は、スクールアイドルつて、そんなにメジャーじゃないんじゃない?

「じゃあ、見せてあげる! ……はい、これが『ユーズ』だよ!」

そう言つて、スマホのフォルダから、ユーズの写真を出し、梨子ちゃんに見せる千歌ちゃん。

「え、えつと…。なんとというか…、普通?」

キタ。俺と全く同じ反応に、思わず内心ガッツポーズ。俺の感性は間違つていなかった。

「そ、そんなに普通かなあ…?」

二回も同じ感想を聞いて、さすがに少しダメージをくらったらしい千歌ちゃんがどよーん、と落ち込む。

「あ、いや、そんな悪い意味じゃなくてね…？ほら、『アイドル』っていうくらいだから、もつと芸能人みたいな感じだと思ってる…。」

気を使い、フォローを入れる梨子ちゃん。

「だからね…。衝撃だったんだあ…。」

同じ説明を繰り返すことになり、少しうなだれる千歌ちゃんを、何とも言えない表情で見つめる梨子ちゃんなのだった。

……

「……っていうことでね、この人たちは凄いだよお。」

場所は変わって帰りのバス。あの後、すぐに始業のチャイムが鳴ってしまい、話すことができなかつた千歌ちゃんは、さぞかし悶々としていたことだろう。

今日までは午前中までの授業なので、その嬉しさがあるのか、さほどダメージは残っていないように見える。良かった良かった。

「…へえええ。私の通ってた学校にそんな凄い人たちがいたなんて…。」

少し驚いた様子の梨子ちゃん。…でも、意外だな。そこに通ってたのなら、なにかユーズの人たちが残した物、とかありそうだけどなあ。
「…だからね、これはもう奇跡なんだよ、運命なんだよ！　だからね…。」

「スクールアイドル、しようよおお…。」
「ごめんなさい。」

…このやり取りも11回目か。『スクールアイドル』の存在、それを作ろうとしている、という説明を梨子ちゃんが受けてから、もう11回も千歌ちゃん、勧誘をしている。

…まあ難しいだろう。何も知らない土地に来たばかりで、不安もいっぱいだろうに、いきなり『スクールアイドル』になる、なんて普通の人ならムリだろう。それに、梨子ちゃん、性格的にも難しそうだし。

かわいいんだけどなあ、と内心思いつつ、もう12回目に突入している勧誘の様子を曜ちゃんと苦笑いで見つめていると。

『次は、十千万旅館前。お降りのかたは、ブザーを…。』

アナウンスが流れてくる。…おお、もう着いたのか。

「ほら、千歌ちゃん。勧誘もいいけど、次で降りるぞ。…そういえば、梨子ちゃんは、どこで降りるんだ？」

同じバスを使うこと自体驚いたが、まさかここまで一緒にとは…。もしかして俺たちに合わせているんじゃないかと思ひ、聞いてみる。

「あ、私もここで降りるの。」
マジか。凄い偶然だな…。

と、『偶然の出来事』に目を輝かせるアホ毛が一人。

「奇跡だや…。」
「言わせないぞ?!?」

千歌ちゃんの口元に手を持っていき、発声をガード。…軽く不満そうな顔をしているが、キニシナイ。

なんとか言わせることなく、降車に成功。千歌ちゃんの口を解放し

てやると、なにか言いたげな顔をしているが、ムシムシ。バスデオオキナコエダメネ。

「梨子ちゃんは、どこに越してきたんだ？」

くるっ、と梨子ちゃんの方に振り向き、問いかける。…背中から視線を感じるが、ムシムシ（略）

「えつと…。あの家なの。」

スツ、とある方向へ指をさす。その細くて白い指が指していた場所は…

なんと。

「十千万の隣じゃねえか…。」

度重なる偶然に驚きを通り越して感動すら覚え始める俺。…

はっ！しまった！

「…：…：奇跡だよおおおおお！！！！！！」

俺の背中から、すっげえ大きな声。さつき俺が防いだ鬱憤もあるのだろう。いつもより2割増し大きく聞こえる。…うるせえ！

「これはもう、神様からのお告げだよ！やろうよお、スクールアイドル！！」

「ご…：、ごめんなさいい…。」

13回目となる勧誘の様子を、ため息をつきながら眺める俺と、苦笑いの曜ちゃんなのであった…。

第14話　く勧誘と嫉妬とヨーソローく

「あーあ…。梨子ちゃんに逃げられちゃったなあ…。」

「いや、そりや1日にそんな回数詰め寄ったら、さすがに逃げるだろ。」
ピアノの稽古があるから、とそそくさと家に帰ってしまった梨子ちゃんを見送った後。俺たちはまた、千歌ちゃんの部屋に上がっていた。

…梨子ちゃん、多分ピアノの稽古を口実に逃げたかったんだろなあ。と思いつつ、ちゃぶ台にだらくつとしている千歌ちゃんを見る。

「…よし！明日こそ、梨子ちゃんに入ってもらおうように頑張ろう！」

翔くんと、曜ちゃんも手伝ってね！」

「おいおい、マジかよ…。」

少しは自重、という言葉を学んだらどうなんだい？

梨子ちゃんもご愁傷さまで、と軽く桜内家の方に心の中で手を合わせる。

「あはは…。」

曜ちゃんは、相変わらずの苦笑い。…きつと、小さいころから一緒にいて千歌ちゃんの性格を熟知しているのだろう。どことなく、「千歌ちゃんだもんね。」感が表情から出ている。

「よーし！そうときまれば作戦会議だ！明日は、1年生のあの子達のところにも行かなきゃだしね！」

「う、うん。　そうだね…。」

相変わらず明るい感じの千歌ちゃん。曜ちゃんも、それにつられて笑う。

…だが、俺はその曜ちゃんの笑顔が、いつもと違う感じがしてならなかった。

(…なんだ？気のせいかな…?)

ついこの前知り合ったばかりで、気のせいかな。と思いつつも、俺

はその曜ちゃんの笑顔が、無理に笑っていたような気がして気になったまま、千歌ちゃん主催『スクールアイドル部結成のための会議(仮)』に、耳を傾けるのだった。

……

「……あつ。もうこんな時間。今日は帰るね。」

時計を見上げた曜ちゃんがそう俺たちに告げる。時刻は6時半。
…ああそうか、この辺は終バスが超早いんだっけ。

「うん！また明日ね！よーちゃん！」

「うん、ばいばいっ！」

手をブンブン振る千歌ちゃんに苦笑しながら、曜ちゃんは部屋を出て行った。一瞬静まり返る部屋。…俺はさつきから気になってた事を千歌ちゃんに聞いてみることにした。

「なあ、千歌ちゃん…。今日の曜ちゃん、なんか変じゃなかったか？」

「ふえ？そう？そんな感じはしなかったけど…？」

きよとん、と首をかしげる千歌ちゃん。…うーん、千歌ちゃんがそう言うなら、やっぱり気のせいかな？

…否、やっぱり気になる。

「すまん千歌ちゃん、俺、曜ちゃんの事ちよつと送ってくるわ。後片付け頼んだ！」

「…えっ!?ちよ、ちよつとー!翔くーん!!」

そう言うのと、すぐさまブレザーを羽織り、部屋から抜け出す。

玄関を出て、すぐ目の前にあるバス停へ。…曜ちゃんはちよつとバ

スに乗り込むところだった。

「す、すいませーん！俺も乗ります！」

ドアが閉まる寸前、なんとか滑り込みセーフ。一息つくくと、目の前には少し驚いた顔の曜ちゃん。

「か、翔くん？どうしたの？」

「あ、いや…。辺りも暗いし、送って行こうかなって思ってた。女の子一人じゃ危ないかもだし。」

俺グツジョブ。とっさに出した言葉としては100点じゃないだろうか。

「あ、ありがと…／＼／＼」

俺への視線を外し、少しうつむく曜ちゃん。ほのかに頬が赤らめている。照れているのだろうか。…か、かわいい。

俺たちは、いつものごとく一番後ろの座席へ。…やっぱり、今日も他に乗客はいない。乗ってる人、ホントにいるのかね。

「曜ちゃんの家って、どの辺にあるんだ？」

「えーつと、沼津の方だよ。」

お、そうだったのか。てつきり、もつと近いもんだと勝手に思ってたぜ。

「今日も千歌ちゃん、凄かったな。マイペースというか…、突っ走ってたな。」

「そうだねえ。私、幼馴染だから、あの感じにはすっかり慣れちゃったよ。」

顔を合わせて軽く笑いあう。転入生にいきなり、「スクールアイドルやろうよ！」なんて、普通言わないだろう。と、というか普通考えもしない。

「まあ、それが千歌ちゃんらしきというか…。見ていて楽しいし。」

ぐく、つと背筋を伸ばしながら、曜ちゃんは少し遠い目でそう言う。その姿からは、少し…。寂しさを感じた。

「なあ…。曜ちゃん。なんか、今日元気無くないか？…悩み事、とか？」

それに少しギクリ、としたのか、大げさに手を横に振りながら、

目を真っ赤に腫らしながら、溜めていたことを吐き出した曜ちゃん。制服の袖口で何度も目をこすっているが、涙は止まらない。

俺は、どう答えればいいのかと固まっていると、車内に次の停留所を告げるアナウンスが流れた。

「…私、ここで降りるから。…じゃあね。」

そう言っただけで座席から立ち上がると、走ってバスから降りて行ってしまふ。

「ま、待って！曜ちゃん！」

急いで俺も後を追いつ、なんとか停留所付近で曜ちゃんの腕を掴む。…まだ泣いているのだろう、鼻をすする音が時々聞こえる。

「…明日も、あの子達の勧誘するって。いいよね、あの子達とつてもかわいもん。」

…そっか。私、かわいくないもんね。スクールアイドルなんて、向いてないよね。きつと、千歌ちゃんもそう思っただけ。…」

「そんなことない!!」

俺は首を大きく振り、大きな声で答える。驚いた表情で俺を見つめる曜ちゃん。だが、かまわず俺は続ける。

「…曜ちゃんはメツチャかわいいよ！初めてキミを見たときから、ずっとそう思っただけ！「なんだこの美少女は」って！俺なんか言われたって、嬉しくないだろうけど、絶対人気出る！俺が保証するって！」

大声でまくし立てる俺。曜ちゃんはというと、涙なんて吹っ飛んだような、真っ赤な顔をしている。

「そ、そんなこと…！あるわけないよ！じ、じゃあ、なんで千歌ちゃんはその事誘ってくれないのさ!? 一体、いつになったら誘ってくれるの!? やっぱ、私なんてグループに入ったら、人気出なくなっちゃうからに決まってるよ…。」

また、だんだんと泣きだしそうな表情になる曜ちゃん。口調が弱くなっている。

俺はいったん冷静な口調になると、曜ちゃんに質問。

「…曜ちゃんと千歌ちゃんは小さいときからの付き合いなんだから？」

「…うん。」

「親友なんだろう？」

「…うん。」

「そんな親友が、曜ちゃんのことそんな風に言うと思うか？」

「……………うん。」

ふるふるっ、と軽く首を振る曜ちゃん。また一粒、涙が地面に落ちる。

「じゃあ、千歌ちゃんの事信じて、待つててみようぜ？…もしかしたら、なにか考えがあるのかもしれないだろう？」

「グスツ。 ……うん。 わかった。」

ひっく、としやくりあげながらそう答える曜ちゃん。俺は、曜ちゃんの頭に手を置いてわしやわしやつ、とする。

「じゃ、この話は終わり！…落ち着いたか？」

「……………うん。」

にこっ、と笑う曜ちゃん。うん、やつぱり笑顔の方が良いな。

「そうそう、その方がかわいいかわいい。」

「そ、そんなことないよっ／＼／＼」

顔を赤くして、照れる曜ちゃん。…かわいいのお。まったく。

そんな曜ちゃんを家までエスコート。辺りはすっかり真っ暗だ。

「…今日は、ありがとねっ。」

「いやいや、いいってことさ。 ……泣き虫曜ちゃんも見れたしね。」

「なっ…／＼／＼」

「はは、冗談冗談。 ……じゃ、また明日な！」

玄関先で立っている曜ちゃんも、

「うんっ。 また明日！」

と手を振ってくる。俺はそのまま、停留所に向かったのだが…。

「し、しまった…。」

「バス、さっきのが終バスだったの忘れてた…。」

月明かり照らす住宅街の端で、一人がつくし肩を落とすのだった
……………。

.....

「優しかったなあ……。」

自室に戻り、布団にくるまりながら、私はそうつぶやいた。

さつきは、色々と恥ずかしいところを見せてしまった。思い出して、顔が少し熱くなる。

「翔くん、わ、私の事……。か、かわいいって……／＼／＼」

『曜ちゃんはかわいいよー俺が保証するー!』

思い出して、全身が熱くなる。……は、恥ずかしい。

「お世辞とはいえ、ちよ、ちよつと嬉しかったな……／＼／＼ ……頭なでられたのも気持ち良かったし／＼／＼」

布団をがばつ!と全身にかぶる。なんてこと言ってたんだ、わたし。ついこの前出会ったばかりの男の子なのに!

「でも、できればもう一回……。って!落ち着けっ!落ち着けわたしい!」

今まで感じてきた胸の痛みと違う痛みを、胸を抑えながら感じている曜なのであった…。

第15話　く堅物会長と大喧嘩とく

「……………くん……………けるくん!」

意識の外から、若干焦り気味のような千歌ちゃんの声が聞こえる。
…なんだよ千歌ちゃん、まだ起きるには早いぞ。大体千歌ちゃんが起きているのなんて珍し……………。

「違う!!!」

そこまでの思考に達した俺は、トビウオの勢いでベットから跳ね起きた。

「うわっ!!び、びつくりしたあ…!」

跳ね起きた俺の隣には、すでに制服に着替えている千歌ちゃん。…千歌ちゃんが俺より先に起きているなんて、まずあり得ない。

瞬間的に横の目ざまし時計を見る。…………時刻は8時。

「し、しまったああああ!!!」

榮倉翔、転入してからわずか3日目。

遅刻、確定です……………。

……………

「……で？遅刻の言い訳でもありますの？」

時刻は昼休み。俺と千歌ちゃんは生徒会室に呼ばれ、二人揃って生徒会長様に睨まれている。後ろのドアの向こうには、心配そうに俺たちを見ている曜ちゃん。

飛び起きた後、ダツシユで学校に急いだ俺たち。…着いたのは9時過ぎ。担任の先生は苦笑いで許してくれたが(マジで天使だ先生)、目の前にいるこの方はオーラからして怒りが見えてくる。こ、怖い…。「い、いや…。昨日の沼津からの長距離マラソンのせいというk」はあ？」「いえなんでもないですすいません。」

もごもごと話している俺に冷たく放たれるお声。言い訳聞いてくれるんじゃないですか。

「…ハア。新学期三日目にしていきなり遅刻なんてする生徒、今まで見たことありませんわよ？たるんでるんじゃないやありません事？…高海さん？あなたもなにかおっしやったらどうですか？」

俺の隣で縮こまっていた千歌ちゃんの肩が、びくつと震える。おびえた様子で、ウルウルとした瞳をしながら「助けて！」といった表情で俺を見つめる。(この表情にかわいいと思ってしまう俺がいるのはおいておこう。)

「…会長。千歌ちゃんは俺が寝ていたのを起こしていて、そのせいで遅刻したんです。悪いのは俺です、なので千歌ちゃんは許してやってくれませんか。」

頭を下げて頼む俺。を冷やかな目で見る会長様と焦る千歌ちゃん。「ちよ…、翔くん!? …かいちよう！チカだって、いつもは翔くんに起こしてもらってるんです！今日はたまたま早く起きただけで…！翔くんがいなかったらチカ、今日どころか3日間ずつと遅刻でした！だから…、どうか翔くんは見逃してください！」

と俺の横で同じく頭を下げる千歌ちゃん。…そんな風に思ってたくれたのか。胸の奥がじーんとなる。

…が、そんな俺の感動を打ち消すが如くの会長様の冷やかな言葉が刺さる。

「…高校生にもなって、起こしてもらえないと起きれない？ぶつ

ぶーですわ!!大体、何を言おうと遅刻は遅刻。関係ありませんわ!」
机をバン!と叩き立ち上がる会長様。声を張り上げながら続ける。

「大体、貴方達。スクールアイドル部を立ち上げようとするんじゃない
かったんですの?昨日はあんなに早くから学校にいたのに…。所詮、
口だけだったのでしょうね。」

「そ、そんなこと…。」

「ありますわよね?立ち上げようとする人間がそのような人では、だ
れも付いてくるはずがありませんわ!では高海さん、部員は集まっ
てんですの?」

口ごもる千歌ちゃん。

「そ、それは…。まだ、私だけですけど…。」

「ほら見なさい!」

「そんな中途半端の行動なんかで、人が寄ってくるものですか。…そ
のようでは、いつまでも部員なんか集まりませんわ!」

落ち込む千歌ちゃんの横で、俺はだんだんと怒りを覚えてきた。…
確かに、遅刻をしたのは悪かったが、そこまで言うのはおかしいだろ
う…。?まだ一日しか勧誘はしていないのだ。それに、勧誘のための準
備だって千歌ちゃんは頑張ってきたんだ。千歌ちゃんは口だけなん
かじゃねえ…!

「それは言いすぎだ、会長さんよ。…確かに、遅刻はしたけど。それ一
つで千歌ちゃんの事を全否定なんて間違ってる!千歌ちゃんだって、
色々頑張ってるんだ。絶対に部員は集まる!!」

怒りのせいで半分我を忘れ、敬語もままならないまままくし立てる
俺。すると会長は対抗して、

「…絶対に集まるわけありませんわ!いえ、集まってなるものですか
!」

「なんだと?!」

「ぐぬぬぬ…!」

にらみ合う俺と会長。それを、「ま、まあまあ落ち着いて…。」とな
だめる千歌ちゃん。…だが俺と会長は止まらない。

「そこまで言うなら、行動で示してもらいますわよ。…そうですね、

1週間以内。それ以内に集められなかったら…。」

「集められなかったら？」

「今後スクールアイドル部は何があっても承認しません。さらに、榮倉さん？あなたは生徒会の奴隷として雑務だらけの高校生活ですわあ!!」

「…結構だ!!集められなかったら煮るなり焼くなり好きにしろ!!1週間以内で、5人どころか、6人連れてきてやるからな!!」

そう言っただけで始まった俺と会長のスクールアイドル部と俺の高校生活を賭けた勝負。

話が終った頃には、すっかり午後の授業が始まっていたのだった…。

………

「…もう！翔くんのはか！」

「すまん千歌ちゃんこのとおり。」

時間は流れて放課後。俺は千歌ちゃん、曜ちゃん、梨子ちゃんに囲まれながら土下座をしていた。

「…でも、あれは会長もちよつと言いすぎだったよ。翔くんもだけど。」

そう言つて苦笑いの曜ちゃん。

「す、すまん…。つい売り言葉に買い言葉で…。」

頭を上げる俺に、気持嬉しそうな表情の千歌ちゃん。

「でも、私のために言ってくれたんでしょ？チカ、嬉しかったよ！…1週間以内、つて期限はついちゃったけど、5人集めるのは変わらないしね！」

ニツコリほほ笑む天使に、思わず涙が出そうになる。なんだろうね。最近、すつごい涙もろい気がするよ俺。

「あ、ありがてえ…。そう言ってもらえそううれしいぜ千歌ちゃん…。てな訳で千歌ちゃん。ちよつと申請書貸してもらえる？」

急な俺の要望に「？」の千歌ちゃん。が、すぐにバッグの中を漁つて、いまだ一人の名前しか書いてない申請書を俺に手渡してくれる。

「お、ありがとう。…じゃあちよつと失礼して、はい。返す。」

シャーペンで書き込む俺。申請書を千歌ちゃんに返すと、俺の書き込んだ部分を見てとても驚いた表情をしている。

「えっ…!?か、翔くん…?ホントに…?」

「ああ、言いだしっぺだからな。アイドルにはなれないけど、裏方とか、全力でサポートさせてもらうな。」

部員の欄には、『榮倉 翔』の文字。そう、俺はスクールアイドル部に入ることを決めたのだ。俺のした事でこんな事態になってしまったのだ、男ならしつかりと責任を取るべきだろう。…それに、俺は見てもたくなつたのだ。千歌ちゃんが、スクールアイドルが、輝いていく様子を。近くから。

すると、急に持つている申請書放り捨てた千歌ちゃん。俺の方に向かってきて…

「……ありがとうとおお翔くうんんん!!!」

「うおおおおお!!!」

いきなり抱きついてきた。俺の胸のあたりに二つの柔らかい感触が…つて待て待て!!

「わかった！わかったから！千歌ちゃん、ちよつと離れて!!!」

「だつてえ〜！嬉しいよおお!!」

ぎゆうううう。さらに締め付ける千歌ちゃん。さらに柔らかいモノが強く押し付けられてくる。こ、これ以上はまずい……!

俺は千歌ちゃんを半強引に引き剥がすと、落ち着くべく深呼吸。やばいさっきの感触は確実におpp…はいごめんなさい考えません記憶から消します。

両サイドから軽く睨んでくる二人の視線を浴び、話を戻すべく軽く咳払いをする。

「…てな訳でだ。あとは3人集まれば一応申請はできるな。」

俺がそう言った瞬間、落ち込む様子の曜ちゃん。…大丈夫だつて。

「そうだね…!!あと1週間!頑張ろう!」

と気合を入れる千歌ちゃん。そして次に、もじもじしながら曜ちゃんの方を見る。…ほうらキタ。

「あのね…。曜ちゃん。お願いがあるんだけど…。」

「スクールアイドル部に、入ってくれない…?」

ほらな、やつぱり誘ってくれた。…その瞬間、曜ちゃんの涙が頬を伝って地面に落ちた。

「え、えええええ!!曜ちゃん!?なんで泣くの!?!」

「え……、ちが、これは……。グスツ。な、なんでもな…ヒツク。」

「も、もしかして、泣くほど嫌だつたり…?」

「グスツ。…ううん。嬉しくて。千歌ちゃんが誘ってくれて…!」

「な…泣くほど!?! …曜ちゃん、水泳部やつてるから、掛け持ちになっちゃやし、大変そうだな、つて思ってたんだけど…。」

やつぱりか。大方そんな理由だとは思っていた。軽く息を吐いて曜ちゃんの方を見ると、泣きながら笑っている。うんうん、よかったよかった。

「…グスツ。私の事、考えててくれたんだ。優しいね…千歌ちゃん。…でもね、私は全然大丈夫だから。掛け持ちにはなっちゃうけど…。申請書…貸して?」

そう言つて涙をぬぐいながら申請書に名前を書き込む曜ちゃん。

千歌ちゃんの元に返された申請書には、3人の名前が。

「これで、あと二人だね…!」

「グスツ。そうだね…!!」

申請書を眺めながら笑う千歌ちゃんと曜ちゃんを尻目に、俺は、何かを察したのか急いで帰ろうとする梨子ちゃんの肩を軽くつかんで止める。

「…さて、後は梨子ちゃん、君だけだ。」

「……………」、「ごめんなさい…!!!」

「あつ…!ちよつ!」

俺の手を振り払って逃げる梨子ちゃん。

「お、おーい!梨子ちゃん!…追うぞ!千歌ちゃん!曜ちゃん!」

「うん!…まで!…梨子ちゃん!」

「ヨーソロー!!」

おお、久しぶりに出たな、ヨーソロー。これで曜ちゃん完全復活だな。

「つて、待ってくれ二人とも!おいてくなよ!」

しみじみとする俺を置いていく二人と逃げる梨子ちゃんを追いかけ、教室からスタートダッシュを切るのだった…。

第15話 その日の夜 く千歌 side & 曜 side
e s

「もう、あと2人かあ……!」

相変わらず広い従業員用の風呂に浸かるオレンジ色の髪の少女。頭の頂点には、相変わらずぴよこん、と髪が跳ねている。

「会長はあんなこと言ってたけど…。翔くんも、曜ちゃんも部活に入ってくれたし。きつと、なんとかなるよね…?」

『中途半端な人間に人が寄ってくるわけがない』

しかし、昼間に会長に言われた一言が胸を締め付ける。…自分でも、それは良く解っている。一人では起きられないし、特に何かが秀でているということでもない。そう、『普通』なのだ。

「でも…『そんなことない』って言ってくれる人もいた。」

バシャバシャ、とお湯で顔を洗いながら、自分を肯定してくれた人物—— 榮倉 翔を思い浮かべる。

「あの時の翔くんの言葉、すっごい嬉しかったなあ…。…まあ、その後のせいで1週間、って期限はついちやっただけだね。」

ふふつ、と一人で頬を緩ませる。…まあ、そんな後先考えずに先走ってしまう所は自分も同じなので、人の事は言えないが。

「翔くんと一緒なら、きつと、なんとかなるよね…?」

曜ちゃんもいるし、と眩き、交友のずっと深い幼馴染より先に浮かんだ転入生に顔をボツ、と赤くしながら、風呂の中で時を過ごすのだった…。

……

「……よーそろー。」

自宅の足がギリギリ延ばせるくらいの風呂——これに浸かっていると十千万の大浴場に行きたくなる——に入りながら、小さい子供のころからの口癖をなんとなく、呟いていた。

…そう言えば数日、あまりこの言葉を言っただけでなかったような気がする。そう、千歌ちゃんが『スクールアイドルやりたい』と言い始めたときから。

「……翔くん。」

ぼそつ、と自分を励ましてくれた、もう一度親友を信じさせてくれた男の子の名前を口に出す。

…思えばあの転入生がいなかったら、私は今スクールアイドル部に関われない——どころか、大切な親友とも疎遠になっていたのかもしれない。

「…翔くんには、感謝しきれないよ、…なんとしても、スクールアイドル部を設立させなきゃね。」

応援してくれた翔くんの思いを無駄にしないためにも、と意気込んだ時同時に昨日の事も思い出してしまう。

『曜ちゃんかわいいよー俺が……』

しまった、と思ったときには時すでに遅し。みるみる顔が赤くなり、体中が熱くなる。

「う、ううう…／＼／＼思い出さないようにしてたのに…／＼／＼」

忘れろ、忘れろとぶくぶくと湯船に沈んでいく。

この翔に対する思いが変化していくことに、気付きつつある曜なのであった…。

第16話 く小動物と寺の子と墮天使とく

「……くん……けるくん!」

意識の外から、千歌ちゃんの声が聞こえてくる。…おいおい、なんだよ千歌ちゃん。まだ起きるにははやいだろっ…、

「しまった!!!ま、またやつちまったか俺?!」

二日連続でトビウオのように跳ね起きる俺。

「うわっ!!…び、びっくりした。翔くん、いつもそうやって起きてんの…?」

跳ね起きた俺の横に、昨日と同じ位置にいる千歌ちゃん。…ただひとつ違うのは、いつもの制服ではなく、いまだにパジャマのままだということだ。

不思議に思った俺は、枕元の目覚まし時計を確認。時刻は5時。…5時い!?

「ど、どうした千歌ちゃん?!?!なにかあったのか?!び、病気にでもなったのか!?!」

そう言つて千歌ちゃんのおでこに手をあてる。

「ふえっ!?!か、かけるくん!?!」

瞬間的に顔が赤くなる千歌ちゃん。おでこに触れている手が、どんどん熱くなってきて…。

「や、やっぱり熱が…。どんどん熱くなってるぞ!?!」

本気で心配しだす俺。…千歌ちゃんが早く起きる。しかも2時間も。これはもう病気しかありえん、…!!

「こ、こうしちやおれん。俺の布団使つていいから、ゆっくり休ん…

「ちがうよっ!!!」

「チカ元気だもん!熱なんてない!」

「いや、でもさつきおでこ「ないっいたらないの!」はいすいませんした。」

え、なんで俺謝つてんの。

「今日も勧誘行こうと思ったから……こうやって早く起きたのっ!!」

むくれ顔になり、顔が赤いまま怒ったように言う千歌ちゃん。…心なしか涙目っぽい感じなのは気のせいだろうか。

「お、おう……。わかった、わかったから。」

迫られ、たじろぐ俺。…そ、そんな怒んなくてもいいじゃないすか。

「で、でも。…顔赤いのは、大丈夫なのか？もしホントに調子悪いなら、あまり無理しない方が……。」

「………鈍感すぎるよ。」ボソツ

「ん？なんか言ったか……？」

「んーん！なんでもない！……ほら、そうゆうことだから翔くんも早く準備してねーじゃー！」

そう言つて部屋から急いで退出していく千歌ちゃん。

やっぱり、顔は赤いままなのであった……。

「……もう。翔くんのばかっ／＼／＼」

いまだ直らない赤い顔を両手で包みながら、顔をブンブンと振る。

「た、確かに私がこんな早く起きるのは自分でも珍しいとは思うけどさあ……。で、でも病気扱いするのはひどくない!?……き、急に翔くん私のおでこ触ってくるし……／＼／＼」

つい先日、『一緒に風呂入る？』なんて言つてたのは誰だったのか。その反応は、完全に翔を意識してるよう……。……。

怒りたいのか、触られたのがうれしいのか。どっちともいえない微妙な表情で一人悶絶するのであった……。

いつもより早い起床で、まだ完全に目覚めていない重い瞼と頭をどうにか気合で回し、始発レベルのバスに乗り込む。

普段、一人も乗っていない(というか、乗ってるの見たことない)バスには、意外な人物が先に乗っていた。

「おっはヨーソロー!翔くん、千歌ちゃん!!」

「い!?!よ、曜ちゃん!?!」

いつもの一番後ろの席には、昨日一緒にスクールアイドル部として署名した曜ちゃん。寝ぼけ気味の俺の顔とは違い、爽やかな顔をしている。

「私と呼んでおいたんだあ!」

後ろから、千歌ちゃんの声。…それ、ちゃんと昨日に言ったんだよな?」

「も〜。びっくりしたよ千歌ちゃん。4時半くらいにいきなりメール来て、何かと思ったら千歌ちゃんなんだもん。」

笑いながらそう言う曜ちゃん。…や、やっぱりか。というか曜ちゃん、それは怒っていいと思うぞ。

立っていても危ないので、とりあえず曜ちゃんの隣に座る。…ん?なんか曜ちゃんの顔が心なしか赤くなつた気が…。気のせいかな。

「えへへ〜。ごめんね曜ちゃん。今日も勧誘しようと思つてさー、はりきつちやつた。」

そう言つて俺の隣に座る千歌ちゃん。これで俺は美少女2人に挟まれる形に。やつたね。

「まったく…。するならするで昨日から言つとけて。曜ちゃんもなんか言つてやつた方がいいぞ?」

「ううん。私が自分の意思で記名したんだもん。私もスクールアイドル部結成のために頑張らないとね!」

そう言つてえへへ、と笑う曜ちゃん。良い子すぎだろ。

「それで千歌ちゃん。今日はこんなに早くから何をする気なのでありますかっ!」

急にキリつ、とした表情になる曜ちゃん。右手で敬礼のポーズをし
ながら千歌ちゃんに聞く。

「あ、そうだそれ俺も気になってた。…こんな早くから学校行っても、
誰も登校してないだろ？どうする気なんだ？」

「……あ。」

しまった、という表情の千歌ちゃん。…こ、こいつまさか。

「…ご、ごめくん。なーんにも考えてなかったあ…。」

「千歌ちゃん…。」

「よしアホ毛。そこに正座。」

「ごめんつてばあ〜！」

俺の朝の時間を返せ。

やる気十分から一転、千歌ちゃんに対するイライラを抱きながら、
早朝の誰もいない道路を走って行くバスなのだった…。

………

「……で、一応着いたわけだが。」

場所は変わって2年1組。時刻は6時。校門前でずっと張っているのもあれだからと、とりあえず教室に来てみたものの……。誰もいない。

まあ前だろう。6時台に学校に来る人なんて教師でも中々いないだろう。俺も、こんな時間に来たのは人生初だ。

「どーするんだ？来るのが早い生徒でもあと1時間ちよつとは掛かるだろ……。」

と、俺たちをこんな早く学校に来させた張本人の方を向くと、のんきにあくびをしている。このやろう。

「まあまあ、1時間くらい、すぐ過ぎるよ！……あ、そうだ。翔くんの昔話とか、聞きたいなあ。」

すかさず曜ちゃんがフォローに入る。……ああ、この子マジで良い子。

つて……ん？昔の話だと!?

「あつーそれ、私も聞きたい！」

さつきまであくびをして眠そうにしていた千歌ちゃんも、目を輝かせながら俺の方を向く。

……さて困った。俺はここに来る前なんぞ、マジで平凡な奴だから……。 (第1話参照) ほ、本当に話すことがない。むしろ、ここに来てからの方が衝撃的な経験ばっかだよ、うん。

ちら、と二人を見ると、輝かしい目線を俺に送ってくる。……や、やめてくれ。

キラキラと輝く視線の二人に迫られ、とりあえず自分の席に座り、なにかないかと思考を駆け巡らせる。……が、本当になにもない。

し、しようがない。

「俺、ここに来る前の学校で、小、中、高一と卓球部に入ってたさ……。」
俺の数少ない特徴、卓球。ゲームとも迷ったが……、二人には解らないだろう。

すると突然、

「えっ!?翔くん、卓球できるの!?私も!!」

千歌ちゃんが反応。…た、助かった。この話題が通じないなら、マジで話すことないぜ…。

「そーいえば、十千万に卓球台あるもんな。千歌ちゃんもできるんだ。」

「うん!…私、結構強いよ?」

「お、言ったな?地味に数年間部活を続けてた実力見せたらうか?」

「望むところだよ!」

じーっ…。

はっ!!千歌ちゃんと談笑していると、横から曜ちゃんの「私解らないんだけど」オーラ全開のジト目が。…ま、まずい。

「ぶ、部活と言えば曜ちゃん。水泳凄いいんだろ?」

話を振ると、途端に目を輝かせて…

「ま、まあね!ちっちゃい頃からやってたし!…自分でこう言うのもなんだけど、全国レベルなんだよ?」

「すげえな。そーいえば、初めて会ったときに見た飛び込み、凄いきれいだったもんな。」

「そ、そんなこと／＼／」

「いやいや、俺なんてあんまり水泳得意じゃないしや…。」

「じゃ、じゃあ夏になったら教えてあげるね!」

「おっ、マジ?ありがてえ!」

じとーっ…。

はっ!今度は千歌ちゃん!?

「よ、曜ちゃんも凄いけど、千歌ちゃんも結構凄かったりするんじゃない?」

「え〜っ?わ、私は別に…」

じとーっ…。

じーっ…。

片方と話すとき片方からのジト目。冷や汗をかきながら、精神が削られていく時間が小一時間過ぎるのであった…。

「あく、そうなんだ。残念…。…あつ！ごめんね。私は高海千歌！スクールアイドル部を作ろうとしてるんだよ！」

あ、そうか。なんか警戒心強めな感じだな、と思っていたら、まだ名前も言っただけだったのか。…そりゃ怪しまれる訳だ。

「私は渡辺曜だよ！よろしくね！」

「俺は榮倉翔。ついこの間、ここら辺に越してきたばかりなんだ。ここら辺、ここ以外に学校がないから、理事長の力で入れてもらえたんだ。よろしくな。」

自然な感じで自己紹介成功。…よし、今度はちゃんとこの学校に居る理由を忘れなかつたぜ。えらい。

俺たちの自己紹介により警戒心が弱まったのか、1年生たちも名前を言ってくれた。

「おら…いえ、私は、国木田 花丸って言わずら…いえ、言います。」
必死に標準語で話そうとしているが、しっかり言えていない。…やっぱり、『ずら』って言っただけの子か。まあ、かわいいからいいけど。

その花丸ちゃんの後ろにくつついて、ひよっこり顔をのぞかせている赤髪ツインテールの子も、小さい声ながら名前を言う。

「あ、あの…。く、黒澤 ルビイって言います…。よ、よろしくお願ひしますう…。」

…この子は、警戒というか怯えている感じだな。なんか…小動物みたいだ。うん、そんな感じがする。

「うくん、やっぱり二人ともかわいいっ!!…ね、スクールアイドル、やってみないかな？大丈夫、損はさせないからさっ！」

目を輝かせながら、千歌ちゃんは二人に半歩近づく。…おお、学習したな。いきなり近づいても、逃げられるだけだもんな。…特にルビイちゃんに。

「で、でもルビイは…。」

「だいじょーぶだって！ルビイちゃん、とっても人気出ると思うなあ。

…ね！やってみようよ！」

「だ、だけど…。おねえちゃんが何て言うか…。」

「「へ？」」

お、お姉さん？

俺たちが困惑していると、ルビィちゃんの次の一言が俺たちをさらにピンチへと陥れるのであった。

「私のおねえちゃん…。」

黒澤 ダイヤ

…生徒会長です。」

第16話 小動物と寺の子と墮天使と②

「私のおねえちゃん…、黒澤ダイヤ。生徒会長です。」

……マジか。

おずおずとそう告げたルビイちゃん言葉に、俺たちは口をあんどりあける勢いで驚く。

こ、ここでも会長が絡んでくるとは…。もはや、神が妨害工作に走っていると思えないレベルの偶然だ。

「そ、そんなあ…。」

思いがけない一言に、がっくりとうなだれる千歌ちゃん。…や、ヤバい。これはピンチだ。

つまり、ルビイちゃんをスクールアイドル部に入れるには、会長の理解を得ないといけない事になる。だが、俺たちは会長に毛嫌いされているわけで…。

「つ、詰んだ…。」

打つ手なし。巨大すぎる敵の前に、絶望感に打ちひしがれる。

そんな俺と千歌ちゃんを見ていた曜ちゃんは、「だからどうしたの？」という表情で、ルビイちゃんに語りかける。

「でも、ルビイちゃんはどうしたいの？」

その一言に、うつむいていたルビイちゃんが顔を上げて反応する。

…と同時に俺と千歌ちゃんも。

「ルビイちゃんのお姉さんがなんであれ、大事なのは自分の気持ちでしょ？…そりゃあ、反対されるとは思うけど。私たちだって、今会長にすつごく反対されてるけど、『やりたい』って気持ちがあるから、こうやって勧誘してるんだよ？」

「ルビイちゃんは、どうしたいの？」

その言葉に、ルビイちゃんはまた俯く。…その後、「…少し、考えさせてください。」と小さな声で返ってきた。

「…そっか。じゃあ、待ってるね?」

曜ちゃんはにっこりと笑い、「教室もどろ!」と俺たちの背中を押す。

「ルビイちゃん。…待ってるね?もちろん、花丸ちゃんも!」

と最後に二人に呼び掛け、教室へと戻るのだった。

……

「…さつきはごめんね?勝手に勧誘切り上げちゃって。」

放課後のバスの中。「…今日、家まで送ってくれないかな。」と言う曜ちゃんのリクエストに応じるべく、十千万前で先に降りた千歌ちゃん、梨子ちゃんと別れ、さらにバスに揺られ続けている。

「いやいや、そんなこと。…それより、曜ちゃんがあんなこと言うなんて、正直ちよつとびっくりした。」

苦笑する俺に、少し頬を膨らませた曜ちゃんが「私、そんなにバカじゃないよ!」と俺のわき腹をつつきながら言う。

「…せっかくチャンスがあるのに、周りの事ばかり考えて、自分は遠慮する。なんて、もったいないじゃん?自分が『やりたい』って思うなら、周りが何て言おうとやればいいって思ったから。」

窓際に肘をかけて、外の景色を見ながら、そう、曜ちゃんは呟いた。

「…内心、少しだけ不安だったんだ。翔くんが励ましてくれたあとも。私は千歌ちゃんスクールアイドル『やりたい』って思ってたけど、千歌ちゃんは、私と『やりたい』って思ってたのかわかんないかな、ってさ。」
そこでいったん区切った曜ちゃんは、「ちよつと、良く分かんないよね?」と少し笑ってから、続ける。

「うまく言えないけど…。私ね、なんかルビィちゃんに同じ雰囲気を感じたんだ。ほら、『会長がスクールアイドル部を毛嫌いしてるから、私は…。』っていうところ。私も、『千歌ちゃんが誘ってくれないから、私なんて…。』って感じだったでしょ? 千歌ちゃんと同じことをしたい、っていう『やりたいこと』はあったのに。」

曜ちゃんはくるっ、と俺の方へ体を向ける。

「だからね…。結果的には千歌ちゃんに誘ってもらえたけど、ちよつと後悔するところもあるんだ。『やりたい』って自分から千歌ちゃんに言えばよかったかもな、って。」

「だから…。ルビィちゃんには後悔してほしくないんだ。『自分のやりたいこと』に、ちゃんと自分で『やりたい』って言ってもらいたいな…。ってさ。」

えへへ、と笑う曜ちゃん。そこに、次のバス停を知らせるアナウンスが流れる。

「…だから、必要とあらば、もう一回生徒会長に立ち向かってもらわないとね? 翔くん?」

「げっ…。お、おう、まかせとけえ…。」

にしっ、とやらしく笑うとバスが停留所に止まったとたん、小走りで行ってしまう。俺は新たな一面を見た少女を追いかけられるべく、ゆっくりと座席から立ち上がるのだった…。

……………

「…スクールアイドル、かあ。」

自室に戻った赤毛の少女は、お気に入りのスクールアイドル雑誌をパラパラとめくり、一番好きなスクールアイドル——『μ』の特集ページを開く。

『スクールアイドル』——それは、自分の昔からの憧れ。何度、スクールアイドルを夢見て、そして、なりたいたいと思っただろうか。

「おねえちゃんも、昔は…。」

自分と同じく、スクールアイドルが大好き『だった』姉のことを思い浮かべる。…昔は、よく一緒に雑誌を見ながら語り合ったものなのに。

…いつから、こうなっちゃったんだっけ。

いつからか、変わってしまった姉の姿に思いを馳せながら、夜は更けていくのであった…。

………

「…ルビイちゃん。」

読み終えた本をパタン、と閉じると、中学からの親友——黒澤ル

ビイの名前を呟く。

中学の頃から3年間、ずっと一緒に居たのだ。今のあの子が本当はスクールアイドルをやりたい、ということは解っている。

「ルビイちゃん、いつも他の人の事ばかりだから…。今回は本当にやりたいこと、させてあげなくちゃ。」

薄茶色の髪の少女は、改めて自分の親友のために手伝おう、と決意する。…しかし同時に、昨日出会った3人組——こんなに地味な自分を勧誘してくれた人たちを思い出して、違う感情がじわじわと湧き上がってくる。

『本当は…自分もやってみたい——？』

と、そこまで考えてはっ、とした少女は首を横に振り、こんなに地味なんだから。と思いつく。

…そんなことより、どうやってルビイちゃんをやる気にさせよう。

今日はもう一冊読もう、と新たな本を取り出し、ぱらりとページをめくり始めるのだった…。

第16話　く小動物と寺の子と墮天使と③く

「……つつかれたああああ。」

ザザアアア…。

十千万目の前にある砂浜。波が満ち引きを繰り返している。

4月13日、日曜日の夕暮れ。俺はこの土、日の2日間ずっと、十千万の手伝いをしていたのだ。

つい1週間前、春休みの間は手伝いをしていたので少しは慣れた、という感触はあったものの、やはり肉体的疲労がすごい…。

「これを休みの日毎にやってるんだもんなあ、千歌ちゃん。すげえよなあ。」

まあ、俺も休み毎に千歌ちゃんと一緒にやることにはなってるんだけれども。

と、そんな事を呟き、波の音を聞きながら体を伸ばしていると…

「――最終呪詛契約、ルシファーを解放。汝の力を我に与えたまえ、い。」

……………ん？

俺の立っている位置から、約50メートル。右手に木の棒を持ち、何かを砂浜に書きながらブツブツ唱えている人がいる。

…あ、怪しい。

第一印象。とにかく真っ黒。フリルのついた黒いドレスを身に纏い、その上にこれまた真っ黒のマントを翻している。…って、なんか見たことあるよーな。

「天つ雲居の彼方から舞い降りる我がしもべよ…。我の真名の元に魔力を解放せよ!!」

…う、うわあ。

砂浜に書き終わったのか、(なにを書いたのかはさっぱりだが)手に持っていた棒を天に振りかざし、意味のわからない単語の羅列を並べているのを見て、俺は引くのと同時に先程からの違和感の原因を思い

出す。

「あ、あの子…。1年生トリオの1人の子じゃねえか…？墮天使の。」

ようやく思い出したところで、彼女の元へダツシュ。…え？なぜかって？

50メートルも離れたのに声が聞こえてたんだぞ。今すぐ辞めさせないと、近所迷惑確定じゃないか。

「我の名は…、墮天使ヨハn「やめええーい!!」」

完全に言い切る前に、俺は彼女の元へ駆け寄り口チャック。ついでに木の棒も没収。もごもごとする墮天使を諭す。

「声がでかすぎるわー！なんだよその最終呪詛契約って！」

んーっ！と暴れる墮天使だったが、俺の事を思い出したのか、抵抗をやめて落ち着く。…つたく、やれやれ。

俺は墮天使の口を解放し、木の棒を返す。…すると、墮天使が顔を真っ赤にしながらこちらを見てきた。

「あ、あなた、き、聞いて…？」

「おう、もうばっちりとな。」

その瞬間、墮天使は砂浜にべちやっ、と倒れると、

「わーん!!もう！また変な奴だーとか言われるんだあー!!あー！恥ずかしい恥ずかしい!!」

と、砂がまとわりつくのもお構いなしに、叫びながらゴロゴロと回転し始めた。

「ちよっ!?…だーから、うるさいってのー！」

その後、俺が再度鎮圧にかかったのは言うまでもない。

「…で？なんでこんなことしてたんだ？」

5分後。なんとかなだめた墮天使を座らせた俺は、隣にどっこいしよ、と座りながら問いかける。

すると、いまだに頬が少し赤い墮天使は顔を俯きながら、ぼそぼそと答える。

「…ルシファーを呼びだしてたのよ。」

「なるほど中二病か。」

「中二病ゆるなあ!!」

いきなりトーンが上がった声で反論してきた墮天使。…いや、中二病じゃん。

「…じゃあ、なんでこんなところでやってたんだ？」

「ぬ、沼津の方だと、人が多いから…。ここなら、誰もいないし。」なるほど。…つまりこの子は自分がやることが人前だとヤバい事がわかってやってるってことか。…な、なんだか悲しいな。

今にも泣きだしてしまいうんじやないか、という具合の墮天使を見て、俺は小さく息を吐く

…ま、人それぞれ、色々あるからな。

そう思った俺は、流れを変えるために質問を変える。

「じゃあ、名前は？」

「…墮天使ヨハネ。」

…まじかこいつ。

何が何でも自分を墮天使だと言い張る少女に、俺は逆に感動を覚える。

「…本当は？」

「だ…、墮天使ヨハネよ。」

「ほ…ん…と…う…は？」
にっこり。

無言の圧力をかけると、少女は竦んだのか、

「……津島善子よ。」

とぼそつ、と名前を覚えてくれた。…可哀そうな事しちゃったかな。

「…本当はね。わかってるのよ。自分が中二病で、相当痛いキャラなんだって事。そのせいで、学校にも行きづらくなっちゃったし…。」
え、まさか、この前の勧誘の時に居なかったのって…。

「でも、もうこれは癖のようなものなの。小さいころから言ってたし…。今では、だいぶ抑え込めるようにはなったけど。こうやって、たまに発散しないと、自分が抑えられなくなりそうで…。」
……。

善子ちゃんの話聞いていて、俺は、これはかなり深刻な問題なんじゃないか、と思う反面、これは大チャンスなんじゃないか、と思っていた。

それは——善子ちゃんを、『スクールアイドル部』に入れること。そうすれば、善子ちゃんの中二病が『キャラ』として認められるだろうし、善子ちゃんだつて中二病を爆発させても問題ない。

おまけに、こちらとしても部員が揃う。これぞwin-win。
よし、さっそく提案。

「なあ、善子ちゃん。キミの堕天使の力を存分に発揮できる所があるんだけど…。」

その瞬間、目をいきなり輝かせて、俺の顔を見る善子ちゃん。
…しかし、こうして見ると、善子ちゃんもめっちゃ美人だな。

キリツとした目に、すらつとした顔立ち。鼻筋も通っていて、唇もきれいで…。

なんでこの辺の人って美少女が多いのかね。

…って話はおいといて。

「それは、君がスクールアイドル部に入るk「嫌よ。」」
え。

即答かよ!?!とっている俺に、善子ちゃん。

「本来、堕天使とは孤独な故に罪深き者…。故に人間共と慣れ合ってしまうてはいけないのです…。」

いきなり、シリアス墮天使モードに移行すると、

「それじゃっ、私、帰るから！じゃあねっ、リトルデーモン！」

と、マントを翻し、全力逃走。そのままちようど良く来たバスに乗って行ってしまった。

「…………ええ〜。マジかよ〜…。」

あと、なんか勝手にリトルデーモンにされてるし。

茫然と立ちつくす俺の後ろで、波の音が響くのであった…。

第17話 く不登校と揺らぐ感情とく

「…おーい！花丸ちゃん！ルビイちゃん！」

ガラッ。勢いよくドアを開く千歌ちゃん。最初の時は驚いてこちらを見ていた1年生の子たちも、今では慣れたのか、ほとんどこちらを気にすることなく、各々おしゃべりなどをしている。

「ずらっ!?」「ビギッ!」

おっと違った。思いつきり反応してくれる子たちはまだいた。

千歌ちゃんお目当ての（もちろん俺たちもだが）2人は、俺たちの登場にいまだに反応をし、おずおずとこちらにやってきた。

2人がやってくるやいなや、目をキラキラさせる千歌ちゃん。…よっぽど気に入ったんだな。

この土曜、日曜とずっと2人の話ばっかだったもんな…。と思いつつ、恐縮した感じの2人にひとまず挨拶をする。

「よっ。元気にしたか？」

「は、はい…。」「ず、ずら…。」

…それ、挨拶にも使えるのか。

花丸ちゃんの代名詞ともいえるセリフの新たな使い方に関心しながらも、いまだにおずおずとしている2人を見る。

「ん？どうした？なんかあったのか？」

「あ…、いや、その…。」「えーつと…。」

口ごもる2人。…あ、そうか。

「違う違う。別に今日返事を貰おうって訳じゃないからさ。じっくり考えてくれよ。」

俺の話を聞いた2人は、少し明るい表情になる。…やっぱそうか。

「あ、でも別に、今でもいいんだよー？入ってくれるなら、大歓迎！」にしし、と笑う曜ちゃんにかかるくチョップを入れると、2人に向き直り、本当の要件の人の所在を聞いてみる。

「なあ、2人も。…今日、善子ちゃん来てる？」

俺の質問に、首を振る2人。ま、まさか、なあ…？

「善子ちゃん、クラスの人たちに自己紹介の時…。」

『墮天使ヨハネと契約して、あなたも私のリトルデーモンになってみない？』

って言った後、いきなり教室から出ていつちやって以来、学校に来てないぞら…。」

…マジで中二病のせいで休んだのかアイツ。

大方、ネタ半分で言ったのだろう。教室内がしん、と静まり返る様子が目に浮かぶ。

「クラスのみんなも別に気にしてないし、学校に来てほしいんですけど…。電話にも全然出ないし…。」

…うーん、そんなに重症だったとは。

昨日会った時は、そんなに気にする感じはなかったけどな…。ルシファーがなんだとか言ってたし。

「花丸ちゃん、俺に善子ちゃんのメールアドレス、教えてくんないかな？…実は昨日、善子ちゃんと会ったんだよね。俺もダメ元で連絡してみよ。」

その瞬間、驚いた表情をする花丸ちゃん。

「え?!?!善子ちゃんと会ったぞら!?!ど、どこで!?!」

「お、おう…。海岸でな。」

「よ、善子ちゃんはなんて!?!」

「色々話してくれたぜ。自分は墮天使ヨハネだー、とか、でも中二病なのはわかってそのせいで学校に行きづらい、とか。」

「そ、そこまで…。」

俺の話を聞いて、驚愕の表情を見せる花丸ちゃん。…と同時に横の千歌ちゃん、曜ちゃんも驚いた表情を見せる。

「え?!?!翔くん、善子ちゃんと会ったの!?!」

「い、いつの間に!?!」

「昨日の夕方に、ちよつとな…。詳しくは後で話してやるから。…で、花丸ちゃん?」

なにやらブツブツと呟きながら考え事をしている様子の花丸ちゃ

んに再度向き直る。

「…せ、先輩なら、善子ちゃんをなんとかできるかもしれないすら。普通、善子ちゃんは絶対に何を言われようとも『墮天使ヨハネ』を突き通すすら。それをそんなあっさり…。」

…え、そうなの？なんかあっさり色々言ってくれたけど。

「…おら、何回も善子ちゃんの家に行っただけど、会ってもくれなかったすら。もしかしたら、先輩ならなんとかなるかもしれないすら。……どうぞ、これが善子ちゃんのメールアドレスすら。連絡してみてください。」

ポケットからメモとペンを取り出した花丸ちゃんは、携帯を見ないでサラサラとメモにペンを走らせ、俺に手渡してくれた。…す、すごい、覚えているのか。

「わ、私も！教えて、花丸ちゃん！」

「ち、チカにも！」

…ずずいっ、と花丸ちゃんに詰め寄る2人。彼女たちも心配なのだろう。…初めて会ったときから、大分ヤバめの印象だったしな。

しかし、ゆっくりと首を振る花丸ちゃん。

「…ごめんなさいすら。あまり大人数になってしまっても逆効果かもしれないので…。」

しゅん、と落ち込む2人。と同時に俺にのしかかる倍増したプレッシャー。…う、俺にすべてがかかっている、という訳ですか。

最初は半分冗談のように思っていた。…だって、中二病で不登校なんて半分お笑いだろ？

しかし、笑いごとでは済まなくなってきた状況に強く心を引き締める。

「善子ちゃんの家住所も教えるすら。…頼んだすら、先輩。」

花丸ちゃんの真剣な表情に、また一段と気を引き締める俺ののだった。

.....

「…感じます。」

カーテンを完全に閉め、明かりが消された部屋。その中心に、蠟燭が一本、蜀台に立てられ、細々と炎を揺らめかせている。その前に立つ、真っ黒なドレスを着た少女。背中には、自分で作ったのか黒い羽根まで生やしている。

「――聖霊結界の損壊により、魔力抗争が変化していくのが。」
ジーツ。

それを映す一台のビデオカメラ。その動画はリアルタイムでサイトに配信されている。

「――世界の趨勢が、天界議決により、決していくのが。」
サイトの動画には、「ヨハネ様」「墮天使w」「一緒に墮天(意味深)したい」「アイタタタw w w」などというコメントが流れ続けている。

「――かの約束の地に降臨した、墮天使ヨハネが、そのすべてを見通すのです!」

だが、少女はコメントなど気にするそぶりも見せず、延々と意味不明な言葉の羅列を並べ続ける。

「――すべてのリトルデーモンに授ける。…墮天の力を!!!」
フツ。

蠟燭を吹き消すと同時に、ライブ配信が終了する。静まり返る部屋の中、一人たたずむ少女。

「フフ……。」

不意に、不気味な笑い声を上げると――

「やってしまったぁー……!!!!」

カーテンを思いつきり空け、窓から乗り出し叫びだす。

「なによ墮天使って！ヨハネってなに!?」

「リトルデーモン!? さたぁん!? いるわけないでしょ!?!」

「そんなもーん!!!」

「…もう高校生でしょ津島善子！いい加減卒業するの！…そう、この世界はもつとリアル。リアルこそが正義!!」

「リア充にいゝゝゝ、私はなる!!」

鏡の前でガッツポーズ。：恰好からまったく説得力のない言葉である。

「な、なんであんなこと言っちゃったんだろ…。学校行けないじゃない…。い…。」

『あなたも私と契約して……。』

自己紹介の時にやらかしてしまった自分を盛大に悔みながら、ゴロゴロと床に転がる墮天使なのであった。

……

「……、か？」

目の前には『津島』と書かれた表札。

十千万前で千歌ちゃん、曜ちゃん、梨子ちゃんと別れた俺は、さらにバスに揺られ、花丸ちゃんに教えてもらった住所の場所にやってきた。

とりあえずはメールでもいいと思ったのだが、それだと逃げられる可能性もある。こういう時は先手必勝、といきなり津島宅にやってきたわけだが…。

ど、どうしたものか。

いきなり、男一人やってきて『浦女の生徒なんですけどー』何て言っただところで、100%アウトだろう。親御さんが出てきたらそれこそ1発で。

「い、いや。だけど、折角来たんだし…！」

ぶるぶると首を振り、思い直す。一瞬善子ちゃんに連絡する、というつもりも思い浮かんだが、それでは結局部屋に籠られてしまうかもしれない。

その時はその時だ。とインターホンを祈りを込めて押す。

ピンポーン。

…。

…。

…。

両手を重ね、祈りながら待つこと十数秒。玄関のドアを開け、中から出てきたのは――

「り、リトルデーモン!？」

た、助かった。

出てきたのは、当初の目的人物、墮天使ヨハネこと善子ちゃんだった。

「…どうぞ。入って。」

「お、おじやまします。」

俺が来た理由を察し、観念したのか家へ上げてくれた善子ちゃん。案内されたのは奥の1室。

入った瞬間、ああ、ここは善子ちゃんの部屋だな、と1瞬で感じた。紫色のカーテン、紫色のカーペット、紫色のベッド。禍々しい形の化粧棚に、鏡。

とどめに、ハンガーにこの前着ていた黒いドレスがかかっている（そのほかにも怪しい服が色々あったが、触れないでおこう）。

「適当に座って。」

そう言いつつ、ベッドの上に座る善子ちゃん。おもむろに、ベッドの上に乗っていたお化けのぬいぐるみを抱える。

「…いきなり悪かったな、善子ちゃん。でも、出てきたのが親御さんじゃなくてよかったよ。下手したら通報沙汰だもんなあ。」

「今日は、家に私一人だから。…それより、なんの用かしら？まあ、大体読めてるけど。」

はあ。と小さくため息をつく善子ちゃん。どうやらお見通しらしい。

「大方、ずら丸にでも頼まれたんでしょ…。私が学校来ないから、つて。」

すごいな。完全正解だ。

「…ずら丸には悪いことしてるなどは思ってるわ。メールも電話も無視してるし。この前もここに来てくれたみたいだけど…。」

はあ。と先程より少し大きめのため息をつく善子ちゃん。

「…あなたもずら丸から聞いたでしょ？私の自己紹介のこと。あんなことしちゃったのよ、どんな顔して学校行けばいいってのよ…。」

……確かに。

落ち込む善子ちゃんを見て、いやいや何納得してんだ俺。学校に連れてくんだろ、と思い直す。

「いやいや、でも、みんな気にしてないって言ってるぜ？花丸ちゃんも言ってたし。」

「…そんなわけないじゃない。どーせ、『なに、あの子？』『墮天使だつてw』『リトルデーモンって何？w』とか言ってるに違いないわ。」
ますます落ち込む善子ちゃん。…しようがない、最終手段だ。

おもむろに携帯を取り出すと、俺は、ある番号に電話をかける。

プルルルル…ガチャ。

『も、もしもし？』

「おつ、花丸ちゃん。今、善子ちゃんの家にいるんだけどさ。一緒に説得してくれよ。」

そう言うと、スマホのスピーカーカーモードをオン。

『も、もしもし？善子ちゃん？』

「ず、ずら丸っ！」

突然の幼馴染の声に、びくつと肩を震わせる善子ちゃん。

『お願いだから、学校行こうよ…。みんなも、心配してるんだよ？』

「ほ、本当？」

2人に言われることで、だんだん心が開いてきたのか、善子ちゃんが反応する。

『そうだよ。悪いことしちゃったね、とか、早く学校来ないかなあ、とか、みんな言ってるんだよ？』

「ほ、ほんとのほんとに？」

『本当だよ。だから早く学校に来てね、善子ちゃん。』

「…ほらな？嘘じゃないだろ？」

ありがと、花丸ちゃん。と言って電話を切ると、若干涙を浮かべている善子ちゃんがそこにはいた。

「…で、でも。またいつあんなこと言うか分かんないし…。」

「だいじよぶだつて。みんな気にしないつて言つてたろ?」

「それに、花丸ちゃんだつて、ルビィちゃんだつているじゃん。なんも心配することなんてないつて!」

ずつとうつむいていた善子ちゃん。しかし、決意したのだろう。キツ、と俺に向き直ると――

「…わかつたわ。私、明日から学校、行つてみる。…ちよつと怖いけど。」

…よかつた。

決心した善子ちゃんを見て、内心胸をなでおろす。よし、これで目標達成だ。

「…ありがとね。あなたのおかげかしら。」

照れくさそうに、ボソツ、と俺にそう告げる善子ちゃん。

「いえいえ、わたくし、あなた様のリトルデーモンですから。」

ニヤツ、と笑つてそう告げる。

「…そうね。リトルデーモン。あなたは特別に『1号』の名を与えるわ。永久に、私の『リトルデーモン1号』として、私の僕となりなさい!!」

「それを気をつけろ、つての。」

「あいたあ!」

墮天使モードに切り替わつた善子(ヨハネ)を、チヨップで沈める。

…つたく、油断も隙もないんだから。

「じゃ、明日からがんばれよ?善子ちゃん。」

「だからヨハネよ!」

完全にいつものテンションになつた善子ちゃんをなだめつつ、時は過ぎていくのだった……。

一方その頃。

「おねえちゃん…。」

なにかを決心した赤毛の少女。

ゆつくりと、自分の姉の元へと歩みを進める姿があった。

自分の思いを、伝えるために。

第18話 く小さな少女の大きな決意く

『スクールアイドル』

それは、人見知りで内気な性格の私にとって、縁のないような存在。自分には、向いていない。キラキラとした世界。

それを画面越しに見ているだけで、十分だと思っていた。

『自分もなつてみたい。』そんな思いを胸の奥に秘め続けながら。

そんな時、突然現れ手を差し伸べてきた人たちがいた。

『スクールアイドル、やらない?』

嬉しかった。

こんな内気で、おどおどしている自分に目をかけてくれた人がいる。しかも、自分のやりたかったことを誘いに。

やらない手はない。誰もがそう思うだろう。千載一遇のチャンスなのだから。

しかし。

『スクールアイドルは……、もう、見たくありません。』

ある日突然発せられた、姉からの言葉。

その言葉が、自分の思いにブレーキをかける。

スクールアイドルは大好きだ。でも、姉のことも同じくらい大好きなのだ。

姉の、嫌なことはしたくない。

…そう、だから、この気持ちはまだ胸の奥にしまっておこう。今度こそ、取り出すこともないくらい深く。

そう思っていた時。

『でも、ルビィちゃんはどうしたいの?』

突然投げかけられた、シンプルな言葉。

その言葉は、今まで悩んでいたことを全否定するような言葉で。「なにも知らないくせに…」と、憤りを覚えるくらい衝撃だった。

しかし、その言葉は、少女の心に深く突き刺さり。

…様々な考えが渦巻く中、答えを告げるため。

小さな少女は、姉の元へ向かうのだった。

……

「…すうー、はあー…。」

自分の部屋から、歩くこと10数秒。

親愛なる姉の部屋。

同時に、決断の場所。

その部屋の扉の前で、少女は、ゆっくり、深く深呼吸。

扉に手を当て、ノックをしようと軽く振り上げ、そこで……、一度

静止。

もう一度心の準備をする。

今まで抵抗なく開き続けてきたこの扉は、今日はまるで別のものように見えた。

—— 勇気を振り絞り、振り上げた拳を扉に軽く当てる。

コンコン。

待つこと数秒、すぐに、中から「どうぞ。」と言う声が聞こえてきた。神妙な面持ちで、ゆっくり扉を開け、中に入る。

そこには、いつもと変わらない微笑みで、自分を見つめてくる姉の姿。

「どうしましたの？ ルビィ。もうそろそろ、寝る時間ですわよ。」

もしかしたら、自分の発する一言で、姉を傷つけてしまうかもしれない——

微笑む姉の顔を見た瞬間、一瞬躊躇が生まれるが、『自分がやりたい

こと』。それを告げるため、少女は姉に向き直り、話し始める。

「あのね、おねえちゃん。私、『スクールアイドル』やりたいの。」

.....

キーンコーン…

昼休みを告げる鐘がなるや否や、俺は1年生クラスへダツシュ。

1年フロアへ数10秒で着くと（途中で『廊下を走らない』という張り紙があつた気がするが、気のせいだろう。）、ガラッ、とドアを開き、目的の女生徒を探す。

.....、いた！

「おい、善子〜！ちよつとこつちこ〜い！」
「げっ!？」

ヤバい、というような顔をしてこつちを見る善子。座っている机の周りには数人の女生徒。おつ、結構仲良くやってるじゃないか。

「お〜い！ちよつと話g「わかったから！場所変えるわよ！」」

俺の元へダツシユしてきた善子。俺の言葉を遮るやいなや、背中を押して、俺を教室から外へと追いやる。

「とりあえず、ここじゃ不味いわ！屋上行くわよ！」

「ええ〜!？」

遠いじゃん、と嘆く俺の袖をつかむ善子は、ずるずると階段を上っていく。

まあいいか、ととりあえず屋上へ向かうのだった。

.....

「.....ここなら、大丈夫ね。」

屋上の扉を開き、誰もいないことを確認した善子は、屋上の端に設置してあるベンチに座り、

「いきなりなにやってんのよあんたは!!」

怒り出した。...え？俺なんかやった？

「私はねえ！学校では『普通』になろうとしてるわけ！あんたがいきなり、「おーい、善子お〜！」なんて来たら、変な噂が立つじゃない！」
ぶんすこ、と怒る善子もとい墮天使様。

...ああそうか、そういうえば男子は俺一人なんだっけ。そりゃあ、いきなり1年の教室行って、1人だけ呼び出すなんて、確かに目立ちまくりだな。

「いい？学校の間は、私は『津島善子』なの。もう、自己紹介の時みたいなミスはしないの。わかったら、協力してよね、リトルデーモン1号！」

「はいはい、分かりました。ヨハネ様。」

「分かってないじゃない!!」

笑う俺の横で、むきーっ！と怒る善子。別に、堕天使キャラでも大丈夫だと思っただけどなあ。

……え？なんで俺が『善子』って呼んでるのかって？

昨日、「なんかあなたに『ちゃん』付けで呼ばれると、バカにされるような感じがするわね。」と言われ、『ちゃん』付け禁止令が出たからなのだ(『高貴なる堕天使ヨハネ様』と呼びなさい。と言われたがそれはムシ)。

とまあ、それは置いといて。

俺は善子を呼び出した目的を、そのまま彼女に伝える。

「なあ、無事学校にも来たことだし。スクールアイドル、やろうぜ?」
「やだ。」

ぐあ、瞬殺。というか、この前も一瞬だったなそういえば。

「なんでだよ！学校にこれたんだから、別にもういいだろ！クラスのみんなだって、別に何も気にしてなかったろ!?人気者になれるかもだぞ!!」

『人気者』という単語に若干引つかかった善子。しかしすぐに、

「だーかーらー！私は、『普通』の生徒になるってさっきも言ったでしょ！…確かに、みんな私の自己紹介気にしてた人なんていなかったけど！スクールアイドルなんてやったら、注目されっぱなしじゃないの！」

頑なに拒否する善子。しかし、そんなことでめげる俺ではない。

「…スクールアイドルになれば、堕天使用語使い放題だけど。」

「…うっ。」

「衣装で、堕天使みたいな服着られるかもだけど。」

「…うっ。」

悶える善子。…よし後一步。

「キャラとして、正式に世間に認められるんだけど。」

「……わかったわよ！やるわよ！やればいいんですよ!?!」

とどめの『正式に認められる』が効いたのか、半場やけになるようにそう答えた善子。

「うおおお！有難う善子！マジ天使！」

がしっ、と善子の両手をつかむ俺。すると、

「だ、堕天使だって言ってるでしょ／＼」

と、顔を赤くして言ってきた。その表情は、いつものギラツ、とした目つきとは違って――

「やっぱ……、かわいいな。」

「かわっ!?!?／＼」

顔を真っ赤にして照れる善子。おっと口に出てたか？しまったしまった。

「…ま、とにかく。善子なら、余裕で人気でっから安心しろ。じゃ、2年の教室行こうぜ。千歌ちゃんとか紹介するから。」

「ちよっ／＼／手え引っ張らないでよ！」

いまだに赤い善子をつれて、ウキウキ気分で、教室へと向かうのであった…。

第19話　くお年頃の名前事情と鈍感高校生く

「あんたはバカなの!？」ボソッ

「す、スマン…。」ボソボソ

照りつける太陽の下、顔を近づけてボソボソと話す俺と善子。その後ろには、いつにも増して目が輝いている千歌ちゃんと曜ちゃん。

…え?なんで怒られてるのかって?

それは数分前。

「おーい!千歌ちゃん!曜ちゃん!新入部員が入ったぞ〜!」
ガラリ。

勢いよく教室のドアを開いた俺は、いきなりそう叫んだ。

——そう、『叫んだ』。

何事か、とぎわめきと同時に視線が俺と善子に一斉に集まる。…そう、一斉に。

「あつ…、やべ。」

気付いた時には時すでに遅し。俺の隣にいる善子を見て、「誰?あの子。」…え?超可愛くない?」「え?榮倉君…、まさか?」「まさかもう4人目!？」

などという声が教室内から一斉に漏れ始める。…というかおい、なんだ4人目って。

怒りなのか、羞恥心なのか、隣の善子がわなわなと震え始める。…や、ヤバい。一刻も早くここから脱出しなければ…!!

「あーっ!!墮天使ちゃんだあ!!」

「えーっ!!新入部員!？」

とどめの追い打ち。…と言わんばかりの2人組が、俺たちの元へ大声でそう言いながらやってきた。

とどめの2人の登場により、我慢の限界を迎えた善子。俺の手をとるや否や、無言のままクルリとターン&屋上へダッシュ。

「あつ!？」

「待つてよ〜!」

追いかけてくる2人の声を背中に浴びながら、意外と足が速い善子に手をひかれ続け、今の状況になる——というわけで。

戻ってきた屋上で、俺は今善子に睨まれている。

：いや、テンションが上がってしまったんですよ。

ついに人数揃ったし、まさか流れとはいえ本当に入ってくれるとは思ってなかったし。興奮しちゃうのも分かるでしょ？

「…言い訳無用よ。」

え、まだ何も言っていないんですけど。

エスパーかよ、俺そんなに分かりやすい思考回路してんのかな、と思いつつ。

「ま、まあ…どーせすぐにスクールアイドルとして知れ渡るんだからだいじよ…はいすいませんごめんなさい反省します。」

苦し紛れにポジティブシンキングを促すものの、冷徹な視線で一閃。

：まあ、俺も悪かったですよ。いや、全面的に俺が悪いんですけども。

数分前に、『目立たないように!』と言われたばかりなのに、一瞬で無視しちゃったからな…。というか、目立ちたくないのに、人気者にはなりたいたいとか、この子よくわかんないなまったく。ぶつちやけちよつとめんどくs「聞こえてるわよ。」はいすいません。

心の声がクリアに聞こえているらしい善子に、まさか本当に墮天使なんじゃ…、と若干あせっているところに、後ろからの声。

「ねえねえ翔くん!早く紹介してよお。もう待てないよお。」

振り向くと、いつもより鼻息が荒い千歌ちゃん。その隣には、見た目いつもと変わらない様子の曜ちゃん…だが、小さく小刻みにその場で足踏みをしている。：お、おう、相当楽しみなんだな。

俺は睨み続けている善子の視線から外れるため、もとい、待たせている2人に応えるため、とりあえず善子を紹介する。

「えーつと…。この子が新しくスクールアイドル部に入ってくれた、墮天使ヨハ…やなかった、津島善子。」

相変わらず、目が輝いている2人。太陽の光で瞳がキラキラと輝いて…、まったく、なんでこう一つ一つ可愛いのかね。…おつとしまつた、また見とれてしまった。

次に、軽く視線を善子に向けて、2人のことを紹介する。…ふう、とりあえず睨まれタイムは終わったようだ。

「えーっと、善子。この2人が、今スクールアイドル部を作ろうとしてる千歌ちゃんと曜ちゃ「善子お!!?」おわあ!!?なんだ一体!!?」

いきなり善子の名前を叫ぶ2人。…なんだ!!?俺変なこと言った!!?

「よし……呼びすて……」

「私たち……ちゃ……付け……のに。」

なにやらブツブツとつぶやき始める2人。…なんだ?よく聞こえな――

「翔くん!!」

「!?な、なんだよ急に。」

いきなり俺の元へと急接近してきた2人。かなり深刻そうなのか、真面目な顔でツカツカとこちらへやってくる。え!?なに!?なんかやった?!?

「翔くん!!」

「は、はい!!すいませ 「私も名前で呼んで!!」」

……はい?

まったく想定していない状況に、思わず目をパチクリさせる俺。は?名前?

困惑している俺。…大体、要望の意味がわからない。え?だって…

「呼んでるじゃん。」

「呼んでない!!」

え!?呼んでるよね!?

「呼んでんじゃん!千歌ちゃん、曜ちゃんつて!」

俺のその言葉に、2人が思いつつつ切り深いため息をつく。

「なんでわかんないかなあ……」

いや、こっちのセリフだよ。呼んでんじゃん。…はっ!?実は、二人の名前が、実は本当の名前じゃないとk「違うからね?」はいすい

ません。

ねえ、なんでこの子たちはみんな俺の心が読めるの？てかなんで俺謝ってんの？

「そうじゃなくてさあ…／＼／＼」

手を後ろに組み、もじもじとしながらそう言う曜ちゃん。心なしか、頬が桜色になっている。…あれ、千歌ちゃんもだ。何？なんなの？

「あの…、私の『ちゃん』付け、無くしてくれると嬉しいなあって…／＼／＼」

「ち、チカも…：そーしてほしいなあっ／＼／＼」

「……え??？」

そんなこと？とぽかん、とする俺に、2人からのジト目。…あれ、いつにも増してジトジトしてない（何言ってるんだ俺）？

「どーせ、『そんなこと?』とか思ってるんだろーなあ…。ハア…。」

「ほんと、どんかんだよね…。」

相変わらず俺の心を読む2人。…え？どこが鈍感なの？

「そーいうところだよ…。」

怖いよ。俺、まだ「え?」しか言ってるよ？俺もそのスキル欲しい。どうやったら手に入るんだ？

「…まあ、わかったよ。じゃあ…、『千歌』、『曜』。」

「うん!」

「なに?翔くん♪」

俺が『ちゃん』抜きで名前を呼ぶと、いきなりぱあつ、と表情が明るくなる2人。曜ちゃ…、おっと、曜にいたっては「えへ、えへへ…。」と不敵な笑みをこぼしている。わ、訳がわからん…。

「アンタ…。ほんとに鈍感なのね…。」

横から、マリアナ海溝レベルのため息の善子。…だから、どこが鈍感なんだ？

「この2人も大変ね…。もうちょっと翔の感覚が鋭けりやいいのに…。」

呆れた表情で俺を見てくる善子。え?なんなの?もしかして、理解

してないの俺だけ？

呆れる善子と、不敵に笑う2人を見ながら、昼休みは過ぎていくのだった。

.....

「花丸ちゃん……。ちよつと、話があるんだけど……。」

時は同じく昼休み。善子が翔に連れて行かれたのを見て、何かを決心したらしい赤毛の少女は、自分の一番の親友を呼ぶ。

「なあに？ルビィちゃん。」

自分の前の席で本を読んでいた少女は、呼んでいた本にしおりを挟みながら振り向いて、笑顔で応える。

「ここじゃちよつと……。図書室、行こう？」

「?? いいよ？」

少し不思議がる親友。

……しかし、二人きりで話したいことなのだ。花丸ちゃんには悪いかもしれないが、図書室に本を借りにくる人を見たことがない。話し合いいにはうってつけの場所なのだ。

「ありがとつ。じゃあ、行こつ。」

そう言つて席から立ち上がると、図書室に向かつて歩きだす。そのエメラルドの瞳には、小さいけれど、しかし確かに決意の炎が燃えているのであつた。

第20話　くスクールアイドル部（仮）、結成。く

「誰もいない図書室。」

本棚が陳列している場所で本を選ぶ生徒もいなければ、勉強スペースの机に向かつて熱心に勉強している生徒もいない。全くの無人だ。そんな、いつもと変わらない光景に、図書室に誰もいない状況を喜んでいる自分に少し罪悪感を覚えるものの、内心胸を撫で下ろす。

そして、着いて早々「ずらく」と本棚の列に吸い込まれそうになっている親友を連れ戻し、勉強スペースにある椅子に腰かけさせると、自分も着席する。

「…そ、それで、花丸ちゃんに話があるんだけど。」

親友の顔は真剣そのものなのだが、内心そわそわしているのが手に取るようにわかる。

「どうやらよつぽど本が読みたいらしい。」

…しまった、連れてくる場所を間違えたか。と自分の選んだ場所が間違いだったことを反省する。しかし、人がいない場所なんて早々ないのだ。ここは我慢してもらって話を聞いてもらわないと。

「…あ、あのね。大事な話なんだ。ちよつとだけ…、聞いてくれる?」「ずらく。」

やつとこさこちらに意識を向けた親友に内心苦笑しながら、少女は語りだす。

「あのね…。スクールアイドル部についてのことなんだけど…。」

………

自分は本が好きだ。

運動が苦手で、人付き合いが苦手。地味な自分にとって、唯一向
き合うことができた趣味——読書。

本は、自分を色んな世界へと連れて行ってくれる。…そう、自分が
体験できない、感じられない世界を感じさせてくれる。

その感覚が、たまらなく好きで。

…だからこそ、本に囲まれた状況になったら、いてもたってもい
られなくなってしまうのであって。

「ずら〜！」

親友と一緒にやってきた図書室。話をする場の利用として来たの
は頭では分かっているものの、体が本棚へと自然に動いていつてしま
う。

「花丸ちゃ…！ちよ、ちよつとまつ…て…！」

と親友に背中を押され、頭を切り替え椅子に着席。…したものの、
体の本に対する反応が収まらない。…うう、本が読みたい。

「…あ、あのね。大事な話なんだ。ちよつとだけ…、聞いてくれる？」

「ずら〜！」

相変わらず、体の意識は本に向かったまま、返事をする。…しかし、
次の一言で、すべての意識が目の前親友へと集中する。

「あのね…。スクールアイドル部についてのことなんだけど…。」

……………

「…ふわああく。終わったあくー！」

帰りのSHRも終わり、他のクラスメイトが三々五々、部活や帰宅に向かおうとする中、俺、千歌、曜の3人は俺の机に集まっていた。

「…で？今日の成果は？」

生徒会長との話し合い、もとい賭け以来、毎回定例化しているこの成果報告。…まあ、毎回特に進展はないんだけども。

「はいー！」

「はい、高海さん。」

元氣よく手を上げる千歌に、恭しく指名する俺。まあ、報告会だからね？雰囲気作り大事。

「今日も、梨子ちゃんにたくさん勧誘話を持ちかけました！」

「……………成果は？」

にしし、と笑いながら勧誘した、と言う千歌に、嫌疑度マックスで問いかける俺。すると千歌は、腰に手を回し、えっへんとドヤ顔をする。

「いい感じですよっ!!」

「嘘つけ。」

「ほんとだよっ!!」

絶対嘘だろ。

なぜかって？そりやあ、休み時間ごとに梨子ちゃんの机にダツシユして、「スクールアイドルやろー!!」だぞ。梨子ちゃんの顔見たか？千歌。もう、すつつつつつげえ嫌そうな顔してたぞ。マジで。

「だってね！最初のころは、『ごめんなさいっ！』だったのが、今は、『……………ごめんなさい。』になつてるんだよ？」

それのどこの部分がいい感じなのか。完全に逆だろ。

俺は千歌の超ポジティブシンキングにため息をつきながら、苦笑している曜の方へ向き直り、同じ質問をする。

「うくん…。私は、特にはないかな…。」

少し困った表情で、小首を傾げながらそう言う曜。…いちいち可愛
いんだから、まったく。

「よし、じゃあ今日の結論。」

「ごほん、とわざとらしく咳をひとつすると、ぽけーっ、とした表情
の千歌の方に向き直る。」

「千歌、今後梨子ちゃんに勧誘すんの禁止。 以上。」

「ええ〜!?!」

「あたりまえだわ!!」

自分のやっつてることが理解できていないのか、ブーブー文句をする
千歌と論争を繰り返している、教室のドアがカラカラ…、とゆっく
りと開く。それに気付いた俺たちが会話を止めると、おずおずと見慣
れた1年生、ルビイちゃんと花丸ちゃんが教室に入ってきた。

「あーっ!!ルビイちゃんと花丸ちゃんだあー!!」

突然大きな声を発し、二人へと突撃していく千歌。その声に驚いた
のか、ルビイちゃんは小さく縮こまり、花丸ちゃんはその場にフリー
ズ。…まったく、待てっつもの!

「落ち着けっつもの!」

「あいたあ!」

二人への接触まで50cm。すんでのところで首根っこをつかんだ
俺は、そのままこちらへと引きもどす。

「ごめんな二人とも。…で、今日はどうした?」

いまだに抵抗を続ける千歌を曜に任せると、二人の方に向き直り、
驚かさないように優しく問いかける。

「え…、ええ…と。」

危機が去ったと判断したのか、ゆっくりと顔を上げ、立ち上がるル
ビイちゃん。すると、急に真剣な表情になる。隣を見ると、花丸ちゃ
んもだ。

ついに来たのか。決断の時が。

スクールアイドル部への入部の答えを告げに来たのだろう。俺は
真剣な面持ちで二人を見つめる。不意に、喉の奥がゴクリ、と鳴った。

同時に、後ろで騒がしかった千歌ちゃんの抵抗も静かになる。ち

ら、と後ろを見ると、不安げな表情の千歌と、真剣な表情の曜。どちらもこれから何を告げられるか分かっていているようだ。

教室内に緊張感が張り詰める。ルビィちゃんはどのタイミングで切り出すべきか、なかなか言いずらそうにしていたものの、数秒間の沈黙の後、ついに口を開いた。

「わ、私…、黒澤ルビィは、スクールアイドル部に、にゅ、入部します！」

小さな彼女からは想像もできないような声の大きさで。

叫び声の中、何度も嘔みながら。

しかし、俺たちが待ち望んでいた言葉を、彼女は、顔を真っ赤にしながら告げた。

「……………やったああああ!!!」

その瞬間、後ろから二つの衝撃。

「ぐえっ!」

なんとか踏みとどまり、何事かと後ろを向くと、これでもかとの笑顔の二人が、俺に抱きついてきていた。

「やった!やったよかけるくーん!!」

「よかったあ!よかったよお!」

「おわあ!わ、わかった!わかったから!」

とりあえず二人をなだめようとするものの、興奮のあまりか、全く俺から離れようとしないう二人。…こんな時に言っちゃいけないことなのだと思うが、二人に抱きつかれていると、その…。お二人についている二つずつの放漫な果実が…。

「あ、あの…。」

はっ!?ダメだ、今は1年生に集中しなければ!

落ち着いたのか、いつもの雰囲気に戻っているルビィちゃんの声により、意識を強制的に背中から切り離す俺。

「じ、実は…。もうひとつありまして…。……………花丸ちゃん。」

…え?

ルビィちゃんの呼びかけにより、一歩前に踏み出す花丸ちゃん。そ

の目は、先ほどのルビイちゃんと同じ、真剣さを物語っている。

花丸ちゃんは、すうつ、と息を吸い込むと、大きく口を開き…

「わ、私！国木田花丸も！スクールアイドル部に！入部するぞらあ！」
ルビイちゃんよりも大きい声で。下手したら学校中に響いたんじゃないかというくらいの声量で。

スクールアイドル部入部を、宣言した。

「…いいいいいいやったあああああああ！！！！」

先ほどから抱きついていた二人の締め付けがより一層増す。そうすると、自然に密着面積が広くなるわけで。

ギユウウウ。

「わ、わかった！わかったから！とりあえず離れてくれ！二人とも！」
背中全体に広がる4つの果実の感触は、その後数分続くのだった…。

………

「…うゆ。」「…ずら。」

「よしっ！記名完了！これで、君たちは晴れてスクールアイドル部の一員だ！」

「まだ（仮）だけどね。」

「うぐつ。」

おいこら曜。急に現実に戻すんじゃない!

にしし、と笑う曜を尻目に、1年生二人に向き直る俺。いやあ、それにしてもめでたい!これで、目標の5人達成!これが笑わずにいられるかって。えっへっへ。

「あ、あの…。先輩…。」

「ん?どした?」

にやにやと笑っている俺に、花丸ちゃんがおずおずと俺の元へ。

「あのお…。さつき、名前を書いたとこの上に、善子ちゃんの名前が書いてあったんですけど…。もしかして…?」

「ん?そうだよ?今日の昼休みに入ってくれたんだぜ。あいつもよかったな、これで1年一人で寂しい、なんてこともないだろう。うんうん。」

「す、すごすぎる…。たった1日で登校させて、その上スクールアイドルにまで…。」

ブツブツと呟く花丸ちゃん。…え?そんなにすごいことか?なんか、あいつは…、なんというか、チョロかったぞ。

と、いきなり花丸ちゃんは俺に向き直ると、

「せ、先輩…!せ、ぜび、『師匠』と呼ばせてほしいぞら!」

俺の手をガシツ、と握り、とんでもないことを言い出した。

「し、師匠?!」

「はい。出会ってから全然経ってないのに、善子ちゃんを手玉に取るその能力、御見それいたしましたぞら!是非、師匠と呼ばせて欲しいぞら!」

それ、善子が聞いたらまた不登校になるぞ。

真剣なまなざしでぶっ飛んだことを言いだす花丸ちゃんにたじろぐも、まあ呼び方くらい何でもいいか、と思いを承する。ペアツ、と明るくなる花丸ちゃん。「師匠♪師匠♪」と鼻歌気分で連呼している。それ、頼むから人前でやるなよ。100%俺が犯罪者になるから。

……

「さよならずらく」さ、さようならっ！」

途中のバス停で降りた二人を見送り、俺たち3人はいつもの席に再度座る。

「いやあく！めでたいっ！6人だよ!?6人!!」

未だ興奮さめぬ千歌を横目に、曜の方を見る…。

そこには、無言ながらも、目が尋常じゃないくらい輝いている曜。

…あ、あなたもですか。

ギラギラの千歌と、キラキラの曜に挟まれている俺。…こんな二人の間で、言いたくはないんだが、絶対忘れてるからなあ…。

「なあ。二人とも。…肝心なことを忘れてるぞ?」

「ふえ?」「え?」

腕組をして、真ん中に座る俺に、二人からのキラキラした視線。：

ああ、この瞳を壊すのが辛い。

しかし、言わなけりや始まらない。意を決して、現実を告げる。

「まだ…。『生徒会長』という壁が残ってるからね?」

「…………あ。」

やっぱり忘れてたか。

俺の言葉を聞いて、分かりやすいくらい落胆する二人。

そう、まだ終わりではない。

『5人以上』という目標を達成し、3年間の奴隷生活は回避できたとはいえ、あの型物会長がそう易々とスクールアイドル部を承認するとは思えない。本当の戦いはこれからなのだ。

だから、しっかりと傾向と対策をだな…。

「でもまあ、翔くんがいるしー!」

「そうそう…、って、え?」

「なんとかしてくれるしー!」

え？なんとかしてくれるって、何？

「なんとかなるよね！翔くん!!」

「……………はい。」

ダメだ。ポジティブ人間の千歌はともかく、まともだと思っていた曜までお気楽モードになっている。お前ら、1週間前の会長忘れたのか？

心配だ…。と不安になる中、バスは夕焼けに染まった海岸線を走って行くのだった。

もうひとつの20話　　とある少女の思い

「あのね、おねえちゃん。私、『スクールアイドル』やりたいの。」

決断の言葉。同時に、姉を傷つけてしまう言葉。

赤毛の少女は、小さい声ながら、しかし、しっかりと姉に伝わる大ききさで、そう告げた。

空気が、変わった。

目の前で微笑みを崩さなかった姉。その表情は、今まで見たことが無かった。

悲しみ…、しかし、表情にはまだ余裕があるようにも見える。…そう、まるで、『そろそろ来ると思っていた』と言わんばかりの様に。

沈黙が流れる。

…これから一体何を言われるのか。全く想像ができなかった。てつきり、一瞬の内に却下され、頭ごなしに怒られるのでは、と予想をしていたのだが…。

困惑していると、目の前で沈黙を続けていた姉の、唇が、動いた。

「……………いいですわよ。『スクールアイドル』、やっても。」
「……………え。」

完全に予想していた展開と違いすぎて、思わず声が漏れる。

ありえない。あんなに、『スクールアイドル』を毛嫌いしていたのに。

一人困惑していると、ひとり言のように姉が小さく口を開く。

「私…、賭けてみようと思いますの。あの男に。」

…賭ける？

一体何に？

恐らく無意識だったのだろう姉の言葉の真意を追求すべく口を開

こうとすると、

「ほら、話はそれだけですの？それならもう寝なさいな。明日も学校ですわよ。」

いつも通りの優しい口調と微笑みに戻った姉に促される。

「では、おやすみなさい。ルビィ。」

結局そのまま聞くことができなのまま、部屋から出る。…やっぱり今のことを聞いてみるべきか、と部屋のドアをもう一度叩こうとしたが、確かに、そろそろ寝ないと本当に明日がキツくなってしまう。

少し心に引っかけかきを感じながらも、赤毛の少女は静かに自室へと戻っていくのだった。

……

「あのね…。スクールアイドル部についてのことなんだけど…。」

目の前の親友に向かって、語りだす。

「あのね、私…。スクールアイドル部、入ろうと思うの。」

「…へ？で、でも、お姉さんが、何て言うか…。」

入る、という言葉聞いた瞬間、周りの本に向かっていた意識がすべてこちらに来たかのように、真剣な眼差しになる薄茶色の髪の少女。

「あ、それはね…、おねえちゃんに聞いてみたら、すぐに「いいよ」って言ってくれて…。」

「……ええええ!? ホントに!? そ、それ、だいじょうぶずら!?」

あ、やっぱりおんなじこと思うんだな、と内心苦笑する。

「…うん。たぶん。」

目をまんまるにして驚いていた少女は、その言葉にキラキラと目を輝かせて、

「うわあ〜! じゃあ、本当にスクールアイドル部に入れるんだね! おめでどう、ルビイちゃん!」

と、まるで自分のことのように喜んでいる。他人のことなのに、そんなに喜んでくれるなんて…。他人思いの親友に感動する。

「ルビイちゃんなら絶対人気でるよ! マル、応援するからね! がんばってね!」

「…ちよつと待って。」

応援すると言う。…つまり、自分はスクールアイドルとは関係ない、と思っている薄茶色の髪の少女は、その言葉にぽかんとする。

自分の第一の目標は達成した。…しかし、まだ完璧ではないのだ。

「…あのね、花丸ちゃん。わたし…、花丸ちゃんと一緒に! スクールアイドル、やりたいの!」

そう、あなたがいないと。

第21話　　く決戦、生徒会室く

びびびびつ。　　…かちつ。

相変わらず一定の電子音で俺を夢の世界から現実へ引き戻す機械のボタンを少々ウンザリしながら押す。強制的に起こされることで発生する強烈な頭の気だるさ。…毎日思うのだが、目覚ましの機械音は脳に何かしらダメージを与えてるのではないだろうか。たまには目覚ましなんぞに縛られず、己のペースで起きたいものだ…。なんてことを考えつつ。

脳がだんだんと現実世界に意識を傾けるのに連なつて、今日はスクールアイドル部（仮）にとつて、超大事な日——『決戦日』だということに自然と身が引き締まってくる。

「超不安だぜチクショウ…。…とりあえず、千歌を起こさないとな。」と、相変わらずかなり重症の寝癖頭をポリポリと搔きながら、あくび交じりに部屋の扉を開こうとした瞬間——
ガラッ。

「おっはよーかけるくー…うううんんん?!?!」

俺が扉に手を掛けたその瞬間、その扉が自然にオープン。…あれ、自動ドアだっけ？などという小学生が考えそうな家の設計を脳内でぼやくつ、と思った瞬間。

奇妙な叫び声（驚き声？）を発するみかん髪が目の前に出現した。

「ち、ちよつとお…！翔くん！びっくりしたよお…。」
「びっくりしたのはこっちだつつの…。」

もはや見慣れてしまっているアホ毛をちらり、と一瞥しながら、俺は千歌に軽いため息。俺が朝には強い方だとはいえ、まだ起きてから2分も経ってないぞ。正直ベッドに戻りたい、と脳が体に意見をしている感じの状態の時に、この叫び声をほぼゼロ距離からだぞ。…超頭痛い。

「俺は今から千歌の事を起こしに行こうとしてたんだよ。…にしても、ちゃんと起きれてるじゃないか。えらいえらい。」

俺は自ら起きてきた千歌を称賛すべく、右手を千歌の頭にやると、よしよしと優しく撫でてやる。ああ、千歌の髪柔らかな。触つて気持ちいい。

寝起き十千歌の叫び声で完全におかしくなっている頭の俺。…あれ、なんか俺、とんでもないことしてる気が。…まあいいか。

「えっ…？ちよ、ちよつと／＼翔くん？　う、嬉しいけど…／＼」
／　ボソツ

「え？そう？いや、千歌の髪触つて気持ちいいな。このアホ毛のアクセントがまたたまりません…。」
なでなでなでなで。

「ちよつとお〜！翔くん／＼」

この光景は、俺が完全に目覚める、約2分半の間続くのだった。（この後、俺が全力で土下座にシフトしたのは、最早言うまでもないだろう。）

………

「……よ、よし。行くぞ？みんな、準備はいいな？」

「はーんー」

「ヨーソローー」

「ずらあー！」

「は、はいっー！」

「ふっ…当然よ。」

なんであなたたち、そんなに元気なんすか…。

4月16日、水曜日の放課後。俺たちは、会長との決戦の地――生徒会長室の前に集まっていた。目的は、そう。『スクールアイドル部の承認』である。

部員は集まった、やる気も十分。…なのだが、結局は。

生徒会長――『黒澤ダイヤ』に承認を貰わなければ、意味がないのだ。

というわけで、俺たちは全員で生徒会室に乗り込もうと、今まさにドアに手を掛けようとしているのだが…。

「……ち。」

「「「ち?」「」」」

「…超怖い。」

「「「…ええええええ!」「」」」

だって!!怖いもんは怖いんだもん!

あの生徒会長だぜ!?!液体窒素のように冷たい冷たい視線を、これまた冷やかな目から思いつきり向けられるんだぞ!?!たまったもんじゃない。怖すぎる。…いや、確かに美人だよ?美人だけでも。俺は別に冷やかな視線を向けられて嬉しがると特殊な性へk……、ではないし、Mでもない(本人談)。

大体、曜と千歌は俺と一緒に、冷やかな視線を浴びたじゃないか!怖くないのか!?!……はっ!もしかして二人とも実はどえm「違うよ?」「はいすいませんそんなわけないですよね。

「行かなきゃいけないのは解ってるけどさあ!ちよつと心の準備つてもんがなあ…!」

「翔くーん、早くしてよおろー!」

「全速前進!だよ!」

「師匠、チキンは良くないずら。」

「が、がんばルビィ！」

「あんた…、男でしょ？」

ぐああ！ため息混じりの善子の言葉が胸に刺さるっ…！あ、がんばルビィってかわいいね（現実逃避）。

「っ…！ああ解った！俺も男だ！覚悟を決めた…！よし！い、行くぞ。」

「早く〜！」「早く〜！」「はよずら」「ふんばルビィ！」「…早くしなさいよ。」などの声援（と信じたい）を背中に浴びながら、俺がドアノブに手を掛けた瞬間――

ガチャ。

…あれ、俺まだドアノブひねってないよ？という疑問と、今朝の記憶がフラッシュユバツク。あ、ヤバい、このパターンは…。

「…：貴方達い！！生徒会室の前でなにやってるんですのお！！」
で、ですよねー。

………

「……………で？」

…ビクッ。

「…貴方達？わざわざ放課後に生徒会室まで来て、ドアの前でギャーギャー騒いでたのは何かの嫌がらせですか？」

……フルフル。

「……………では？何のために？そんなことを？……………していたんですのおおお!!!」

「…」「…」「すすすすいませーん!!!!!!」

おい、おまいらもビビってんじゃねえかやつぱりいい!!

現在、俺たちは生徒会室の中。目の前の生徒会長の席に座っている生徒会長に絶賛睨まれ中である。

「……まあ、大体目的は解っていますけど。まあ……、よくもまあ人数を集めたものですわね。」

「あ、はい。……どうもつす。」

ペコペコと頭を下げる俺。因みに隊列は、俺が先頭でなぜか正座、その後ろに千歌と曜、さらに後ろに1年生トリオが千歌と曜の肩を掴んで若干怯えている。つまり、ピラミッド型だな。その頂点+生徒会長様の視線を一番浴びているのが俺である。……どうしてこうなった。

「……1週間足らずで、条件を達成したことは素直に評価しますわ。良かったですわね？これで貴方、奴隷にならずにすみまして。」

冷徹な視線で睨んでできていた生徒会長の表情が若干緩む。……おお？これは案外すんなり認めてくれるんじ！しかし！承認するかどうかは別の話ですわ！」ですよー。

「え〜!?認めてくれるんじゃないのお!？」

と、千歌からの抗議。……おいおい千歌。そんなわけないだろう？この生徒会長だぞ？そんな簡単に認めてくれる訳ないだろう？こんな冷徹、絶対零度の視線だぞ？まさに悪m「黙りなさい」はいすいません。

ねえ、なんで会長様まで俺の思考を読むの？心の中くらい、自由にさせてくれない？

「私が先週申し上げたのは、『集められなかったら今後何があっても承認しない』ということのみ。『集められたら承認』なんて、一言も申し上げておりません。」

「そんなんっ……!?ずるいですよ！そんな事！」

たまらず抗議の声を挙げる曜。しかし俺は手を伸ばして曜を制止。落ち着いたトーンで、会長に問う。

「……で？どうしたら、認めてくれるんだ？」

「……………」

「……ここで感情に身を任せ、ギャーギャー文句を言っても仕方ない。会長は、『集められなかったら今後何があっても承認しない』と言った。

しかし、俺たちは条件人数を集めたのだ。…つまり、まだチャンスはあるはずだ。

そのチャンスを、俺たちの感情的な行動でファイにしてしまったては元も子もない。ここは冷静に。交渉はまだ終わっていない。

「っ……わ、私は……。」

「ハア〜イ！なんだかサツバツとしたフィンキね！」

認めな、と口を開いた会長を遮る形で、その台詞とともに、生徒会室のドアが勢いよく開かれた。

「シャイニ〜！理事長マリー、ここにケ・ン・ザ・ン♡」

そこには…、我が校のぶっ飛び理事長こと——小原鞠莉が居た。

…うっ、後光がまぶしい。

………

「話は聞かせてもらったわ！ダイヤ？ちよ〜つとズルインじゃない？」

「っ……。鞠莉さん。」

と言いながら、入口から今にもスキップしそうな勢いで、俺たちの元に歩いてくる鞠莉さん。そして、俺の正座姿を見るなり、驚いた表

情をする。

「Oh!ダメよカケル!セツプクなんかしちやあ!床が汚くなつちやうわ!」

「しませんよ!なんで切腹せにやなんないんすか!しかも俺より床優先!」

「え?だって、ジャパニーズサムライは正座をしたらセツプクでしょ?」

「いや土下座だろ!なんで『とりあえずビール』的な感覚で腹切りしなきゃなんないんすか!いくつ腹があつても足りないわ!というか別に土下座もしてないけどね!」

「そうなの?間違えちやつた♡」

つ…、疲れる。

止まらないツツコミで、息を切らす俺をニヤニヤしながら見る鞠莉さん。…この人、狙ってやってないか?

「まっ!ジョークはこのくらいにして!…ダイヤ?」

と、視線を会長に向けるとともに、真剣な顔つきになる鞠莉さん。

「この子たちはちゃんどダイヤの条件を果たしてきたのよね?それなのに、認めないの一点張りじゃあ、さすがにズルイんじゃないの?」

「…っ!!しかし鞠莉さ」というわけでえー♡理事長権限で、スクールアイドル部、認めちやうわ♡」

…え?マジ?

「!!!…いいやつたああああ!!!」

ピョンピョンと飛び跳ねる2年生コンビ。後ろのルビイちゃんなんか、若干涙目にもなっている。

「しかあし!!」

え。

鞠莉さんの一言で、表情が凍る俺たち。

…ま、まだなんかあんのか?

「私からも…条件があるわ♡」

ま、マジすか…。

鼻息荒くやる気満々の千歌。

まあ、やるしかないわな。と、みんなの方を見ると、全員異論はないようだ。

「決まりね。日時は、追って通知するわ。じゃ♡」

パン、と両手を合わせて、そのまま校舎の方に帰って行く鞠莉さん。

「……貴方達。本当にやるつもりですの。……いえ、もう遅いですわね。」

と、会長も鞠莉さんと同様に、校舎に帰って行った。

「……信じてますわよ。」ボソツ

「……ん？」

何か会長が言っていた気がするが……。気のせいか。

気を取り直し、みんなの方に向き直るのだった――

……

「……どうゆうつもりですの。……鞠莉さん。」

「何って……。つれないわね、ダイヤ。2ネンブウリに戻ってきたというのに♡」

「ふぎけるのはやめてください。……『榮倉 翔』の件といい、……スクールアイドル部の件といい、一体、貴女は何がしたいんですのっ！」

「……あなたと同じよ、ダイヤ。」

「…っ！」

「気付いて…いたんですの？」

「バレバレよ。keyは、『榮倉 翔』。彼がきつと、彼女たちを導いてくれるわ…。私たちのようにはならない。きつとね…。」

「…！まさか、そのために、彼をこの学院に…!?!」

「ノーノー。彼がここに来たのは全くの偶然。いくら小原家といえども、関係ない高校生を転校させるなんてできないわよ。」

「…そうですか。」

「…それより、目的が同じなら。私たちは私たちで、やることがあるわよね？…連れ戻さないとね…。」

『果南』を。」

………

「…よーし！…ここを満員にするんだよな！早速学院中の人たちに宣伝しないとな！…っつと、その前に練習か！いや、忙しくなってきたな！」

「うん！」「そうだねっ！」「張り切って行くぞら！」「が、がんばります！」と、各々が改めて意気込む中、一人、冷静…、というか、絶望的な表情をしている者が一人。

「…ん？…どうした？…善子？」

俺の問いかけで、みんなが一斉に善子の方を向く。

「ヨハネよ……って、そんな場合じゃないわ。」

え、そんな場合？お前のこだわりはそんなもんだったの？

能天気な考えをしている俺に向かって、善子は肩を若干震わせながら、

「…ホントに気付いてないの？」

と言う。…え？何が？

みんな解る？と視線を送るが、全員が肩をすぼめる。

「…まず、ライブ。私たち、どうやってやるのよ。」

「……あ。」

「他のスクールアイドルの曲をやる、なんてのは無理でしょ？相手があの生徒会長と理事長だと。」

「それに……。」

まだあるのか、と今度は俺たちが絶望の表情を見せる、ものの、かまわず続ける善子。

次の一言で、俺たちはさらなる絶望へとたたき落とされるのだった。

「……この学院の全生徒数、知ってるの？全員来たとしても……、ここは満員にならない……と思うけど。」

「……あ。」

第22話 く立ちはだかる壁と海の音とく

「…この学院の全生徒数、知ってるの？全員来たとしても…、ここは満員にならない…と思うけど。」

「…「あ。」」

盲点すぎる善子の言葉（というか普通は気付くと思うが）に、最高潮だった俺たちのテンションはどこへ行ったのか、完全にフリーズする俺たち。

「…な、何人…。だっけ…？」

おそろおそろ手を挙げ、問いかけるのは曜。それを見た善子は、「知ってるくせに…」とでも言いたげのような顔をしながらも、俺たちに現実を突きつける。

「…約1000人。ここの体育館は、大体…、5000〜6000人は入るわね。つまり…、圧倒的に足りないわ。」

600人。

大きすぎる数に、ただただ茫然とする。

つまり…。もし浦女の生徒が全員来たとしても、後5000人は必要なわけだ。…ただでさえ人が少ないこの町。ここに来ただけの俺は何とも言えないが、集めるのは絶望的なのではないだろうか…。「それに。」

「さっきも言った通り…。曲は？…私達、持ち歌なんて当然無いし…。他のスクールアイドルのコピーなんて、あの2人は認めないでしょ、絶対。どうすんのよ…。」

絶望的な俺たちに、さらに善子が現実を突く。

『オリジナルの』曲。

普段、音楽は日常的に聴く。…だが。聴くのと自分たちで作るのは全くの別物だ。作曲なんてやったこともないし、第一作り方どころ

か、楽器も何一つ弾けない。

「えーつと……。こ、この中で……。作曲できるよー、って方……。いらつしやいましたらお手をお挙げて……。」

……。

一応聞いてみるが……。いるわけない。大体、作曲できたらこんな絶望的表情してないよな……。

……。ど、どうしよ。

八方塞がりのこの状況。：自然と流れる不穏な空気、沈黙。

広すぎる体育館、作れない曲。大きな課題が俺たちを悩ませていると……、

「なんとかなるよっ!」

普段と変わらない明るい声。沈黙を破ったのは……。千歌だった。

あまりの能天気さに、若干やるせない感情を持ち、小さくため息をつく俺。

「……あのなあ。今の状況ヤバいんだぜ?少しは危機感つてのをだない……。」

「……ききかん?」

『ふえ?』と小首をかしげる千歌。

その後口から出た言葉は、ここにいる他の誰も思いつかないであろう内容で……。かつ、ぶっ飛んだ内容だった。

「だいじょーぶだよ!人はいっぱい宣伝すれば、きつとなんとかなるし!曲は……。梨子ちゃんに作ってもらおう!」

……。はい?」

梨子ちゃんに作ってもらう?

あまりに衝撃的な回答に、思わず口が開いてしまう。

「……………ぶっ。」

俺がぽかーん、としていると、後ろの曜が『耐えられない!』かのように嘖き出す。

「……あつははは!千歌ちゃん!最高だよそれ!……いいねえ、梨子ちゃんに作ってもらおう!」

「でしょー？めいあんだよねえ！ねえねえ！翔くんもそう思わない
!？」

…ぼかーん、とする俺。

しかし、あまりの千歌の能天気さに、なんだか自分がバカらしく
なってきた。

「…はは。」

自然と口から笑みがこぼれる。——恐らく曜も同じ事を思ったか
ら笑ったのだろう。

「暗くなってもしよーがないよっ！とりあえず、できることから1
個ずつ！やっていこう？だいじよーぶっ！絶対！」

…まだ梨子ちゃんに許可を貰うどころか、話すらしてないのに。宣
伝したところで、人が集まるかどうか解らないのに。

その自信は、どこから来るのか。と呆れるのと同時に。

なんとかなるんじゃないか、と思う自分もいて。

「…そうだな！くよくよしてたって仕方ないもん！なんとかなるか
！」

気がつくのと、3人で笑っていた。

つい数10秒前は、絶望のどん底だったのに。

千歌の、特殊な力(?)もとい、性格に感謝するのだった。

「「……………」」

「「……………あのお。」」

「「私(マル)達、忘れてません…?」」

…あ。

……………

「…なるほど。」

「噂の転校生というのは、東京から来た桜内梨子という人で…。」

「ピアノができるから、作曲をお願いしよう…ということすら?」

帰り道のバスの中。俺たち2年生で1年生の3人に梨子ちゃんの説明をしているわけなのだが。

…すでに転校生が来ていた、というのは知っていたらしい。…なんというか。やっぱり人数が少ないと流れる情報も早いのか、となんとなくビミョーな気持ちになる。

「おう。まあ…、そんな感じ、かn「それだけじゃないんだよ!」」

俺が1年生の解釈に相槌を打とうとすると、肩から千歌の顔がよつ、と伸びてきた。

近い距離と女の子特有の良い匂い(下心で言ったのではない、決して)に、いくら慣れてきたとはいえドキドキしていると、千歌から梨子ちゃんについてさらに言いたいらしく、口を開く。

「すつごい大人っぽくて、すつごい美人だし!わたし、最初見たとき女子大生かと思ったもん!あ、あとね!東京の音ノ木坂学院から転校してきたんだって!!」

「え?!?!お、音ノ木坂?!?!」

千歌の言葉に、バス車内にも関わらず(相変わらず他に一人も乗ってないのだが)、大声で反応した不屈き物。…まさかの意外や意外、ルビイちゃんであった。

「そ、その梨子さんって!ほ、ほんとにホントに音ノ木坂学院から来たんですかあ!?!」

目を、まるでスクールアイドルについて語る千歌と同じように輝かせ、千歌に何度も確認をとるルビイちゃん。…あ、ということは――

「「奇跡だよ(ですねっ)!」」

はい、確定。千歌と同じように、ルビイちゃんもスクールアイドルが好きらしい。

…まさか、台詞まで被るとは思わなかったが。

輝かしい笑顔と瞳の二人。なんとなくほっこりする風景。：しかし、千歌の次の一言で、この空気が一瞬で壊れる。

「なんとたつて、あの伝説のスクールアイドル、『ユーズ』の学校だもん！運命感じちゃうなあ〜！」

ピシッ。

空気が――壊れる音がした。

「……ち、千歌さん。い、今…、なんて言いました？」

「へ？」

ワナワナと震えながらそう千歌に問うルビイちゃん。：しかし、その声と雰囲気はいつものおどおどしていた小動物感はどこへやら、まるで――オーラだけなら、生徒会長そのものになっていた。

「え、えーつと…。『運命感じちゃうなあ』、かな？」

「その前です。」

「……えーつと、、『ユーズ』の学校？」

それを聞いた瞬間、カツ！と目を見開いたルビイちゃんは、いきなり立ち上がり、千歌に向き直る…つておい！バス走行中だつつの！

「……ぶつつつつつぶくくくですよおおお!!!」

そしてものすごい剣幕で千歌の顔前に接近すると、どこかで聞いたことのあるダメ出しを千歌にぶつけた。

「まさかまだ居るとは思いませんでしたよお！『μ，s（ミューズ）』のことを『ユーズ』なんて呼んでる人!!」

「いいですか!?! μ，s はーギリシア神話に登場する文芸（音楽、詩歌、舞踊、学問など）の女神から来てるんですよ！そんな安直な読み方だったら『you，s』になっちゃうじゃないですか！まさかずくつとそう呼んでたんですか!?!あの伝説のスクールアイドルを!!」

「う…、うん。」

全員、開いた口が塞がらない。

『μ，s』の読み方が『ミューズ』だったのは知らなかったのであ、そうだったのかと思ったが、それよりルビイちゃんの豹変ぶりにただただ驚いている。

「こ、今度から…、はっ…き、気を…はーつ、つ、つけて下さいい…。」

慣れない大声を出したからなのか、酸欠気味のルビィちゃん。ぜはーつ、ぜはーつ、と呼吸を繰り返している。…だ、大丈夫か？

「…ルビィちゃん、前からスクールアイドルに関する事だと目の色が変わってたけど…、ここまでの豹変ぶりは初めてすら…。」

と、今までずっとルビィと一緒に居た花丸ちゃんも、ただただ驚いている。よ、よっぽど千歌の間違えが気に障ったんだな…。

いつも通りの誰もいない車内で、親友の花丸でさえも知らなかったルビィの新たな一面を知るのだった――

……………

「じゃ、また明日な。曜、善子、花丸ちゃん、ルビィちゃん。」

「だからヨハン…「ヨーシコー！」って曜！なによそれ！」

「ま、また明日っ！」「おやすみずらく。」

いつも通り賑やかな沼津組を見送り（そういえば曜のやつ、しれつとヨーソローと違うこと言ってたな）、俺と千歌はいつも通り十千万へ……………。

ではなく。

その隣に建つ一軒家――桜内家に赴いた。

「まさか本当に来るとは思ってたなかつたぜ…。」

「え？じゃあ、他になにか方法あるの？」

あ、いや、それを言われちゃ弱いんですけども…。

そう。俺たち2人は、先程千歌が言った案を早速実行に移すべく、交渉のために梨子ちゃんの家に来ているのだった。

いやね？確かに他に方法は思いつかないわけだけでも。いきなり梨子ちゃんの家に突撃しなくても良いと思うんだ僕。いや、別に女の子の家のインターホンを押すのが怖いとか、梨子ちゃんのお父様が出てきてすっげえ怖い空気になるのが嫌だとか、そういうことではないんだよ？うん……………。

と、頭をブンブン振りながら悶絶している俺を見て、千歌が若干引

く。…まあ、傍から見たら完全に不審者だもんな。

「…なにやってんの翔くん？インターホン押すからねー？」

「ああやめてちよつとまだ心の準備が

『ピンポーン』

嗚呼…、無情にも鳴り響くインターホンの音。せめてお父様だけは出ないでくださいお願いしますう…。

…。

……。

……。

時間にしては数秒だっただろう。しかし俺はその時間が無限にも感じられた。

やがてインターホンの受話器を取る音が聞こえ、スピーカーから、梨子に負けず劣らずの綺麗な声が聞こえてきた。

「はーい。どなたですか？」

すると千歌は、いつも通りのフレンドリーさ全開で、

「えっと、梨子ちゃんの友達の高海千歌っています！梨子ちゃんいますかあ？」

と、本人と違う人が出ても全く動揺しない反応。…マジかよ、ホントにコミュニケーション力高すぎだろ…。

「ちよつと待つてね…。…梨子ー！お友達が来てるわよー！」

千歌の受け答えに、すぐに梨子ちゃんを呼んでくれる梨子ちゃんのお母さん（恐らくだが）。うん、良い人だ。…しかし、声綺麗な。歌手でもやってそうn「お待たせ。」

玄関のドアが開き、そこから出てきたのは、俺たちの望みであり希望。相変わらず美人の梨子ちゃんだった。

……。

「ここが私の部屋。」

「立ち話もなんだから。」と俺たちを家に上げてくれた梨子ちゃん。玄関を通り、2階の一室へ通された。どうやらここが梨子ちゃんの部屋らしい。

何というか…。ザ・女の子の部屋、という感じだ。部屋に入った瞬間漂つてくる、フローラルな良い香り。床には薄ピンクのカーペットが敷かれ、小さい丸テーブルが一つ。右の壁際には、化粧棚？のような鏡付きの台と、勉強机、そして恐らくこれで練習しているのだろう、電子ピアノが並べられている。左の壁際にはシングルベッドと小さな本棚。手前の壁にはクローゼット。そして正面の壁には小さな窓が付いている。そこから光が差し込み、この部屋全体を優しく包み込んでいるかの様だ。

「あ…あんまりじろじろみないで／＼／＼」

俺と千歌がほへー、と部屋を見渡していると、どこか恥ずかしそうにする梨子ちゃん。まあ、確かに見られる方はちよつと恥ずかしいかもな。この辺にしておこう。

「お茶、淹れてくるね。適当に待っててね。」

そう言つて、下に降りて行く梨子。…うーん、なんて良い子なんですよ。

「そりゃー!」

ボフツ。梨子ちゃんがいなくなった瞬間。千歌が梨子ちゃんのベッドにダイブ。おいこら。確かに適当にしててとは言つてたけども。それはテキトウすぎだ。

「全く…。少しは梨子ちゃんを見習つたらどうだ？見るよ、この女の子らしい部屋。…それに比べてお前ときたら。」

節操のかけらもない千歌の行動に、思わずため息が出る俺。

「なんだとー!」

「事実を言つたまでだ。」

「むきーっ!」

怒つたときにむきーっ、何ていう奴初めて見たよ俺。

そんなこんなでギャーギャー言い争っていると、お盆にお茶を淹れたカップを乗せてきた梨子ちゃんが登場。若干苦笑いしながらテ-

ブルにカップを並べた。…どうやら聞こえていたらしい。

梨子ちゃんの反応で千歌も気付いたのか、急に縮こまり、のそのそとベッドを降りてテーブルにやってくる。…超恥ずかしい。

「え、えーっと…。それで、用事ってなにかな…?」

空気を察した梨子ちゃんが、ためらいがちに話を切り出す。お、大人すぎる…。

「あ、えつとな。梨子ちゃんって、ピアノが出来るんだろ?」

先程の失態を帳消し、もとい忘れるべく、真面目な顔つきにした俺は、梨子ちゃんに質問する。

「え?ピアノ?…そんなに上手くないけど。一応、出来るよ?」

片手でかぶりを振りながら、遠慮がちに告げる梨子ちゃん。え、そうなのか?と一瞬思ったものの、梨子ちゃんが座っている場所の後ろにある机が視界に入った瞬間、その思考を撤回。さつきは良く見てなかったが、机の棚にいくつかの『○○コンクール優勝』だの、『××コンクール最優秀賞』だののトロフィーが飾ってある。…おい!謙遜しすぎだろ!思いつきり実力者じゃねえか!

もうちよつと自信持てよ…と思いつつ、ここに来た理由である、核である質問を投げかける。

「その腕を見込んで、お願いだ!千歌達のライブの曲、作ってくれないか…!」

「え…。…えええええ!」

部屋中に、梨子ちゃんの驚きの声が響き渡った。

……

「お願いします!このとーり!!」

オレンジ色の西日が差し込む梨子ちゃんの部屋で、俺と千歌は揃って土下座。

「え…。えつと…。と、とりあえず顔上げて?ね?」

人に土下座などされたこと無いのだろう。どう対処していいかわからず、あたふたしている。

しかしそんなことは知ったこっちゃやない。日本古来の最上位の頼み方（かどうかは知らんが）である、土下座をただひたすら続ける俺たち。

ぶつちやけ、ここで断られたら後の方法が無い。まさか音楽の先生に頼むわけにもいかないし、俺たちじゃ根本的に不可能。頼みの綱は俺たちの目の前であたふたしている梨子ちゃんしかないない。

「お願いします!!」

そのことからか、焦りからかより声が大きくなる俺たち。ただひたすらに頼む。頼む。頼む。お願いだ、届けこの思い。

「…自信がないの!」

その時、ずっとあたふたしていた梨子ちゃんが、若干涙ぐみながら言った。

顔を上げる俺たち。

「…私ね、ここに来る前は、東京でコンクールとかにちよくちよく出て。…いくつか、賞も貰ったこともあって。ピアノ、楽しかったの。」
机の方に振りかえり、トロフィーを見つめてふふ、と笑う梨子ちゃん。

「一曲まるまるじゃないけど、少し作曲とかもしてみたりしたこともあったの。…だから、作曲はできない事もない。」

こちらに視線を戻し、でもね、と口調を弱める。

「…ここに来る前のコンクールでね。私、弾けなかったの。そのコンクールはね、今までで一番大きなもので。ホールもけた違いに大きかったの。」

梨子ちゃんの表情が、だんだんと険しいものになっていく。

「…それでも、いつも通り、練習通り。そうやって弾けるはずだった。今までそうだったから。お辞儀をして、ピアノの席に座って…、さあ弾くぞ、つて時にね。いきなり頭が真っ白になっちゃったの。おかし、こんなこと今まで無かったのに。指が動かなくて。そのまま弾かずに、席を立って退場したの。」

梨子ちゃんは、悔しそうな表情で、さらに続ける。

「それ以来、私はコンクールに出なくなっちゃったの。せつかく大きなコン

クールに呼んでもらったのに、期待に答えられない事しちゃったことが心に響いちやって…。人前に出るのが怖い、とかじゃないんだけど。失敗したらどうしよう。期待はずれだったらどうしよう。…そんな事ばかり考えるようになったらどうやって。」

「そんな時、お父さんの転勤の話が出てね。言い方悪いかもしれないけど、新しい場所、しかも人が少ない田舎だったら…、変な重圧感もなくすむかもって。それで…、ここに来たの。引越しが終わって、砂浜で海を見てたらね。『海って静かだなあ。』って。都会の重圧に疲れてた私は、海はどんな感じなんだろう、って思って、それで飛び込もうとしてたんだ。」

「…そうか、それであの時…！」

脳が梨子ちゃんとの出会いを再生する。「海の音が聞きたい」って、あの時は大分危ない人だと思ってたけど、そういう経緯があったのか。凡人の俺には解らないけど、海の中でなにか感じたいことが梨子ちゃんにはあるのだろうか。

「…ええ。そういう事。ごめんなさい。話が長くなっちゃって。」

話が終わると、さつきまでの険しい表情が消え、元のキリっとした美人顔に戻る。

「だから、そういうわけで私は——」「じゃあ、海の音を聞きに行こうよ！」

できない、と梨子ちゃんが言いかけたところで、千歌の明るい声がそれを遮った。

…っておい、今とんでもないこと言わなかったか？

「…千歌？確認していいか？…今、なんだった？」

俺の問いかけに、いつもと変わらない能天気ボイスでリピートする千歌。

「海の音。聞きに行こうよ！って。」

…聞き間違えじゃなかった。えっ？つまりそれって…

「このまだ肌寒い季節に、海にダイブしようってことで間違いないか？」

「うん！」

即答かい。ちよつとは考えろよ…

「アホか！この前梨子ちゃん止めるとき、『嘘…、まだ4月だよ…!?!』とか言ってたの、お前じゃないかい！」

素早く否定に入る俺。こいつの事だから、「だいじょーぶだいいじょーぶ！」とか言い出しかねん。梨子ちゃんを止めたときのお前の理性を呼びさませ千歌！

しかし、千歌に至っては真面目に（全く真面目そうには見えないが）海に入ろうとしているらしく、取り消すつもりはないらしい。

「だいじょーぶだよ！そのまま飛び込もうってわけじゃないから！」
「じゃあどうすんだよ！」

あやつのは本当は読めない。…しかし、次に口から出された言葉は、意外にも定石というか、一般的な方法だった。

「淡島に、私の幼馴染がやってる、ダイビングショップがあるんだあ。そこで海に潜ろう！」

そう言って千歌は梨子ちゃんの手を取ると、若干戸惑っている梨子ちゃんに

「とりあえず曲のことはおいといて！海の音、聞きにいいこうよ！…実は、チカもちよつと興味あるし！海の音！」

にしし、と笑いながら言うと、梨子ちゃんは少し考えていたようだったが、

「…わかったわ。」
と了承してくれた。

そしてその後、終始ニヤニヤしっぱなしの千歌と、まだ少し不安げな俺と梨子ちゃんて話し合い、次の日曜日に淡島に行くことに決定。

「…大丈夫だろうか。」

その後梨子ちゃんの家を出て、自分の部屋に帰ってきた俺は、ボソリと呟く。

しかし、ダイビングという貴重な経験ができるのもまた事実。

「とりあえず、美渡さんに次の日曜はお休みさせてもらえるように

言つとかないとな…。」

そう呟き、期待と不安を胸に持ちながら、1階の美渡さんの元へと行くため、部屋を出るのだった。

……

「…榮倉、君…か。」

突然の来客が帰り、しん、と静まり返る自分一人しかない部屋。いつも通りの筈なのに、この静けさが少し寂しい気がして、可笑しいなどクスツと笑う。

思えば、少し不思議な人だ。

初めて出会った時(かなり衝撃的な最初だったが)、4月の冷たい海に飛び込もうとしていた私を、懸命に止めようとしてくれた。…結局落ちてしまったけれど、海岸に戻るまで溺れない様に抱きよせてくれて。あの時の、細身だけどそれでいてしっかりとしか体つきは鮮明に覚えている。男の人にあんなことされたのなんて、初めてだし。…というか、海に落ちて助けられるなんてシチュエーション、普通は無いだろうけども。

今日だって…。スクールアイドル部のために、いきなり土下座までしてくるなんて。…正直、驚いた。

男の人は、なんとなくそっけなくて、プライドが高くて…。なんとなく『怖い』というイメージがあった。

でも、榮倉君は全然違う。

見ず知らずだった私を助けてくれて、自分のことより周りの事を考えてて…。そのためなら今日のように、平気で土下座もしちゃう男の子。

…この気持ちはなんだろう。

もっと、あの人のことを知りたい――

榮倉 翔の存在が、自分の中で少しずつ、大きくなっていく梨子なのだった。

B i r t h d a y s t o r y 渡辺曜

「…そろそろ寝るか。」

時刻は10時過ぎ。最初こそ緊張していた居候も、最近はだんだんと慣れてきて。自分の部屋では完全に気を緩められるようになってきた俺は、大きなあくびをしながらいつも朝お世話になっている目覚まし時計の時刻を見ながら、それとなく呟いた。

俺は朝は強い方だが、さすがに夜更かししてからの寝起きはキツイ所がある。そのため部屋の電気を消し、今日も比較的健全な早い時間に床に着こうと思っていた、その時。

とんとん。

俺の部屋のドアが叩かれた。一瞬どきりとするが、すぐに「どうぞ」と返事をする。別にやましい物はない。誰が入ってきてても時に問題はないのだ。

「しつれいしまーす…。」

すすす、と扉を開き部屋に入ってきたのは、やっぱりアホ毛がびよこんと跳ねている（いつになったら跳ねなくなるのだろうか）、千歌だった。

「どうした？何か用事か？」

電気を消した薄暗い部屋の中に、ちょうど雲から出た月が明かりを差し込ませる。青白く照らされた室内は、どこか幻想的な光景のような気がした。

それは、同じく月明かりに照らされている千歌も例外ではなく。風呂上がりのパジャマだけ、という薄着も重なり、いつもとは違う雰囲気醸し出している。

「あ、あの…ね…っ。」

急にもじもじと顔を俯かせる千歌。心なしか、顔も赤くなっているような気がする。

ドクン。

いつもとは違う部屋の雰囲気と、千歌のこの反応。この2つの現象

は、俺の中の『告白なんじゃないか』という思いを引き出させるのに十分だった。

その瞬間、急に心拍数が上昇する。

…え？マジで？本当に俺告白されちゃったりするの？

意識すればするほど、心臓が早鐘のように打ちたてられる。

いや、落ち着け。まだそうと決まったわけでは、いやでも本当にそうだったら。

様々な感情がぐるぐると渦巻き、軽くパニックに陥っていると。

「大事な話があるんだけど…。」

「な、なにかな?!」

動揺してか、しどろもどろの返事になってしまう俺。いや、これは本当に告白かも…!!

なんて思っていた俺の思いは、一瞬で打ち碎かれることになる。

次に千歌の口から出た言葉は、告白とは程遠い、まったく関係ないことだった。そしてその言葉は、同時に俺を絶望の淵にたたき落とす破壊力を持っていたのだった。

「明日…、曜ちゃんの誕生日なんだけど…。誕生日プレゼント用意しておいてね、って言うの忘れちゃって…。明日までになんとか、して?」

この瞬間、俺は絶望に打ちひしがれると同時に、自分の思い込みに自分で赤面し、これからは雰囲気感に惑わされないようにしよう、と膝をがくりと折るのだった。



ヨーソロー!

どうも、渡辺曜であります!

日付が変わって本日4月17日。この日は私にとって特別な日!

そう、今日は何を隠そう、私渡辺曜が生まれた日——誕生日なのでありますっ!えへへ♪

普通の人にとってはただの気だるげな平日の1日かもしれないけ

ど——私は朝からテンションMAX!

だってね、朝ごはん食べに下に降りたら、さっそくママが私にプレゼントくれたんだ!開けてみたら、なんと前から欲しかったブランドのバッグ!前使ってた物は穴あいちやってたから:凄いい嬉しかった!それとね、千歌ちゃんたちが十千万で誕生日パーティーを開いてくれるんだって♪ホントに最高の1日になりそうだよ:!!放課後が凄く楽しみだなあ:♡



「やして...」

いつもの時間より20分早く起床した俺は、本日の必須項目、『曜にプレゼント』をどうするか思案すべく、起きたばかりの脳を懸命にフル回転させる。

「どうするか...:」

あの後千歌から聞いた詳細によると、今日の放課後にここ十千万にスクールアイドル部のみんな(十梨子ちゃん)で集まり、曜の誕生日会を開くらしい。そして、そこでみんな各々持ってきたプレゼントを渡すらしい。(ちなみに、俺以外のみんなは曜の誕生日の事を千歌に事前に教わっていたらしく、準備も万端らしい。なんで俺だけ忘れんだよ。)

会の開始時刻は午後6時。つまり、そこまではプレゼントを用意して、十千万にいないではならない。

プランとしては、沼津にある大型ショッピングモールに行き、そこで何かしらの物を買ひ、迅速に戻ってくる、というのがベスト。:だと思う。というかそれしか思いつかない。

学校が終わる時間が午後3時30分。そこからバスに飛び乗り、到着まで1時間。帰りも1時間かかると考えると、プレゼントを選ぶ時間は約20~30分。

「曜へ渡すもの、なんとなくでもイメージしとかんと:。30分じゃ絶対決めきれんぞ:。」

ケーキ、などはまず論外だろう。恐らく会の料理に出てくるだろうし。となると、小物や雑貨、という事になるのだが…。

生憎、俺は女子にプレゼントなぞしたことがない。ゆえに、小物のアクセサリーだの雑貨だの言われても、さっぱりである。選べる自信はこれっぽっちもない。

「ああああ…。どうすればいいんだあ…。」

あれはだめ、これもだめ、とあれこれしている内に、あつという間に20分が経過。スイッチを切るのを忘れていた目覚まし時計が、いつもの時刻にけたたましくなり始めるのであった。

……

「チクショウ…。なんも思いつかねえよお…。」

「ま、まあまあ翔くん…。まだ時間はあるからさあ…。」

若干苦笑いの千歌を、元はといえばお前が教えてくれなかったからだぞ、という目線で軽く目を見ると、ぷいっと視線を逸らされる。…こ、このやろう。

「…じゃあ千歌。お前は曜に何をあげるんだ？」

これ以上追及してもしょうがない、これからの事を考えよう。と小さくため息をついた俺は、参考程度に千歌のプレゼントを聞いてみることにした。

千歌は俺の怒りが沈んだ事に安堵したのか、再び俺の方へ視線と体を戻すと、

「私はねー、みかん！曜ちゃんみかん好きだからさ！いっぱいあげるんだっ！」

と、俺が初期構想段階で論外にした『食品』をいきなり出してきいた。いや…。まあさ、誕生日だからさ、食べたら消えちゃうものじゃなくて、ずっと残るものがいかな、みたいな事を思ってたからさ…。

大体、曜の好きな食べ物といえども、誕生日にみかんってどうよ…。と思いつながら、相変わらずの明るい笑顔の千歌を眺める。その笑顔からは、誕生日だから。とかそういうのではなく、単に『好きな物』をあげよう。という単純な気持ちが見えてくる気がして。

まあ、新鮮でいいのかもな…。…みかんだけに。などという全く面

白くない洒落を頭に思い浮かべながら（洒落になっっているかどうかも謎だが）、さらにあれこれと思索していくのだった。

……

「曜へのプレゼント…」

「何を用意したのか…」

「教えてくれ、ずらか？」

昼休み。結局午前の授業中も全く頭から離れず、そして決まらず。あんまり他の人のプレゼントを聞くのはどうかと思うのだが、この際なりふり構ってられない。

…というわけで。まずは1年生のトリオから聞こうと1年生の教室までやって来たのだ。

最初来た時こそ教室の全員から警戒レベル全開で見られていたのだが、最近はそれも緩んできたように感じる。…逆に俺を見る目が変わったというか。興味があるような感じでちらちらとこちらを見てくる視線を多方向から感じる。…これはこれで肩身が狭いような。

それもこれも、スクールアイドル部にこの子たちが入ったからなんだろうなあ、と改めてまじまじと3人を見る。…しかし、特にルビィちゃんはまだ男に対して抵抗があるのか、すぐに頬を赤らめてさっ、と視線を外してしまう。いやまあ、そういうところもかわいいんだけどね？

…つと、いけないいけない。本題に入らんと。なにせ時間はもう6時間もないのだ。

「そうそう。参考程度に、聞いてみたくてさ…。教えてくれない？」

両手をぱちん、と合わせて頼むと、3人は若干不思議そうな顔をしたが、すぐに教えてくれた。

「えーつと…、マルは、水泳のお話の本をあげるすら。曜さん、水泳部と兼部してますし。親近感が湧く内容なら、楽しく読めるかな、って思ってる。」

「ル、ルビィは、 μ sのライブDVDをあげようと思ってます…。曜さん、あんまり μ sの事知らないみたいですから…。これを見て、知って貰おうかなって…。」

「ふっ…。ヨハネが渡す我がリトルデーモンへのm「ありがとな！参考になったわ」ちよつと!!聞きなさいよ！」

え、だって、なんか長そうだったし…。

ぶんぶん怒りながら難しい厨二言葉をなんとか訳すと、どうやら某サバイバルホラーゲームの最新作をあげるらしい。曜が怖がる姿を見たいんだそう。ふっふっふつと不敵に笑っている。…うん、まあ…、うん。良いんじゃないかな（遠い目）。

「ところで、翔？なんで今になってそんな『参考に』聞きに来たのよ？もうプレゼントは用意してあるんでしょ？」

みんな色々考えてるんだなあ…。と思っていると、善子がもっともな質問をしてきた。…まあ、普通に考えたら、そう思うよなあ。誕生会、今日だし。

「実はな…。」

と昨日の千歌とのやりとりを説明すると、全員そろって苦笑い。顔は、「まあ、千歌さんだし。」というような諦めと、「可哀そうに…。」という俺への憐れみのはつきりと解るような表情である。

「まあ…。あんたも大変ね…。」

善子が、俺の肩をぽん、と叩く。

「師匠。…がんばるぞら。」

「がんばルビィ！ですよ、先輩！」

…後輩たちに慰められるのがこんなに心にくるとは。

鈍く痛む胸を手で押さえながら、自分の教室に帰るのだった…。

……

キーンコーンカーンコーン…。

「じゃーまた後でな!!」

「うん、がんばってn…」

千歌のメールも聞き終わる前に、帰りのHRが終わった瞬間、教室からダツシュ。…時間にして約3秒。いまだかつてこんなに早く教室から出たのは、自分史上初、ぶつちぎりの新記録である。金輪際こんな早く教室から出る機会がないことを願いつつ、げた箱で靴を履

き替え、バス停に急ぐ。

「の、乗ります乗りまーす!!!」

今まさに発車しそうだった31分のバスになんとか滑り込みで乗り込む。…あ、危なかった。

これを逃すと次に来るのは30分後。いきなり詰んでしまう。息を切らせながら、バスの一番後ろの席に座る。よし、第一段階クリア。後はモールで買い物をして、帰るだけである。

「…って、結局何をかうか全く決まっていんだけどなあ…。」

1年生に聞いた後、曜にばれないようにこっそり梨子ちゃんにも聞いたのだが、梨子ちゃんは、曜の人物絵を描いてプレゼントすると言っていた。…梨子ちゃん、絵も描けるのかよ。マジで凄いな。

絵でもコンクールとかの賞貰ってたりするのかなあ、と思いつつ。少しでもイメージを固めるため、モールに着くまで携帯で雑貨や小物のアクセサリーを調べまくるのだった。

……プシユー。

…よし、到着!

バスからショッピングモールの入り口に降り立った俺は、少し急ぎ目に入口をくぐる。さて、何を買うべきか…。

早速案内板を見て、どこへ行くかうか大まかに見る。…この場所は事前に調べたものの、なにせ実際に来るのは初めてなのだ。転校してくる前のモールだったら案内など見なくても、どこに何があるのか余裕で解るんだけどなあ…。と思いつつ、周りをきよろきよろしながら、雑貨屋へ向かう。

「さて、時間も無い。早く決めないと…。」

残り時間は25分。自分を鼓舞し、雑貨屋へと一人突撃していくのだった。



「頑張っってねー……………」

すつごい早さで教室から出てった翔くんにせめて応援をしようと思っただけど、それすら聞こえたのかどうか。…ああ、お願い神様仏様μ s様っ!せめて、翔くんが間に合いますように……。…つて、いけないいけない。チカにはチカでやることをしなくてはっ!

それは——翔くんが帰ってくるまで、曜ちゃんになんで翔くんがいなくなったのかばれないようにすること。「翔くんが今日プレゼントを買いに行った」なんてことが曜ちゃんにばれちゃったら、きつと、準備もしないだらしない男の子だって思われて、翔くんが曜ちゃんに嫌われちゃうかも……。元はチカのせいなのに、そんなことは絶対だめだっ!!!

「千歌ちゃん。今、凄い勢いで翔くんが出てったけど…。何かあったの?」

「え!?えーつと…。えつとねえ…。」

ふわあ!い、いきなり曜ちゃんが来たよ!しかも最初から翔くんの事だし!

ど、どうしよ…。

「…千歌ちゃん?」

「ふえ!?あ、えつとね…。と、といれ!そう、トイレだって!翔くん、さつきからずつと我慢してたみたいで!」

「え?でも、さつき千歌ちゃん、翔くんに『頑張つてね…』みたいな事言っってなかった?」

き、聞こえてたのお?!?曜ちゃん耳良すぎでしょ!?

「え、えつと…。おなか痛いみたいだったから…。」

う、うう…。おなか痛い人に『頑張つてね…』つてなんだよお!チカ、嘘つくのがへたくそすぎる…。

でも、曜ちゃんは勘違いしてくれたみたいで。

「お、お…。そんなに深刻な腹事情だとは…。翔隊員、頑張つてくれであります!」ケイレイツ

曜ちゃんがトイレの方向に向かって敬礼している。よ、良かった…。なんとかばれてないみたい。

「じ、じゃあ帰ろ？ 曜ちゃん、一回家に帰るでしょ？」

「え、でも翔くん待ってた方が…。」

「いいのいいの！ ほら、いこっ!!」

曜ちゃんの背中をぐいぐい押しして、強引に帰る。これ以上ここにいたら、さすがにばれちゃうよ…！」

「え、え、ちよつと、千歌ちゃん…！」

不思議そうな顔をしている曜ちゃんをぐいぐい押す。もうだめだ！ チカ、これ以上はなにも思いつかないよお…！ とりあえずバスに乗っちゃえば大丈夫だから、曜ちゃんには悪いけど、なにも話さないでただ押し続けよう。うん。

自分の不器用さに内心涙を流しながら、ただひたすら曜ちゃんを押しすのでした…。



「ま、まずい…。何も見つからん…。」

あれから約20分が経過。いろんな雑貨屋、アクセサリ屋をめぐり、ありとあらゆる物を見てきたのだが、全く決まらない。

…まず、正解が解らない。シユシユ？ だとか、髪留めだとかは、色々種類がありすぎて解らない。なんか、大きさも違うみたいだし。もしサイズが違つてたらどうしよう、だとかの不安があつて、購入に踏み込めない。まず、髪留めに大きさつて何だよ…。そんなもん、男の俺には無縁なので、触った事もないレベルなのだ。全くわからない。よつて買えない。さらに、アクセサリ系。これは単純に予算オーバー。桁が一ケタ違う。…場合によつちや2ケタ違う。こんなん、バイトもしてない高校生には買えるわけがない。よつて却下。

…とまあ、色々うろろしているうちに、後5分という状況になつてしまったのだ。マズイ、本当にマズイ。

「こ、こうなつたら子供っぽいかもしれないが、最初の店に置いてあつたセイウチのぬいぐるみで…。」

と、最初の店に向かつて歩き、いや走り出そうとしたとき…。

「…!? こ、これは…!!」

たまたま目に入った店のアイテムが、俺の心を揺り動かした。…値段も手ごろ。

「よし…!!これだ、これしかない!…すみませーん!これ下さーい!」
そして買った物をラッピングしてもらい、その後全力でダッシュ。
発車20秒前、という所でまたもやギリギリに乗り込んだのだった。

……

…

……

……ガクンッ!

「?!?」

どうやら、神は俺の事をとことんいじめたいらしい。

プレゼントも買った、バスにも間に合った。これで、ギリギリとはいえ、6時には間に合う。…はずだった。

40分くらい乗っていただろうか。俺は時間に追われていた重圧の解放、度重なるダッシュの疲労により、こつくり、こつくりと船を漕ぎ始めていた。

その時。

ガクン、という衝撃とともに、バスが大きく右に傾いた。停車するバス。何事かと思っていると、俺以外誰もいない車内に、車掌さんからの声が響く。

「すみません…。どうやら、パンクしてしまったようです。申し訳ないですが、これ以上の走行はできません。」

ま、マジでえ!?

そんな漫画みたいな事あるかよ、しかもこのタイミングに!?!と思うが、さっきの衝撃と今右に傾いているバスが真実を告げていることは明らかだった。

「すみませーん!次に来るバスは何分後ですかー!?!」

焦りからか、つい大きくなってしまった声で車掌さんに聞くが、そんなにすぐには来ない。最低でも30分は待たせようと言われる。

それを聞いた瞬間、俺は座席から立ち上がり、運賃はいらない、と

いう車掌さんにここまで運んでもらったんだから、と最寄りのバス停までの運賃を払うと、外に出る…。と同時に十千万に向けて走り出した。

時計を見ると、残り20分。

「ちくしょう…。なんて日だよ…。」

万に一つの可能性。間に合うことを信じて、俺は全力で夕暮れの道を全力で走るのだった……。



さてさてっ！十千万に到着！

マウンテンバイクを駐輪場に停めた私は、裏口から十千万、もとい千歌ちゃんの家に入る。

「おっじゃましまーすー！」

「おっ！来たな！今日の主役が！」

中に入ると、出迎えてくれたのは美渡ねえ。私、千歌ちゃんの家には小さいころからしょっちゅう行ってるから、私、美渡ねえも志満ねえもホントのお姉ちゃんみたいなきもちに思ってた。

「ヨーソロー！千歌ちゃん、どこにいる!?!」

なーんて、軽い口調でいつも話してるんだっ！

「千歌なら、たぶん自分の部屋にいるよ。…まったく、少しは手伝えてのに。」

ブツブツと呟く美渡さんに苦笑して、2階にある千歌ちゃんの部屋に向かう。いつも行く慣れた千歌ちゃんの部屋への道を鼻歌を歌いながら歩いている。千歌ちゃんの部屋の手前で『翔』と書かれたプレートが下がっている部屋を見つける。…あ、そういえば翔くん、千歌ちゃんの家に住んでるんだっけ。

「…いいなあ。」

ぼそっ、と呟いた瞬間、顔が一気に赤くなる。い、いや、別に私も翔くんと一つ屋根の下で暮らしたいとか、そーいうわけじゃ…／／／ちよつとは、…あるけども。

「わー!! なしなし、今のなしっ!!」

両手をバタバタと振って、さっきの言動を取り消しにかかる。…でも、赤くなつた顔は、しばらく戻らなくて。

逃げるように、千歌ちゃんの部屋へと入る。

「お、おはヨーソロっ!」

「よーちゃん、もう夕方だよー? それに、朝学校で会ったじゃん!」

「そ、そーだね、えへへ…。」

いつもと変わらない幼馴染に安堵する。…いつのまにか顔の火照りは治まつたようだ。

「あ、そういえば翔くんは? 部屋にいるの?」

顔の火照りが治まつたからか、抵抗なく翔くんの事を聞く。

「えっ!? いや、えっとお…。…そう! うん、部屋にいるよ!」

さつきから翔くんの事になると慌てたようになる千歌ちゃん。…どうかしたんだろうか?」

「あ、そおなんだ。…そういえば、浦女でおなか痛い、とか言ってたよね。どれどれ、ここはひとつ具合でも聞きに行つてきますか。」

そう言つて部屋に行つてみようと方向転換すると、

「だ、だめえー!!」

という千歌ちゃんの声。…え、ええ? なんで?

「か、翔くん、まだおなかないんだって! だから、まだ安静にしてるらしいからっ!!」

「え、ええ…う…だったら、普通はトイレに行くんじゃない?」

やっぱり慌てている千歌ちゃんの謎の言動に私は首をかしげる。…なんでさつきから千歌ちゃんは私を翔くんから離そうとするんだろう…?」

千歌ちゃんには悪いけど、やっぱり怪しい。

そう思つて、やっぱり翔くんの部屋に行つてみよう。と部屋を出ようとする、『ぴんぽーん』とインターホンの音。

「あ!! ほ、ほら! きつとほかのみんなだよっ! さ、さ! した行こー!」

「ちよ、ちよつとお!? 千歌ちゃあーん!?!」

なんとなくホッ、としているような千歌ちゃんにまたまた背中を押

されて、（しかもさつきより力つよい！）下に降りると、玄関先には梨子ちゃん、善子ちゃん、花丸ちゃん、ルビィちゃんが。

「こんにちは。」

「ふっ、ヨハネ、降臨！」

「こんにちは。…善子ちゃん、挨拶はちゃんとするずら。」

「こ、こんにちはっ！」

…って、あれ？もうみんな来たの？と思って時計を見ると、ぴったりに午後6時。

「み、みんないらっしやーいつ！さ、さ！早く上がって！こつちだよ！」

と、千歌ちゃんがみんなの事を促して、誕生会の会場らしい宴会場に案内する。

がらっ、とふすまを開けると、そこにはたくさん料理が。…す、すごい。こんな量、食べきれないよ…。

「ずら〜！」

あ、さつそく花丸ちゃんが目を輝かせてる。…確かに、このおいしいような料理目の前にしてたら、食べたくなるよね。私も、おなか空いてきちゃった。

「早く食べたいずら〜。ねえルビィちゃん？」

「だ、駄目だよ花丸ちゃん。まだ翔先輩が来てな…。」

来てない、と言おうとしたのだろうか。そこではっ、と口を噤むルビィちゃん。…え？何か翔くんにあるの？

「翔くんなら、2階にいるはずだよ？ねえ千歌ちゃん？」

「……え？う、うん！いるよ！」

やっぱり翔くんの事になると落ち着かなくなる千歌ちゃん。

「え？師匠、もういるず」「…っ！ズラ丸！」

そこで、ぼろりと漏れた花丸ちゃん言葉。…その瞬間、私はほぼ確信した。

「ねえ、翔くん…。いないんでしょ。千歌ちゃん。」



「…はあつ。…はあつ、はつ、はつ…。はあつ…はあつ…。」
と、…………と、とうちゃ、く。

ぜはーっ、ぜはーっ、と息を切らせながら、よろよろと十千万の入
口へ。時刻は…、午後6時5分。やばい、遅刻だ…。

明日は起き上がれんかも…。これまで生きてきた中で一番必死
に走った気がする。と息を整えながら、回らない頭でぼーっとなんか
ことを考える。…卓球部じゃなくて、陸上部だったら間に合ってただ
ろうなあ。

「…って、はつ…、はつ…、…そんなこと考えてる場合じゃない。は、
早く行かないと…。」

玄関を通り、事前に千歌に教わった通りの宴会場へ。玄関の靴の数
を見るに、もうみんなは揃っているようだ。

さて、どうやって言い訳しようか、と思いつながらふすまに手をかけ
る…。という所で、中から「ま、待ってよーちゃん!」「放してよ千歌
ちゃん!」という千歌と曜の声。あ、このパターン知ってる。と思
い、瞬間的にふすまから手を離そうとしたが…。遅かった。

「千歌ちゃんの言う通りなら、2階にいるんだよね!?私、呼びに行つて
くるから!」

がらっ。

曜の若干声を荒げながら、目の前に現れた。流石に3回目。完全に
展開を読んでいた俺は、曜が現れた事には全く動じなかったのだが
…。大きな誤算が。

それは、曜の勢いが強すぎたこと。

恐らく、ふすまを開けると同時に飛び出すような感じで出ようとし
たのだろう。一瞬で俺に接近してきた。…それによって、何が起き
たのかというところ。

ぼふっ。

曜が、俺の胸に突撃してきた。しかも軽く頭を乗つける、みたいな少女漫画のような感じではなく…、結構な衝撃で。

反射的に俺は急にきた衝撃の原因、曜を少し後ずさりすると同時に両手で抱きとめる。彼女に目線を向けると、まだ自分がどんな状況に陥ってるのか、解っていないような様子だった。

「いつつ…。よ、よお、曜。悪い、遅くなった。」

「……………えっ？」

俺の胸に顔を埋めていた曜が、ちら、と視線を上げる。俺と視線が完全に合った瞬間、曜は自分の置かれている状況が完全に理解できたようで…。

ボツ、と音が出ているような勢いで顔が真っ赤に染まり、目が見開かれ、口をぱくぱくさせる。

「……………よ。」

「……………よ？」

「…よーそろおおおお!!」

え、ええ…。それ、悲鳴にも使うのかよ…。

曜の叫び声が、十千万にこだまするのだった

「い、いやあー、すまん！遅刻しちゃって…。…曜、さつきはごめんな？」

俺は両手を合わせ、みんなに謝罪する。…特に、曜には色んな意味で念入りに。

「い、いいよ！そんなに遅れてないし…？」

さつきの事を思い出したのか、また顔を赤くする曜。…うん、もうこの話題を出さない方がよさそうだ。

「さ、さあさあっ！みんな集まった事だしっ、座って座って！曜ちゃんはどこだよっ！」

と、千歌がみんなを促すとともに、曜を長テーブルの端——いわゆる、『お誕生日席』に座らせる。

みんなが思い思いの場所に座り、それを千歌が確認すると、ペット

ボトルのふたを空け、グラスにジュースを注いでいく。

「…さあ！では、今日の主役の曜ちゃん！乾杯の音頭をお願いします！」

全員にグラスが行きわたった事を確認した千歌が、曜におもちやの王冠を被せつつ（そんなんあつたんか）、乾杯の音頭を依頼する。

「…えっ!?え、ええつと…。み、みんな、今日はこのような会を開いてくれて、どうもありがとう。か、乾杯っ！」

かんぱーい、と曜に合わせてみんなでグラスを合わせて音を鳴らす。それを皮切りに、なんとなく微妙な空気を残したまま、曜の誕生日が始まった。

「さてさて！それじゃあまずは、誕生日プレゼントを曜ちゃんにプレゼントだ！」

ぐーっ、とグラスのジュースを飲みほした千歌が、料理を食べる前にあげよう、と提案した。おっと、いきなりか。と多少身構えたものの、ここに来るまでは絶望しかなかったが、今はプレゼントも持っているし、しかも自信がある。遅かれ早かれ渡すのだ、と。特に断る理由がない俺とみんなは了承する。

「じゃあ、私からね！…はい、どーぞ！」

私から、と言った千歌が、いきなりテーブルの下に顔を潜り込ませ、何やらごそごそ始めた…。と思いきや。大きな箱を引っ張り出して、すぐにテーブルから顔を出してきた。朝、千歌から聞いていた通り、どうやらみかんが大量に入った段ボール箱らしい。…そんなところに隠してあったのか。

「うわあ！…こんなにいっぱい！…ありがとう、千歌ちゃん！」

曜がそれを見た瞬間、目を猛烈に輝かせる。お、曜はみかんが好きなのか。と思うと同時に、本当に食品でも良かったのか…。というなるともいえない悔しさのような感情が。

その後、この場にいるメンバーひとりひとりが曜にプレゼントを渡していく。

曜は、全員のプレゼントをととても喜んで受け取っていた。そして

…、最後に俺の番がやってきた。

「じゃ、最後は俺だな…。…：曜、誕生日おめでとう。」

俺はラッピングしている袋を入れておいた鞆から取り出し、曜に手渡す。

「うわあ…!!ありがとう！開けてもいい？」

「おう、これ、見た瞬間にビビツときたんだ。自信あるぞ？」

「ほんとう？えへへ、楽しみだなあ。」

そう言っつて曜が袋に結んである袋を解き、中から俺のプレゼント

『YOU』と前面に書かれた黄色い帽子（キャップ）を取り出す。

「うわあ…!!すごい！私の名前が書いてある！」

俺のプレゼントの全貌を見た曜は、より一層目を輝かせる。

「凄いだろう？これ見つけた時、もう一瞬！で決めたぜ。」

「ありがとう!!これ、すっごく気に入ったよっ！…えへへ、被っちゃお♡」

喜んでくれて何よりだ。早速帽子を被ったニコニコ顔の曜を見て、ホッと胸を撫で下ろす。

「え、ええーっと…。」

「それは…。」

「か、翔…。」

「ど、どう考えても」

「『あなた』の方のYOUすら…。」

…ん？何か言ったか？

後ろを見ると、全員が『それはないわー』とでも言いたげな顔。…ええ!?なんでええ!?

「翔くん…。」

「榮倉君…。」

「翔…。」

「師匠…。」

「せ、先輩…。」

「二」「センス無い（ずら）（です）よ…」「」

「う、ウソだろおお?!?!」

ニコニコ顔の曜と、冷たい目線のみんな。

両方から、真逆の視線で見つめられる俺は、どっちが正しいのか解らずにいるのだった…。



「はあく！今日は楽しかったなあ〜！」

時刻は夜9時。部屋の電気も点けずにボフィン、とベッドにダイブした私は、今日一日の余韻が抜けないまま、ニヤニヤ顔でまくらに抱きついていた。

「ママからはバッグ貰ったし、学校みんなはお祝いしてくれたし、千歌ちゃん達は誕生会まで開いてくれたし…！プレゼントもこんなにいっぱい♪いや〜、最高の1日だったなあ♡」

早速今日ママに貰った鞆を開き、今日貰ったプレゼントを中から取り出す。

梨子ちゃんは私の絵をくれたし、善子ちゃんはゲームソフト。花丸ちゃんは面白そうな本。ルビィちゃんは、sのDVD。千歌ちゃんのみかんは大きすぎて自転車じゃ運べないから持って帰ってこれなかったけど。明日取りに行けばしばらくみかん天国だしっ♡

「あ、そうそう。…これを忘れちゃだめだよね。」

そう言っつて、頭に被っている『YOU』と書かれた帽子を取り、手に持ってまじまじと眺める。いやー、これ、すつごく良いなあ…！なんてつたつて、名前入りだからね…！千歌ちゃん達は、「それは別の意味の『YOU』だ」って言うけど。まあ、気にしない気にしないっ！「…翔くん。『時間無かったのに』、こんなセンス良いプレゼント、ホントに嬉しいよ…。」

そう、『時間無かったのに』。

…なんとなくだけで、早い段階で薄々気づいていた。トイレの時はホントだと思ってたけど…。千歌ちゃんの家に行った時には、ほぼほぼ気づいてたよ。

「千歌ちゃん、嘘つくのへたすぎだもんなあ…。」

小さなころから一緒にいるのだ、嘘をついている時なんてバレバレだ。…まあ、今回は不自然にも程があったけど。

多分、千歌ちゃんが今回の事を企画して、翔くんにだけ伝えるのを忘れてたとか、そんなところだろう。いきなり、昨日の夜とか、今日の朝とかに突然言われたんじゃないかな…。そうじゃないと、今日の放課後にプレゼント買いに行くななんて事、ないもんね…。

「それにしても、翔くん…。ホントに優しいなあ…。」

普通だったら、プレゼント忘れたとか言って、次の日に買ったりするんだろうけど。私なんかのために、あんなに汗だくになって。十千方に翔くんが来た時、すっごい汗出てたもんね…。

…さつき帰ってくる途中に、パンクしてるバスを見かけたんだけど。もしかして、あそこから走ってきたんだろうか。…：…：うん。多分、そうだろう。十千万前のバス停から走っても、あんなに大量の汗は出ないだろうから。

私に気を使わせないように、あんなに少ない時間で、ばれないように。走ってまで時間に間に合うようにするなんて。…私に、プレゼントを渡すために。

「翔くん…。優しすぎるよ…。」

その時。

私の中にあつた思いは、確かなものに変わった。

もう一度、親友を信じさせてくれた。こんな私を、「かわいい」と言ってくれた。何食わぬ顔で。疲れてただろうに、私に心配させないように、プレゼントをくれた。

——— 思えば、初めて出会ったときからかもしれない。

『普通』を自称する、転入生の男の子は。

私に、初めての感情をくれた。

「私…。翔くんのこと、好きだ。」

まだ少しだけ肌寒い春の夜は、火照った私にはちようどよくて。

月明かりが、真っ赤になった私の顔を、優しく照らしていた。

第24話 休学生徒と海の音

約束の日曜日当日。

普段愛用している鞆に財布や携帯を入れた俺は、少しわくわくした気分で自分の部屋を出、隣の部屋の千歌と（準備がすでに終わっていたのには少々驚いた）隣りである梨子ちゃんの家へ赴く。

「おっ、梨子ちゃん。」

「あ、榮倉君、千歌ちゃん。おはよう。」

玄関先で待つていた梨子ちゃん。俺たちの存在に気付くと、輝く笑顔で俺たちに挨拶をしてくる。

「梨子ちゃん！おっはよーっ！……うーん、今日もかわいいね！いますぐ、このままアイドルになれるよっ♪」

出会うや否や、いきなり抱きつく千歌。全く…羨まし、じゃない、節操のない…。まあ、かわいいのは本当なんだけどな。

と、朝っぱらから美少女に鼻を伸ばしつつ、千歌を梨子ちゃんから引き剥がす。

「あ、あはは…。」

「ったく…。いきなりなにすんだお前は。梨子ちゃんの顔が引きつってたぞ。」

「えーっ？いつもの事じゃん。…あ、翔くん、梨子ちゃんにチカが抱きついてるの見て、やきもち焼いたのかなあ？」

「んなわけあるかい！梨子ちゃんに迷惑だろーが！全く…バカチカめ。」

「なんだとーっ!？」

「ま、まあまあ…、2人とも…。」

言い合う俺と千歌とそれをなだめる梨子ちゃん。いつも通りのやり取りをしながら、バスに乗り、淡島へ行くための棧橋へと移動する。

20分ほどバスに揺られ、下車すると、目の前にはこれから乗るであろう小柄な連絡船が棧橋に接岸していた。

「おっ!?あれだな?淡島に行く船ってやつは!早く乗ろうぞ」おっは
ヨーソロー!!」うおおおおびつくりしたああああ!!?」

人生初の船を目の前にして、若干テンションが上がった俺が、早速
船に近づくとした瞬間。

後ろから、体当たりのような(というか完全に体当たりなのだが)勢
いで俺の背中にどついてきやがったヤロウが、聞いたことあるフレ
ズとともに、俺たちの眼前に姿を現した。

「ふっふっふっ…。船と言えば私を忘れちゃダメでしょう!…渡辺
曜、参上!」

敬礼のポーズとともに、晴れやかな笑顔で登場した曜。…どついた
るか、と思っていた俺の怒りは、その笑顔で浄化されてしまった。

「…………おは曜。」

ダメージを負った背中を優しくさすりながら、引きつった笑顔で揆
拶をする。…最近、千歌とか曜とか、俺に笑顔見せときゃ許されると
か思ってたんじゃないだろうか。…………いや、まあ、かわいいんだけどさ。
だから許しちゃうんだけどさ。

「おはよーちゃん!今日も元気だねっ!」

俺の肩からひよこっつと顔を出す千歌。どうやら曜が来ることは事
前に解っていたらしい。…いや、だから連絡しようぜ?部屋隣だろ?

…というか。そんなことよりだな。

「…よ、曜ちゃん?一体その格好は…?」

おお。流石梨子ちゃん。俺の言いたかった事を言ってくれたよ。

そう、問題は曜の格好である。

休みの日なのだから普通は私服だ。現にこの中にいる全員が私服
で来ているし、曜の格好も…まあ、学校の制服ではない。しかし…、あ
る種の制服というか、なんというか…。

結論から言うと、曜は汚れ一つない真っ白な水兵服、しかも水兵帽
までを着ているのだ。

「……………」

正直、曜の意図が理解できない。

今日は、淡島にダイビングに行くのだ。まだ、水着で来ているん

だったら「着替えがめんどうきいから」という理由が思い浮かぶ。しかし、着ているのは水兵服だ。ドラマとか漫画とかでしか見た事ないぞそんなもん。どこで買ったんだよ。

「えっこの格好？水兵さんだよ！だって、船に乗るんだよ！船と言ったら船員、船員と言ったらこの制服しかないであります！」

キリリ、とした顔で再度敬礼をする曜を見て、さらに「??」が浮かんでくる。後ろを見ると、梨子ちゃんも同じ症状のよう。…うん、俺は正常だ。

「そ、そうか。…じゃあ船に乗り込むとするか。」

恐らく曜には何かがあるんだろう。…なんとなくだが、その格好を否定してはいけないような気がする。うん。

小さな疑問を残しつつ、淡島に向けての初めての船旅に向けて、棧橋へと歩を進めるのだった。

……

「果南ちゃん！来たよーっ！」

船から降りてすぐ。目的の場所であるのだろう木造の建物に入っただ俺たちが辺りを見回していると、一番に入って行った千歌がいきなり店に響き渡る声で叫んだ。

一応店の中、お客さんは他にはいないのだが、そんな大声で叫んでいるのかよとツツコミたくなるが、知り合いの店なのだし、全く知らない土地だというのもあり、少し心にビビりも重なるものがあったので、大人しく待っていると。

「はーい。ちよつと待ってね。」

という声が聞こえてから数秒、店の奥から、掛けてあるダイビングスーツやら水着やらを掻きわけて、女の人が顔を出した。

青みがかつた髪を束ねて、ポニーテール。身長は…、女の人的には、結構高い感じがする。160センチは超えてる感じだろうか。どことなく…、高校生には見えないというか。大人っぽい。そんな感じがする。というか、高校生ではないのかもな。別に千歌は何も言っていなかったし。大人の人の可能性もある。

それに……。俺はゴクリと喉を鳴らして女性の双丘…、胸の部分

をちらり、と見る。

ダイビングショツプなのだからだろうか、ダイビングスーツを着ている彼女は、体のラインが完全に浮き出ている。その胸部から出る豊満な胸は、とても高校生のサイズとは思えないというか……。初めて見たときの千歌や曜も、かなり大きいとは内心思っていたが、恐らくそれ以上だろう。そしてその胸部を強調するかのようなウエストの細さ。さらに下へと視線をやると、これまた豊満で形のよさそうなヒツプが……。

「榮倉くん……う？」

どこことなく不信感があり若干低い声を放つ梨子ちゃん。はっ、として振り向くと声のトーンと同じ顔をしている。……どうやら少々見すぎたらしい。

梨子ちゃんの冷やかな視線をくらい、冷や汗を流していると、その女の人を視界にとらえた千歌がその人の方へ駆け寄って行った。

「会いたかったよ〜！果南ちゃん!!」

「お…つと。…ふふ、よしよし。」

そしていきなりハグをします2人。しかも外国であるような軽い挨拶のやつみたいなのではなく。結構強めに。

「……!?!」

啞然とする俺。とさつきまで俺に向けていた視線はどこへやら、ぽかーんと口を空けて2人の方を向いている梨子ちゃん。そりやそうだ。ここは日本で、俺は今まで挨拶でハグなんぞしたことないし、第一ハグなんぞ未経験。おまけにそんなに強めのを当たり前のようになっている2人の関係はなんなのか、衝撃だらけだ……。

「あーっ!!いいいな!果南ちゃん!私もー!」

さらに、斜め後ろに立っていた水兵さんまでもがとんでもない事を言い出したから驚きだ。そして2人を羨ましがるやいなや、2人に向かって飛びつく勢いで接近、ぎゅー、つとハグを開始している。なんというか…、凄い光景だ。

「な、なななな…!?!何が起きてるの…!?!」

開いた口が塞がらない(物理的に)とはこの事か、あんどりと口が

開いてしまっている梨子ちゃん。さらに、体が小刻みに揺れている。よっぽど衝撃だったのだろう。…ん？俺？確かにさつきまでは驚いてたが…、なんとというか、美少女達が笑顔でぎゅうぎゅうやってる絵を見ていると、驚きというよりお得感が凄いというかなんとか…。…俺も流れで入って行っても受け入れてもらえたりするんじゃないかこれは？

なんていう健全な男子高校生では至極純粋な感想を持ち合わせていると。…おっと残念。ハグタイムは終了したのか、3人は体を離す。

「んく♪やっぱり果南ちゃんのハグはいいねえ！落ち着くよ。」

「果南ちゃん！私、もう一回やりたいであります！」

「ち、ちち千歌ちゃん…!?よ、曜ちゃん…!？」

何を言ってるのか、と衝撃が残っている梨子ちゃんに、「ほえ？」「ん？」と？マークの2人。

「あはは、コレは挨拶みたいなものだよ。ハグっ、てね。どう？あなたたちもやってみる？」

「え?!いいんですか!？」

「いいわけないでしょう!!」

さらりとそんな事を言い出した果南さん。すぐさまやって貰おうとしたものの、梨子ちゃんに睨まれ、すごすごと引き下がる。…いいじゃないですか、挨拶なんだから。

「……………」

俺の考えている事を完璧に解っているのか、さらに睨みをキツくする梨子ちゃん。俺もMではないし、これ以上睨まれても怖いだけなので、素直に引き下がった。

「まったく…。…ええと、あなたが、ダイビングをさせてくれる果南…さん、ですか…？」

「うん。私は松浦果南、千歌と曜とは幼馴染で、一応浦女の3年生。今、祖父が骨折で動けなくてね…。休学してこのダイビングショップを手伝ってるんだ。ええと…、あなたが梨子で、君が翔かな？」

ハキハキと自己紹介をする果南さん…、松浦先輩。え、というか

なんで俺たちの名前を知って…？

「ん？名前？梨子のことは千歌からメールで聞いてたし、翔は、この辺では有名人だからね。『浦女に来た男子』って事で。」

「そ、そうですか…。」

確かに、女子高に男が来るなんてイレギュラー、噂になつて当然だし、実際学院ではかなり有名というか、知られているとは思っていたが。まさか、休学している人にまで広まっているとは…。

田舎の情報の広がり早さに少々驚く。

「よし！じゃあ、早速だけど用意して行こうか！まずは水着とスーツね。水着は着てる？それなら、あそこにスーツが並んでるから自分のサイズのやつを取ってあそこで着替えてね。じゃ、そういう事で！」
ぱん、と両手を合わせた松浦先輩。客の扱いには慣れているようで、俺たちのスーツのサイズもそれぞれのをパパッと選び、背中を押し勢いで俺たちを個室へと移動させた。

「凄い手際だな…。流石客商売してる人は違う…。」

感心しながら、俺は衣服を脱ぎ、事前に着ておいた水着一枚になると、人生初のダイビングスーツの着用にかかる。サイズが合っているとはいえ、ピチピチのサイズ。悪戦苦闘しながら、なんとか身に纏い、先程の場所に戻る。そんなに時間は経っていない様に感じたが、俺以外のみんなはすでに用意を終えていた。

「おそいよ翔くん！」

「訓練が足りないであります！」

「いや、訓練も何もこれが初めてだつつの…。」

二人にどやされながら、俺たちは船に移動する。…3人のダイビングスーツ姿に各体の箇所視線がいきそうになったが、これ以上そんな事をする本気で梨子ちゃんに嫌われそうなので止めておいた。

「じゃ、ポイントまで移動するからねー。結構揺れるから、気をつけて。」

そう言い残し、操縦席に移動する松浦先輩。しばらくするとエンジンがかかり、船がゆっくりと動き出した。

「す、凄いな松浦先輩…。船まで操縦できるのか…。」

「え？そうなの？私も、少しくらいならできるよ？」

「え!?マジで言ってる…?」

「うん！パパに教えてもらった事あるんだ。パパ、船長さんなんだよ！」

「すげえな俺のまわりの人。高校生で船操縦できるって…。しかも2人も。」

改めて、曜の超人っぷりを思い知り、松浦先輩の万能っぷりに関心し、潮風を浴びながら船に身を任せる事約5分。

「着いたよー。じゃあ、早速海に入ってみようか。」

操縦席から出てきた松浦先輩が、酸素ボンベとゴーグルを持ってやってくる。それを慣れた手つきで俺たちに着けると、簡単に使い方をレクチャーする。

「…と、まあこんな感じ。耳が痛くなったら耳抜きを忘れずにね。じゃ、一人ずつ入って行こうか。入ったら船の下に手すりがあるから、そこに移動して捕まってるね。」

「う、うう…。緊張してきた…。」

「大丈夫だ、海なし県から来た俺がいるぞ、梨子ちゃん。」

不安そうな表情の梨子ちゃんに、フォローになっっていないフォローをする俺。

「だいじよぶだいじよぶ！すぐ慣れるよ！」

「そりやお前は何回もやったことあるだろうよ…。」

俺たちとは打って変わって対照的な興奮を見せる千歌が、全く希望の見えない言葉を発する。慣れるも何も、海自体がもう新鮮だからなあ…。

「じゃ…。私が一番だヨーソロー！」

「あつー！曜ちゃん待ってー！私もー！」

いつものセリフを残し、一番に曜がジャンプで海へ。それを追いかけるように千歌も元気に海へ入る。

「元気だねえ…。二人とも。じゃ、梨子は私と一緒に行こうか。翔は一人で頑張れる？」

「え…。…つ、はい。一人で頑張ります…。」

てつきり、俺と梨子ちゃんは松浦先輩と一緒にいけるもんだと思っ
ていたが…、松浦先輩の体はひとつ。そりゃ物理的に不可能だ。しか
も、梨子ちゃんがうるうるした目でこつちを見てくるのだ。そんな子
に一人で頑張れ、なんて言えんでしょうよ。

ここは、男の見せどころだ。

「榮倉翔！…いつきまーす！」

酸素ボンベの重さよたよたとなりながら、船の端に着くと、そのま
ま海へダイブ。ドボン、という衝撃とともに、あぶくが広がり――、
あぶくが散った視界に広がったのは、底の見えない闇だった。

「こ、怖えええ…。」

とりあえず、今は言われた通りに。俺は周囲を見回し、千歌と曜の
いる場所まで移動し、手すりに掴まる。一人で来れた事に対する関心
なのか、千歌と曜は俺の肩をぽんぽん、と叩く。…よし、とりあえず
なんとかなった。

それにしても不思議な感覚だ。水の中で呼吸出来ているのだから。
静かな海の中。シユコー、シユコーと呼吸する音だけが耳に響く。俺
は普段鼻呼吸なので、口呼吸という新鮮な呼吸法になんとなく違和感
を感じていると。

ドボン、という音とともに、二人の姿が海中に現れた。直前まで緊
張してた梨子ちゃんも、松浦先輩と一緒にいるおかげか、大分落ち着
いた感じに見られる。

そして、松浦先輩が梨子ちゃんの手を引き、こちらへと泳いで来た。
千歌と曜は俺と同様に、梨子ちゃんの事を労っている。

『それじゃあ、ちよつとこの辺を泳いでみようか』

松浦先輩が、ホワイトボードにペンで文字を書き、俺たちに見せて
くる。…水中でも書けるペンって地味に凄いな。

謎の部分の関心をしている俺をよそに、松浦先輩が手振りで指示を
出し、水中回遊が始まる。

しかし、今日の天気が曇りとあつてのことか、海に入る光の量が少
なく、依然として海は暗いままだ。

『どうっ？海は音はっ？』

松浦先輩からボードを受け取った千歌がそれを書き、梨子ちゃんに問いかけるが、ふるふると梨子ちゃんは首を振る。

その後、10分程度泳いだが、梨子ちゃんの言う『海の音』は聞こえないようだった。

「…海の音、聞こえない？」

「…ええ。なんだか海も暗いし。何というか…、怖い感じがして。」

一度船に戻った俺たち。やはり水の中だからか、10分程度潜っただけなのに、疲労感が出てくる。少しは運動しないと…。と思っていると、曜が梨子ちゃんの言葉に反応する。

「暗い？…解った。じゃあもう一回良いかな？」

曜の言葉に促され、俺たちはもう一度海へと入った。

今度は曜を先頭に、とある場所へと向かう。

『聞こだよ』

ボードを俺たちに見せる曜。しかし、そこは先程まで泳いでいたところと何も変わらない、暗い海。

？マークの俺たちに気付いたのか、曜はボードに新しく文字を付け足した。

『上見てー』

ボードを見せながら指で上を指す曜に疑問を感じながら、上を向くと――

そこには、美しい光景があった。

光が、差し込んでいる。

真っ暗な海に一筋だけ差し込む太陽の光。辺りを見回すが、光が差し込んでるのは俺たちがいるこの場所のみのようだ。

「…すっげー。」

神秘的な光景に、俺は瞬きを忘れる程だった。美しい。まさにその一言が似合う光景だ。

…そのとき、俺は『音』が聞こえた気がした。

上手く説明はできないが――温かく、それでいて包み込まれるような優しさ。まるでその光が音を発しているかのような、そんな感

覚。

…これが、『海の音』なのだろうか——？
視線を梨子ちゃんの方に移す。…どうやら、当たりらしい。

『聞こえたー！』

ボードと一緒に見せる梨子ちゃんのゴーグルの中の瞳は、キラキラと輝いていて。

梨子ちゃんの新たな表情にドキリとさせられる俺なのだった。

第25話　く曲作りという名の告白タイム。く

「ほ、ほ、ホントに!?!」

「ええ、私でよければだけど…。」

「…:…やったああ!!」

月曜日のSHR前。新しい1週間が始まる少々気が落ちるこの日の朝。浦の星女学院2年1組の一角では、気が落ちるところか興奮で気が登ってしまうのでは、というような衝撃の音が響き渡っていた。

その声の発端は元気な幼馴染コンビの千歌と曜。まあ、喜びのあまり叫んでしまうのも無理はない。それもそのはず、経った今——桜内梨子のスクールアイドル部への入部が決まったのだから。

本当は俺だつて叫びたい事この上ないが、千歌と曜が思いつきり叫んだおかげで、クラス中の注目が集まってしまっている。さらに俺が叫ぼうものなら、「スクールアイドル部は変人集団」というレッテルを貼られてしまう。もう貼られてるかもしれないが。

そういうわけで、俺は内心興奮している事を悟られない様に軽く咳払いをすると、改めて新メンバー——梨子ちゃんの方に向き直る。

「ほ、ホントに大丈夫か? 昨日のお礼で入る、とかなら無理しなくて良いんだぞ? あれは勝手にやった事なんだから。」

これで「え?じゃあ…、入るのやめようかな。」なんて言われたら絶望しかないが、無理をさせて半強制的に入部させても良くない。内心ドキドキしながらそう尋ねるが…

「ううん。私が自分で決めた事だから。」

と、微笑んでそう言ってくれた。

「そ、そうか。…でも、だったらどうして急に?」

入ってくれるならそれでいいじゃないか。とそう思う自分もいたが、あんなに頑なに断っていたのだ、どういう心境の変化が起きたのか、純粹に知りたくなった。

「きっかけはね、昨日のダイビング。海の音…、聞く事が出来てね。それで、思ったの。雄大で、とても美しい海の音。その時、なんて言う

のかな…、とても大きくて、広い海の中で悩んでた自分が、とっても小さく思えて。それで、ふっきれたっていうか…。それで、自分の気持ちに一区切りできたから、初めてみようかな、って…。」

なるほどなあ。やっぱり、海の音が聞けた事が良かったんだな。……え？別に、計算とかしてたわけじゃないぞ？海の音が聞ければ梨子ちゃんが入ってくれるかも。なんて、思ってたないぞ。………うん。

「とにかく！梨子ちゃんが入ってくれたのなら、もう大丈夫だよ！これで曲もできるし！ね！梨子ちゃん！」

と、真面目な話に飽きたのか、俺たちの間に入ってくる千歌。えっへっへ、と笑いながら、もう勝ちを確信したような口ぶり。…どんだけ樂觀的なんだよ。

「じゃあ…。その、曲についてなんだけど。作曲は私がやるから、まず『詩』をちょうだい？」

『詩』？」

ついさつきまでヘラヘラとしていた千歌の口元が、梨子ちゃんの一言によりへの字に曲がる。

「そう。『詩』。曲には必要でしょ？まさか、メロディだけの曲、とはいかないし…。第一、詩がないとどんな曲調にしたらいいかイメージも浮かばないわ。」

梨子ちゃんの言う事もっともだ。ゼロから曲作りなんて、それこそイメージが固まらなくて、難しすぎるだろう。しかし、歌詞か…。そんなもん、俺は書いた事なんかもちろんないし、千歌もその反応を見る限り無いのだろう。…さあ困ったぞ。

「…そんなの、書いた事もないよ。」

弱音を吐く曜。…まあそうだよなあ。一瞬、一年生ならもしかしたら…、と思っただけど、書いてそうなの善子ぐらいだしなあ。詩は詩でも、善子のは絶対厨二臭いやつだろうし。それはアイドルの曲には絶対ならない…。

「…まあ！考えててもしかたないし！今日からみんなで考えよう！一年生トリオも一緒に！7人もいればなんとかなるよ！可能性は、無

「限大！」

「…ま、そうだな。みんなで考えるか。…つと、チャイムか。とりあえず、また放課後だな。」

結局、放課後にまた話し合う事だけが決まったところでチャイムが。

うんうんと俺たちが考えているところに、いつも通り「なんとかなる」の千歌。チャイムと同時に教室に入ってきた先生を横目で見ながら、その楽観的思考が羨ましいよ…、と苦笑を浮かべ、自分の席に戻るのであった。

「…：…ううう。難しいよおお。」

結局、放課後に十千万に集まった俺たち7人は、紙とペンを各々持ちながら、うんうんと歌詞を考えていた。

ちなみに、場所は曜の誕生会の時に使った宴会場…ではなく。今日はそこを使う客がいるということだったので、千歌の部屋にみんな集まっている。

一人用の部屋。せいぜい入れて3〜4人のところに、俺たち7人が入っているため、テーブルは詰め詰め。女子に囲まれた生活を送ってしばらく経ち、慣れてきた部分もあるもの。女の子特有の良い匂いが部屋中に漂っていて、なんとなく…落ち着かない。

と、まあ男にとっては夢のようなシチュエーションを味わうとともに、1か月前の俺に今の状況を説明しても絶対信じないよなあ…。と苦笑しつつ、いきなり戦意喪失してテーブルに寝そべっている千歌を軽くチョップする。

「いてー！」

「…つたく。少しは頑張らんかい！全然進んでねえじゃねーか。」

頭をさすりながら起き上がった千歌。さつきまで寝そべっていた千歌に挟まれていた紙が顔を出すと、そこは真っ白。どうやら、ワンピースも思い浮かんでいないらしい。

「なあ…。無理に『恋の歌』に縛らなくてもいいんじゃないか？他に、色々あるだろ、アイドルっぽい感じのやつなんて。」

千歌が作業を始める前に俺たちに言った言葉。

『作るのは恋の歌！』

まあ、アイドルには鉄板なイメージだと思うし、誰も異論を唱える事なく、作業へと入っていったのだが…。

みんな、思うように進んでいない。このままでは何時まで経っても先には進まない…。そう考えた俺は、千歌に曲のイメージを変えるように進言したのだが…。

「やだ！絶対恋の歌にするの！μ sのスノハレみたいなのを作りたいのー！」

と、頑として受け付けない。

「大体、ここにいるみんな、恋愛経験あつたりするのか？誰かと付き合ってたー。とか。そういうのないと、まず、歌詞以前の問題だと思っただけども。」

はあ、と一息ついた俺は、まず、恋愛経験自体がある人がいるかどうかをみんなに問う。…しかし、反応した人はゼロ。ダメか…。

「じゃあ…。気になる男がいたー。とか。そんなのでもいいからさ。なんかないのか？」

今は同学年の男がいないから、千歌たちが気になる男がいたとすれば、大分昔。それは、幼いころだっただろうし、恋心ではない部分で気になっていたのだと思うが…。それでもないよりはマシだろう。

…と、思い、聞いてみたら。

「えっ!?!／／／」

「き、き気になる?／／／」

「えーつと…／／／」

まさかのヒット。2年生トリオがまとめて解りやすいリアクションをとる。…しかし、なぜか俺をジト目で見てくる1年生トリオ。

「あんた…。狙ってるでしょ絶対…。」

「たちが悪いぞら…。」

「先輩…。それはずるいですよお…。」

3人の湿度100%の視線が俺に刺さる。…え？なんでそんなみんなして『唐変木が…』みたいな顔すんの!?俺、なんか変な事した!?「千歌、曜、梨子ちゃん。その反応はあるんだろ？俺たち、恋愛経験とかないからさ、気になるやつのこととか、その時の気持ちとか、しゃべってみてくれよ。」

「うわあ…。」

「これはひどいずら。」

「ずるい…。」

なぜか、ますますひどくなる3人の視線。そして、反対の2年生トリオはますます顔が赤くなっていく。…なんだこの二極化現象は。

「ほらほら、千歌からちよつと話してみてくださいよ。別に名前を出せ、とかは言わないからさ。まあ、言っても俺は解らないし。問題ないとは思うけど。」

「…ばか／＼／」

「へ？なんか言ったか？」

…まあ、気のせいだろう。

そして、全員に視線を向けられた千歌は観念したのか、ぼつり、ぼつりと語りだした。

「え、えつと…／＼／いつもは、チカとけんかばかりで、その時はむかつくこともあるんだけど…。ホントはチカの事を気遣ってくれて…。優しい人なの。チカのことをかばってくれた事もあって…。その時はとっても嬉しかったなあ…。」

と、その時の事を思い出したのか、表情が柔らかくなる千歌。なんだよ、普通に青春してるじゃないですか。…しかし相手が恨めしいな。なんだよその紳士。美少女にこんな表情させるなんて…、ああ羨ましい。

「…：気付いてないんだろなあ。」

ふう、とため息をつく1年生。…だから、何にだよ！千歌が言うてるやつの事を見習えってことか!?

「じ、じゃあ、次は曜だ。いるんだろ？話してみてくださいよ。」

話が終わり、顔が真っ赤になっている千歌にクーリングタイムを与

えるとともに、流れで曜に振る。こちらも千歌が話したことで覚悟ができていいのか、ぽつり、ぽつりと話しだした。

「私の気になってる人は…。友達を、もう一度信じさせてくれたの。きつと、私のことが嫌いなんだよ。って言ったら、絶対にそんなことない。って。その言葉がなかったら、私、今はここにいないかもしれない。なかった。…すごく、感謝してるんだ。そ、それに…／＼／＼私の事、『かわいい』って言うてくれたんだあ…／＼／＼」

曜もその時の事を振りかえっているのか、えへへ、と頬が緩んでいく。なんだよ、なんだよ。曜も普通に青春してんじやねえか！っていうか、それを『恋』と言わずしてなんと言うんだよ…。ちくしょう、誰だよ曜の心をこんなに虜にしているのは…。まったく、恨めしい。

「よし、最後は梨子ちゃんだ。さっきの反応からしているのは解っている。話してごらんさないな。」

はあ…。とため息をつく1年生達からの精神ダメージを食らいつつも、2人の話を聞いてなのか、すでに顔が真っ赤になっている梨子ちゃんに視線を移す。曜が話している間にすでに決意が固まったのか、すぐに話し出した。

「…私、男の人って、昔からちよつと苦手だったの。なんとなくそっけない印象で、プライドが高く、威圧感があつて…。怖い感じ。…でもね、その人は違ったの。いつも笑顔で、優しく、自分の事より周りの事ばかり考えてるような人。そのためなら、平気で土下座だってしちゃう。…ふふっ。あの時は驚いたなあ。いきなり土下座しだすんだもん。…その人のおかげで、私の男の人に対する意識が変わったの。」

と、梨子ちゃんもその時の事を思い返しているのか、ふふっ、と微笑んでいる。…その表情は、完全に恋する少女。青春してんなあ…。全く、羨ましい…。

と、3度目の悔しさを覚えていると。

「…で？翔は、誰の事が好きなのよ。」

「「?!」」

善子が、「いい加減誰か決めなさいよ。」的な口調で俺に矛先を向け

けして顔を上げない6人と、どうしたらいいか解らない俺。
しどろもどろしているうちに、傾いていた西日は、地平線の彼方へ
と暮れていくのだった…。

第26話　く嫉妬と絶望と『2年前』とく

「ハーイ♪カケル?いる?」

曲作り騒動から一夜明け、いつも通りの朝を教室で千歌たち(若干彼女たちの様子がおかしい気がするのは気のせいだろうか)と過ごしている。

バーン、といきなり教室のドアが開け放たれ、緑色のタイをした制服の金髪美少女――もとい、鞠莉さんが俺たちのもとにやってきた。

「ま、鞠莉さん?朝からいったいどうしました…?」

気のせいだろうか、いつもより若干ニヤケ具合が上がっている気がする鞠莉さんを見て、またよからぬことを考えているのでは…、と不安になる。

「まあまあ、カケル。そんなに身構えなくても大丈夫よ?別によからぬことではないから?」

その語尾についてる「?」のせいですべてが怪しく見えるんですよ。…そういえば、俺の呼び方が変わって、「クン」がなくなってるな。

「要件はネ…、ライブの日時のことよ♪来月末に決まったから、それを伝えに来たってわけ。…じゃ、それだけだから?」

そう言い残すと、結局最後までニヤニヤを崩さないまま、教室からスキップで出て行った。…あのニヤニヤは一体何だったんだ。

しかし、俺はすぐにその意味を知ることになる。

「…カケル?」

…鞠莉さんとの会話に夢中になっていた俺は、背後からの視線に気づいていなかった。さつきみんなで談笑していた時のトーンとはまるで対極な、刺々しい声×3。

特にやましいことなどしていないのに、冷や汗がダラダラ流れる。恐る恐る、ゆっくり3人の方を向くと…。

そこには、ニツコリ笑顔の…しかし目が笑っていない3人の姿があった。

「…説明してね?」

「…な、なにをですか?」

その後、俺は放課後まで、休み時間ごとに鞠莉さんとの関係を事細かに話す羽目になるのだった…。

……

「ひ、ひどい目にあつた…。鞠莉さんのニヤニヤはこの事だったのか…。」

なんでこんな尋問されたのかは解らないけどね。

今日も千歌の部屋で話し合おう、という話だったのだが、連日使うのは悪い、ということ放課後はどの部活も使っていない、という屋上へと歩を進めていた。

…それにしても、鞠莉さんのSっぷりにはため息しかでない。

「ん?なんか言つた?翔くん?」

「いえ、何も言っておりません千歌様。」

ボソツ、と言つた俺の独り言を聞き取つたらしい千歌。…なんて聴覚してんだか。あ、それともあれか?びよこんと跳ねたアホ毛からセンサーでも出てんのか?ああそうか、だから年中そこだけ跳ねて――

「今チカのことバカにしたよね翔くん。」

「いえ滅相もございません」

むっ、と俺を軽く睨んでくる千歌を見て、絶対センサーだろ…、とびよこびよこ揺れているアホ毛に視線を移す。

「あはは…。ほら、着いたよ!今日はいい天気だから、絶好の話し合い日和だよ!」

と、俺たちの会話を区切らせた曜が、屋上へのドアを開く。

「あつ!先輩!こ、こんにちはっ!」

「こんにちはずら。」

照りつける太陽の元、屋上の隅にはすでにルビィちゃん、花丸ちゃんが座っていた。俺たちを見ると、こちらに駆け寄ってくる。

「よっ、2人とも。早いなあ。」

…あ、危なかった。

「アホかお前は!?普通あんなどこから飛び降りないだろうが!怪我でもしたらどうするつもりだ!」

「ご、ごめんなさい…。」

普段こんなことを言わない俺が注意したからだろうか、素直に謝ってくる善子。…まったく、マジで危なかった。インドアな俺はもちろん筋力なんて皆無なので、落ちてくる衝撃に耐えられるか心配だったのだが…。善子が軽くて助かった。

「…えっと、翔?」

「ん?なんだ?これにこりたらもう飛び降りなんぞするんじゃない?」

「…いや、そろそろ、おろしてくれないかな、と／＼／」

…あ。

…会話に意識がいつてて忘れていた。俺は先ほど落ちてくる善子を抱きとめた。つまり…、俺はずっと善子を抱えたままだったことになる。しかも、俗に言う『お姫様抱っこ』というやつで。

「すっ、すまん!!すぐ下すから…。」

「う、うん…／＼／」

俺はすぐさま膝を折り、善子を足から降ろす。抱っこから解放された善子は、俯くとすぐにマントを顔まで被って屋上の隅に行ってしまった。

…若干、顔赤かったな。そりやそうか、高校生にもなんて抱っことか、俺なら恥ずかしくてやばい。こりや後で謝つとかんと…。

「……って千歌!?千歌!?それに梨子ちゃんまで!?なんでお前ら給水塔に上ろうとしてんの!?今の見てただろ!?早く降りてこいっつもの!」

俺に見つかつた3人は、すぐすごとこちらに戻ってくる。

「…ちえっ。」

「おい千歌・曜・今舌打ちしただろ!?なんでそんなに飛び降りたいの!?そして梨子ちゃん!?そんなに悲しそうな表情でこっち見ないで!」

「…やっぱり鈍感(ずら)…。」

そんな俺たちの1連のやり取りを見て、花丸ちゃん、ルビイちゃんが小さくため息をつく。わ、訳がわからん…。

「と、とにかくだな…！今後の事を話し合うためにここに来たんだろ？ちやちやつと始めよう！」

睨むような怖い顔で見えてくる千歌、曜と悲しそうな梨子ちゃん。おまけにさつきからジトつとした目で見えてくる花丸ちゃん。それらの視線から逃れるべく、強引に話題を戻すべく声を張り上げるのだった…。

……

「つまり…、」

「あと…」

「1ヶ月、ですか…。」

なんとか強引に話題を戻し、鞠莉さんから朝言われた事を1年生にも話す。

「そう。後1ヶ月でライブの準備をしなくちゃいけない。そういうわけで、今後の具体的な計画を作って行きたいんだけど…。」

『1ヶ月』と聞いた1年生の顔を見るに、相当難しい事だというのは解っているようだ。…さつきまで顔を真っ赤にしていた善子も、今は大分顔が暗い。

「どうしたもんかな…。」

…俺は腕を組むと改めて今の状況を整理してみる。

まず、人員は十分。これは○。

次に、曲。これはまだ。×。

そしてダンス。練習もしてない。×。

さらに、宣伝、客の呼び込み。やってない。×。

…つまり、あと1ヶ月で曲を作り、練習をして、宣伝もしなくちゃいけないってことになる。

とにかく、優先度が高い順からやっていくしかないよな…。と、頭の中で結論付ける。

「…まず、とにかくにも曲からだと思う。曲がないと、ライブは当然出来ないし、振りつけも考えられない。とりあえずは曲作りからやっていたいこう。」

「どうだ？とみんなに意見を求めたが、全員異論はないようだ。神妙な面持ちで、首を縦に振る。」

「よし。じゃあ曲なんだけど…。まずは詞だ。…千歌、ちなみに少しでも出来てたりするか？」

「うん。全部完成してるよ。」

「解った、それじゃあ少しでも早く作ってくれ……………つてえええええええ!!?!?」

千歌の流れるように言った台詞に驚愕する俺。…さらに驚いているのは俺だけではなく、1年生も目を丸くしている。いや、ホント、文字どおりに。

「ま、ま、マジで!!」

「うん。まじまじ。」

「い、何時の間に…?!昨日の夕方時点じゃ真つ白だったじゃん!」

俺の至極もつともな言葉に、1年生もうんうん、とうなずいている。

千歌の言う事が本当だとすると、あの後書きあげた事になる。ずっと出来ない出来ない言ってたのに、そんなすぐにできるものなのか…?

「ほんとだよー。曜ちゃんと梨子ちゃんと一緒に作ったんだー。」

若干照れたような表情を見せつつ、えへへと笑う千歌。まだ若干疑いの心があった俺は、曜と梨子ちゃんの方へ視線を向ける。

「ほ、ほんとか…?」

「え、ええ…。あの後、SNSでメッセージを送り合って…。」

「う、うん。なんかトントントン拍子で決まったんだ、よっ…?」

なんとなく歯切れの悪い曜と梨子ちゃん。…なぜか、この2人も照れたように、頬が桜色に染まっている。

「な、なんか顔赤いけど大丈夫か…?」

「「な、なんでもないよ!なんでも…////」」

「お、おう…。そうか…?」

心配して声を掛けるが、なんでもないと言う3人。その割には俺の

方を見ないし、絶対なんかあると思うんだが…。

「『言えるわけないじゃん…。翔（榮倉）君の事を想って書いてたら出来た、なんて…／＼／＼』」

…ん？なんか言ってた気がしたけど、…小さくて聞こえなかったな。まあいいか。

「じゃあ、歌詞があるなら一歩前進だな！じゃあ、それを元に梨子ちゃん。作曲できるか？」

「え、ええ。頑張ってみるわ。」

なんとなく2年生が微妙な空気を醸し出してきたので、俺は咳払いを1つすると、話題を戻す。梨子ちゃんには作曲してもらえない事になったので、次はダンス…と行きたいところだが、曲が無いためにはまだできないため一旦保留。よって、残りは…。

「宣伝…、だな。」

「多分、これが1番難しいのよね…。」

はあ、とため息をつく善子。恐らくこのメンバー内で1番現実的な考えをしている彼女の言葉で、より1層難しいと思わせられる。

「この前も言ったけど、ここの全校生徒は約100人。つまり、父母共が来たとしても、300人。まあ、兄弟とかがいる家庭もあるでしょうけど…、それでも350〜400人位でしょうね。」

「つまり…。浦女とは関係のない人たちを、200人は集めないといけないって事か…。」

「…そういうことね。」

解つてはいたが、改めて現実的な話になると、やはりどれだけ厳しい状況に置かれているかがはつきりと出てしまう。200人。それも、全校生徒+その家族が全員来る、という仮定での話だ。実際はもつと多くの人を集めないといけないだろう。…さらに、このグループのライブは初。いくら『スクールアイドル』という存在が有名になってきた世の中とはいえ、全く無名のグループを見に、果たして人は集まるのだろうか…？

「鞠莉さん…。マジでえげつない事してくれますね…。」

いつもニヤニヤしている鞠莉さんが脳裏に浮かんでくる。
そのニヤニヤの瞳の奥に言い表せない恐怖を覚え、背筋が冷たくなる俺だった。

……

「……こんにちは。」

淡島のダイビングショップ。夕日が傾き、日没が近づく頃。

浦女の制服を着た、とある生徒……いや、私の『知り合い』が入口からやってきた。

「………ダイヤ。久しぶり。」

……2年前の事もあって、かなり気まずい雰囲気。が流れたのはほんの少しで。

「……鞠莉さんが戻ってきました。浦女の理事長兼生徒として。」

「……っ!?!」

いきなり、衝撃的な事をぶっ込んで来た。

「それと、高見さん、渡辺さん、桜内さんと、榮倉さん。それに1年生3人がスクールアイドルを初めたようです。」

「千歌が……!?!この前は何も言ってなかったのに……。」

「今日はその事を伝えに参りました。……それでは。」

「ちよっ……!?!ダイヤ!?!」

休学中の私に、次々と『2年前』の事を連想させるような事を伝えるとき、くるりと方向を変え、本当に帰って行ってしまおう。

………なんで、私に。

「………鞠莉。ダイヤ。何を考えてるの……?」

忘れようとしていた、『2年前』の出来事。

どうやら、忘れることは出来なくなりそうだった。

第27話　く合宿をしよう！く

「お願いしまーす！……あ、これ、よければ貰ってください！……これ、よろしければ、どうぞ！」

温暖化の影響だろうか、昼間っからじりじりと日差しが照りつけてくる。俺の目の前を通って行く人々も、春服から夏服へと変えたように、薄着が目立つ。…そんな4月最後の土曜日の昼ごろ。

「あ、もしよろしければ、コレ、見てみてください！」

「ライブのお知らせーす！」

「あ、あの…。これ、良ければどうぞっ！」

「興味があれば、見てみてほしいです。」

「あ、あの、こ、これっ！よ、よろしければど、どうじよっ！」

「ふっ…。この冥界への召喚状を受け取ったからには、貴方は必ずやこの地へ来る事でしょう…。」

俺たちは、沼津駅前でライブのチラシを配っていた。

「…ふう。結構配ったなあ。」

大体配り始めて、小一時間くらい経っただろうか。50枚くらい持っていたライブのチラシは、すべて綺麗にはけていた。…正直、沼津駅にそんなに人は来るのだろうか？と思っていた部分があったが、普通に家族連れやら、学生やら、お年寄りの方々などの老若男女かなりの数がこの駅に出たり入ったりしているので、その点の心配は無用の様だった。

「…というか。もう夏か？結構暑いんだよなあ…。」

俺はYシャツの裾を捲りながら、真上から降り注ぐ太陽光に目を細める。4月ってこんなに暑かったかなあ、とぼんやり思いながらとらあえず一旦休憩にしよう、とみんなを呼ぶ。

「おーい！みんな！暑くなってきたし、一旦休憩にしようぜー！こっちこーい！」

俺の声に反応して、みんなが俺のところに集まってくる。近くに

あつた木陰のベンチに座らせると、あらかじめ用意しておいたスポー
ツドリンクをバッグから取り出し、みんなに渡す。

「ありがとー…、かけるくーん…。」

「大丈夫か？千歌。お前が一番張り切ってるように見えたけど。」

「うん…。やすめば、ダイジョブだいじょぶ…。」

ドリンクを飲みながら、ベンチにぐてつ、となつてゐる千歌。：
まったく、張り切りすぎだつての。

ま、その猪突猛進が良い部分でもあるとは思うけどな。と、内心
少し苦笑いする。

——実は、このビラ配りを企画したのは、ほかでもないこの千歌
なのだ。

鞠莉さんにライブの日時宣告をされたあの日。『宣伝』の部分で俺
たちがうんうん唸つてゐる時に、

「とりあえず、チラシを作ろうよ！」

と千歌が言った事でこの企画が始まつたのだ。…それから千歌は
なんと一日でチラシの下書きを作り、その日のうちに完成、さらにそ
の次の日には印刷まで済ませるといふ、普段の千歌では考えられない
ほどの迅速な行動をした。千歌の行動力が無ければ、こんなに早くに
実行に移すことは困難だつた、いや不可能だつただろう。

「へいへい、翔くん。飲み物がぬるいであります。曜ちゃん、キンキン
に冷えた飲み物をぐいっつとしたいであります。」

やる時はやるんだなあ…、と俺が千歌にしみじみとしていると、千
歌の隣に座つてゐる曜から、飲み物がぬるいとのクレームが。

「しよーがないだろ、バッグに入れといつてそのままだつたんだから。
それに、冷たい飲み物を一気に飲むのは体に良くないんだぞ。」

「うわー、なんかじじくさいよ翔くん。冷たい飲み物の方が気分爽
快じゃん！」

「んなこと言うなら返せい。俺の分買うの忘れたし。ちようどいい
わ。」

と、ぶうぶう文句を言う曜に軽くチョップをかまし、手からボトル
を取ろうとする…が、なぜかすいっ、とよけられてしまった。

「なんだよ！いらんいんじやなかったのか？」

「え!?いい、いや…、だって。そ、その…、間接、きすに…。」

「え?なんだよ、良く聞こえなかったぞ?」

「…//ああもう!やっぱり飲むの!翔くんにはあげないっ!」

と言つて、残りを全部ぐいつと飲み干してしまふ。…なんだよ、やっぱり喉渴いてたんじゃん。顔も赤くなつてゐるし。

「…つたく。しようがねえな。……………ほら、これでいいだろ?お嬢様。」

俺はふう、と肩を下ろすと、手近にあつた自販機に行き、流石に2本スポーツドリンクだと口が甘つたるいだろうからな、とお茶を購入し、曜にうやうやしくお辞儀をしながらそれを手渡す。

「あ、ありがと…。」

なぜか急にしおらしくなつた曜は、お茶を少し飲むと俯いてしまつた。なんだ、顔赤いし、熱中症か?と俺が曜の肩に手をかけようとした瞬間。意を決したように、いきなりガバツ、と上に向き直ると、さつきのお茶を俺に向けてきた。

「そ、その…//私はもういいから、後は、飲んで…いいよ?」

「お、おう…?そ、そうか?」

ぐああ可愛い!!なぜかわからんが、うるんだ瞳+上目づかいで俺の事を見つめてくる曜にドキつとしながら、俺は曜からお茶を受け取る。

「じ、じゃあ、貰うな…?」

「う、うん…//」

俺はお茶の飲み口をゆつくりと近づける。ちらり、と目線をやると、なぜか俺の口元を凝視する曜。飲み口が近付くにつれ、曜の顔もますます赤くなつて――

「や、や、やっぱりだめー!!!」

俺が飲み口に口をつける直前、いきなり立ち上がった曜が俺からお茶をひつたくると、そのまま一気に飲んでしまった。え、ええええ……。

「そんなに飲みたかつたんなら、無理する事ないっつの…。じゃ、自分

の分買ってくるよ…。」

「二、なんで気付かない（ずら）（んですか）…。」

「わ、私の飲み物、あげればよかった…。」

自販機に向かおうとみんなに背を向けたとき、千歌、花丸ちゃん、ルビィちゃんのため息が聞こえた気がするの、…、恐らく気のせいなのだろう。

その後しばらくも曜の顔は赤いまま。…俺は曜の行動の真意が全く読めないまま、その後もビラを配るのだった。

……

「うう…。やってしまった…。」

湯船の中で顔を鼻まで付けて、ぶくぶくとさせる。そんな事をして、今日の後悔が消えるわけもなく…。

「二回は、決心したんだけどなあ…。か、間接キス…。」

そこまで口に出すと、途端に恥ずかしくなって、今度は頭まで湯船を被る。……数秒して、また再浮上。うう、今絶対顔赤い。これって絶対お風呂だからじゃないよね

「明日、翔くんに謝らないとなあ…。…で、でもでも！翔くん普通そうにしてたし…。なんであんなに挙動不審だったのか聞かれたら…。」

／／
ほんとに、無自覚って、ずるいと思う。

「ああ…。翔くんがあんなに鈍感じゃなければなあ…。これじゃ私だけ変な人だよ…。」

でも、もし翔くんが、私の気持ちに気づいたら？

「うわー！考えただけでも恥ずかしいっ!!と、とりあえず明日は謝るところ、う、うん。そうしよう！」

そして再度湯船の中へ…。

その日の入浴は、普段の時間の2倍近く入っていたのでした。

……

1日飛んで月曜日。筋肉痛の腕に若干顔をしかめながら、浦女への坂道を登る。昨日、美渡さんにかなりしごかれたからな…。「土曜日休んだんだから、倍は働けい！」つて。おかげでインドアな俺は両腕がバツキバキ。ため息をつきながら、隣を歩いている千歌をちら、と見る。どうやらこちらは元気いっぱいなようで、軽くスキップぎみに歩いている。やっぱり普段から活発な子は違うな…。と改めて自分の非力さにうなだれていると。

「……………そうだ。」

俺の横を歩いていた千歌が、いきなりぴたっ、と歩くのを止める。その顔は、さつきまでのご機嫌な表情とは違い、いやに真剣な顔をしている。

「なんだ？急に止まって。遅刻するぞ？」

俺は千歌の急な行動の意味が解らず、疑問顔で尋ねる。すると、急にこちらへ向きを変えた千歌が、パアア…！と顔を輝かせながら、

「合宿をしよう!!」

などと言い出したのだった。

「えーつと…？つまり、ライブのための体力作り&練習、さらにみんなの絆を強めるために合宿をする、という訳か…？」

時は流れて昼休み。屋上に集まった俺たちは、いまだ若干興奮気味の千歌をなだめつつ、改めて千歌の言った事を確認した。

「そう…5月の最初つて、4連休でしょ？だから、その期間に千歌の家で合宿しよう！つてことだよっ！」

なげかももう決まった気にいる千歌が、キラキラと目を輝かせる。……、それを見てまた可愛いと思ってしまう俺。しかし、それには騙されん！と、ギョっ、と目をつぶり、現実面での話を千歌に告げる。「あのなあ…。合宿つて意見には賛成だけど、さすがに急すぎだろ？十千万、GWなんて絶対客が大量に来るだろうし、部屋も無いだろ。」

それに、俺たちも手伝わなくちゃいけないし。…第一、みんなの予定とかだつてあるだろ？ 厳しいんじゃないか？」

俺の反論に、待つてましたとばかりにニヤリと笑う千歌。ふっふっふ…、と不敵な笑い声をあげる。…な、なんだ？

「翔くんなら絶対そう言うと思つたよ。…その事なら、全部もんだいなーし！まず、十千万にはGWにお手伝いさんが来るから、千歌たちが手伝わなくても大丈夫だし、部屋は千歌と翔くんの部屋を使えばいいもんね！それに、みんなの予定だつて、さっきメールで聞いたけど、全員大丈夫だつて言つたからね！」

「な、なん、だと…!？」

絶対何も考えず言つていたと思つていた朝の発言に、まさか周到な考えがあつたとは…!!俺は千歌に驚愕し、1歩たじろぐ……つてちよつと待て。

「部屋…。千歌と、『俺の』部屋を使うつて言つてなかつたか…!？」

「うん。言つたよ？」

「あほかあああ?!?!？」

雲ひとつない青空へ吠える俺。突然の絶叫に驚いたのか、みんなの肩が若干ビクツ、と震える。

「ど、どうしたの翔くん？」

「どうしたもこうしたもあるか！俺の部屋も使う、つてことは、…その、…寝る時もそうなるつてことだろうが！そんなこと出来るか…!」

俺の指摘に、「…あ。」という表情の千歌+みんな。途端に顔が赤くなる。さらに俺も意識してしまったせいで、体温が上昇していくのが解る。

「…わ、わたしは別に、いいよ／＼／＼」

気まずい沈黙が流れて数秒、一番に口を開いたのは曜だつた。そうだよ、そりやあやつぱダメに決まつて——つて、え？

「わ、私も、榮倉君がいいつて言うのなら…／＼／＼」

「り、リトルデーモンの世話の主の役目だし？べ、べつに…、問題ないわ／＼／＼」

「おらも、別に大丈夫ずら。」

「わ、わたしも…。先輩なら、だ、だいじよぶだす、ですつ。」

曜を皮切りに、次々とOKの返事をするみんな。…え、嘘だろ？本気で言ってるのか？仮にも俺は男だぞ？

「ちよ、ちよつと待「はい！じ、じゃあ決定と言う事で／＼／」

俺が異議を申し立てようとするが、千歌に遮られてしまう。つて、ちよつと待てマジで！今『決定』って言っただろ！おい、それはマジでまずいって…!!

「そ、それじゃあ翔くん！そう言う事だから…：：：じゃあねっ！」

「よ、よーそろー！」

「ご、ごめんなさいっ！」

「き、来るべき審判の日が楽しみねっ！じ、じゃっ！」

「ほら、ルビィちゃん。早く行くずら。」

「は、花丸ちゃ…、せ、先輩。失礼しますっ！」

「ち、ちよつと待ってっー！ー！！！！」

そして、俺の反論を聞くことなく、そそくさと教室に帰って行くみんな。そしてタイミング良く鳴るチャイムの中、…：：：俺はその場に立ち尽くすのだった。

こうして決まってしまった4日間の合宿。

…：：：俺の理性は持つのでしょうか。

〈GW合宿編〉

第28話 〈GW合宿1日目〉

「……………ついにこの日が来てしまったか。」

5月3日、今日から4連休がスタートの朝。俺はいつもの時間に起きると壁に掛けてあるカレンダーを見て、肩を落とした。

…そう、今日から4日間、スクールアイドル部（仮）による、合宿がここ十千万で行われるのだ。

「みんなは9時くらいに来る、って言ってたっけなあ。はあ…。」

メンバーが集まるまで残り約2時間という事実が、一層俺を憂鬱な気分にする。

…ここまでだけを見ていると、完全に合宿を嫌がっている超インドア+空気が読めない野郎だが、俺は別に合宿が嫌なわけではない。寧ろ、みんなとの絆やチームワークが深まる、非常にいい機会だと思っている。

問題はそこでは無いのだ——、と俺は押入れを空けると、新たに昨日のうちに運び込んだ、1つの布団を見て、ため息をつく。

「ホントにここで寝る気なんだもんなあ…。意識しちゃって身がもたねえよ…。」

千歌の部屋に敷ける布団は、限界まで敷いて4つ。千歌はベッドから、部屋に5人は入る事ができる。…しかし、それでも俺の部屋に1人は来ないといけない事になってしまう。——あの後も、俺はみんなに考え直すように何度も言ったのだが、全てはぐらかされ、逃げられてしまう始末。うやむやなまま今日を迎えてしまった、というワケだ。

「…とりあえず、千歌を起こしに行くか。」

美少女と同じ部屋で一緒になる、なんぞ夢のまた夢のような状況なんだけどなあ…。たぶん、いや絶対緊張しちやって満足に眠れない4日間になると思う。こんなことなら、せめて今日くらいはもう少しだけ寝てりや良かったなあ…。と後悔を残しながら、俺は千歌を起こす

べく自分の部屋を出るのだった。

……

「おっはよーそろー!」

「こんにちは、榮倉君、千歌ちゃん。」

「ふっ…、邪魔するわね…。」

「善子ちゃん、カツコ付けてないでちゃんと挨拶するぞら。」

「お、おはようございますっ!」

その後、なかなか起きない千歌とバトルを繰り広げたり、GW限定のお手伝いさんに挨拶したりしていたら、あっという間にみんながやってきた。

「よ、よお。みんな。」

俺、寝るときの事は今は忘れよう。と平静を装ってみんなを出迎える…が、どうしても本人達が目の前に来ると、勝手に緊張してきてしまう。

「…ん?どーしたの、翔くん?」

と、若干よそよそしいしぐさに気付いたのか、千歌が俺に小首をかしげながら聞いてくる。

「え!?あ、いや。大丈夫大丈夫…。あははは…。」

「…そう?」

若干怪しんでいる千歌をなんとかごまかし、このままじゃ駄目だ、と気持ちを切り替え、

「…よ、よし!じゃあとりあえず荷物を部屋において、そっからどうするか考えようぜ!さあさあ入った入った!」

とみんなを促し、俺はみんなの後ろに回ると、背中を押す勢いで十千万の中へと誘導する。

「…ふう。みんなを見ただけでこれとは。俺、緊張しすぎだろ…。みんなは全然そんなそぶり見せないし、俺だけ何やってんだか…。」

みんなが十千万に入って行く中、一人、そんな事を呟いた。

「…さて、今日から4日間。ここで合宿をするわけなんだけども

とりあえず千歌の部屋に集まることになり、みんなが荷物を置いて、思い思いの場所で腰を落ち着けた事を確認した俺は、「今回の合宿で何をするか」具体案を出そうとしていた――のだが。

「とりあえず、まずは基本的な体力づくりのメニューでm「ちよつと待つのだ翔くん。」」

なぜか、いやに真面目な顔つきの千歌がそれを遮った。

「まずは、決めなきやいけない事があるのではないですか?」

「決めなきやいけない事?」

ちよび髭でも付けたら似合うんじゃない?、というような偉そうな顔で、顎のあたりを触りながら千歌がそう言った。…しかし、決める事か?決める事…ってまさか!?

「さすがに翔くんも気付いたようだね…。そう、『だれが翔くんの部屋で寝るか』についての話し合いだよ。」

その瞬間、完全に空気が変わった。みんなの顔をちら、と見ると、まるで、『その言葉を待ってた』とでも言うような真剣な表情。…って、あれ。花丸ちゃんはどうでもよさそうな顔してるし、ルビィちゃんはいつもと変わらずピギツてる…。ピギツてるって何だ、…まあいいか。

とにかく、一部を除いては確実に今の言葉で空気が変わったのは確かである。さつきまでにこやかに談笑していたのに、今では超真剣なまなざし。…って、まあそうだよな。誰も俺と2人つきりで一緒の部屋になんぞなりたくないだろう、真剣にもなる。

「…私、翔くんと一緒にいいよ?2人つきりでも、別に気にならないし…。みんなは、男の子と一緒に嫌なんじゃないかな?」

開口一番は、曜だった。笑顔で、しかし目は真剣なまま、淡々と自分の主張を言っただけのける…。…って、あれ?てつきり全員が俺と一緒に嫌、って言うと思っただけ、まさかの同室オツケー!?!?

「…私も、榮倉君と同室でも。曜ちゃんは、みんなと一緒にのお部屋の方が楽しいんじゃないかしら…。」

次に口を開いたのは梨子ちゃん…。ってえ!? 梨子ちゃんまでオツケー!?…しかも、なんか笑顔に威圧感を感じるんですが!?

「…ふ、2人とも、何言ってるのよ。リトルデーモンのせ、世話は…私の仕事でしょ。翔との同室は、わ、私に決まってるのよ。」

…よ、善子まで!? しかも、世話とか…。思春期男子にとって意味深な発言に聞こえてしまうのですが。

「いやいや、そんなに気を使わなくても、私が一緒にいいって。」

「…いいえ? 曜ちゃんこそ、千歌ちゃんたちと一緒に部屋でおしゃべりしてた方が楽しいんじゃない?」

「り、リトルデーモンの世話はヨハネにしかできないのよ? わ、私に決定よ…!」

「じゃあ、花丸ちゃんとルビィちゃんはどうするの?」

「そ、その2人は世話しなくても大丈夫なのよ! 翔はまだリトルデーモンになりたてだから一緒にいなきゃだめなのっ! / / /」

と、俺が善子の意味深台詞に思考が動いてしまいそうになっていると、2人が笑顔(ただし、目が笑っていない)、善子が顔を赤くして千歌の部屋への譲り合いを続けている。な、なんなんだ!?! 俺の部屋に何か目的でもあるのだろうか…?

「これじゃあ埒があかないぞ。ここは…、公平にじゃんけんをしたらどうぞら?」

と、いまだバチバチの空気が続いている3人の間に、「早くして…」とでも言いたげな表情の花丸ちゃんが入る。そ、そんなにどうでもよさげなのか…。と3人との空気感の違いに若干たじろぎつつ、まあ確かにこのままヒートアップしても結局は譲り合いで話が進まないのも事実、じゃんけんなら公平だよ…。と思い、俺もその方法にしないかと提案した…のだが。

「…そうだね。そうしようか。」

「ええ…。公平だもんね。」

「この墮天使のすべての力を右手に捧げるわ…。」

この言葉の後一言も発していないのにも関わらず、なぜか空気はさらに熱く。まるで3人の背後には、燃え盛る炎が見えるような気がするレベルだ。…しかも善子よ。お前そんなじゃんけん一回ごときで墮天使パワー全部使っちゃっていいのかわ。っておいおい、拳を天に仰ぐんじゃない。某世紀末バトル漫画のワンシーンにまで見えてしまっただろうが。じゃんけんはそんな血生臭いものではない。

「…じゃあ、いくよう？」

「ええ…。」

「…勝負よ。」

全員、覚悟が決まったのか、お互いの目を見合わせ、拳を振り上げる。

「「さーいしよはグーー！」」

お決まりの台詞とともに、3人の右腕が掲げられて――

「「じゃんけんけーん!!!」」

――その瞬間、俺のルームメイトが決まった。

……………

「お、おじやまします…。」

数時間前の真剣な目つきはどこへやら、俺の部屋におどおどと入ってきた梨子ちゃんは、まくらを両手で抱えながら、俺の元へとやってきた。

「お、おう…。梨子ちゃん。い、いらっしやい？で、いいのかな？うん。」

「う、うん…。おじやまします…。」

緊張してしまつておぼつかない言葉の俺に対し、数秒前に言った言葉を繰り返している。どこことなく委縮しているのか、俺の部屋を目線だけで見渡している。…ふう。数時間前の梨子ちゃん表情を見て、緊張するのは俺だけだろうな、と思つてたけど、どうやらそうでもないようだ。

と、それ以上会話が続かない俺たちの間を、開けてあつた窓からの風が通り、梨子ちゃんの前髪が揺れる。…そういえば、風呂上がりだからか、いつも下ろしている髪をシュシュ？で一つに束ねていて。さらに視線を落とすと、パジャマなのだろう薄手の寝間着が、ヒラヒラと風邪で揺れていて、俺をドキりとさせる。

「ど、どうしたの…？／＼／＼」

「え!? あ、いや…。きよ、今日は夜風が気持ちいいなって!」

「そ、そうだね。」

俺の視線に気づいたのか、梨子ちゃんが若干顔を赤らめながら俺を見る。とつさに話を逸らしたものの、内心俺はドキドキしっぱなし。普段と違う髪型に、シャンプーのにおい。さらに、普段では絶対に見ることはないであろう薄手の寝間着姿、という3連コンボに、正常な判断ができない。や、やばい…、落ち着かないと。

「そ、そうだ。梨子ちゃんは俺のベッドで寝てくれな。俺は布団を敷いて寝るからさ。」

「え…? い、いいよ気を使わなくて! 私が布団で寝るから! 榮倉君はいつも寝てるどころの方がいいでしょう…?」

「いやいや、一日練習頑張ってたんだし、ベッドの方が寝心地いいだろう? 俺のことは気にすんなって。」

とりあえず、まくらを置かせるためにベッドへと促したのだが、梨子ちゃんは遠慮して首を振るばかり。結局今日は一日筋トレとランニングだったから、相当疲れているはずなので、そんな遠慮せずに使ってほしいのだが…。

「じ、じゃあ…。」

「ん? どうした?」

促す、首を振るの流れを3回ほど繰り返したところで、梨子ちゃんが俯いて、なにかもごもごと口に出している。…なんだ? やつとベッドに行ってくれる気になって――

「一緒に、寝て?」

「…はい?」

聞き違いだろうか。上目づかいでじつとこちらを見てくる美少女

が、とんでもないことを口にした気がするんだが。

「あ、あの…？桜内さん？聞き違いならいいんですけど、今、一緒に寝よう的な事言ってますでしたか…？」

その瞬間、梨子ちゃん顔が、桜色を何倍にも濃くしたような真っ赤な色に染まった。…などと冷静そうに言っただけはいるが実際は俺もいきなりのぶっ飛び発言に頭がパニック状態である。不意打ちも不意打ち、完全に想定外の事態だ。頭の回路がショートして、冷静な思考ができない。

「くっ／＼／ち、違うの！いや、違くないんだけど、なんといつか、その、一緒に布団で寝てくれたら、って!!」

「お、おちつけ梨子ちゃん!? それどこで寝るか詳しくなただけでなにも変わってないぞ!」

「ええっ!? ええとお：／／／そう！横並びで！一緒に寝てほしいな、って!」

「そ、そうかわかった! じゃあ今すぐ布団並べるからな!? ちよ、ちよつと待つてな!」

あ、あはは、と2人して笑いながら、俺は恐らく史上最速だろう速さで押入れから布団を出すと、2つ横に並べ、さらに掛け布団もぴしつとセットした。その時間、約30秒。…美渡さんにしごかれた甲斐があつたつてものだ。

「じ、じゃあどうする!? もう時間も時間だし、寝ちやうか!」

「う、うん! そうだね! お、おやすみ榮倉君!」

「あ、ああ! おやすみ!」

…つて寝られるわけないだろうがああ!!!

恥ずかしさのあまり互いの顔が見られない俺たちは、動揺マックスでそのまま布団に入った。因みに時刻は夜9時半。時間的にも雰囲気的にも寝られるわけがないまま、2人の間を沈黙、というよりは気まずい空気が流れていくのだった――

……

「…お、起きてる?」

沈黙から、どれくらい経つただろうか。不意に、背中の方から梨子ちゃんの声が聞こえてくる。動揺は収まったのだろう、声がいつものトーンに戻っている。

「あ、ああ。起きてるよ。」

いきなりあんなこと言われて、そのまま寝られるわけがない。俺は高ぶった気持ちのまま、でも声は静かに返事をした。

「よかった…。あ、あの、さつきはごめんね？いきなり、変な事言っちゃって。」

「あ、ああ。気にするなよ。ちよつとびっくりしただけだからさ。」

…ホントは、全然ちよつとじゃないけど。大分、どころか完全にびっくりしたけど。

と、そこで梨子ちゃんの布団の方からもぞもぞと音が聞こえたので、俺は梨子ちゃんの方を向く。…ああ、やっぱりこっちの方へ体を向けたらしい。俺と梨子ちゃんは布団越しで目を合わせる。

「…ふふ。なんか、新鮮な感じだね。こうやって寝るのって。」

「ああ…。そうだな。梨子ちゃんも普段はベッドだろ？布団で寝るなんて、なかなかないよな。」

ベッドよりは少し下が固い感じがするけど、ベッドのように窮屈感はなく、開放的な感じだ。これはこれでいいかもしれない。

「もう…。違うよ。こうやって2人で寝る事が、だよ／＼」

「へ？あ、そ、そうだな。」

これからちよくちよく布団で寝るかな…、と考えていると、梨子ちゃんが、口をとがらせながら若干恥ずかしそうに言った。俺はまたドキリとしてしまい、しどろもどろに言葉を返す。

「今日、朝からうるさくしちゃってごめんね。迷惑だった…?」

「へ?…ああ、部屋決めの事か?いや…それより、びっくりしたよ。まさか3人も俺の部屋でもいいって人がいるなんてさ。みんな嫌がると思ってたから。」

「そ、それは…／＼」

「なに?俺の部屋になんかあったりするの?俺、別になんか珍しい物とか、持ってたかな?あ、それともテレビか?千歌の部屋にはない

もんな。見たいのがあるんだったら、別に見てもいいぞ?」

「……ばか。」

「ん?なんか言ったか?」

「…別にっ。」

なぜか少し機嫌が悪くなる梨子ちゃん。なんだ…?あ、もしかしてもう番組終わっちゃったとか?それは申し訳ないことしたな。もつと早く言つとけばよかった。

「そういえば、男は苦手なんじゃなかったのか?俺と一緒に、しかも隣でなんて…。男に慣れる練習にしても、いきなり飛ばしすぎなんじゃ…。無理しなくていいんだぞ?」

この前、歌詞作りの時にある男のおかげで男に対する意識が変わった、とか言ってたけど、それでも苦手な事に変わりはないはずだ。

「…本当に鈍感さんなんだね。」

今度は聞こえる声で、そうはつきりと言った梨子ちゃん。…布団から起き上がり、俺をジツと見つめる。…え?なにがだ…?と、俺も布団から起き上がり、梨子ちゃんと視線を合わせる。

「あのね…、この前の男の人ってね。…：榮倉君、なんだよ。」

少しうつむいた後、頬を桜色に染めた梨子ちゃんは、そう言った。その刹那、二人の間に流れる窓からの優しい風。それはまるでドラマのワンシーンの様で…：つてちよつと待て待て待て!?

「お、俺!」

「…うん。」

さらに衝撃的すぎる告白に、何も言えず、口をパクパクさせる俺。ま、待て待て待て。冷静になるんだ。

…もう一度、あの時の梨子ちゃんの言った事を思い出してみよう。

確か…、「いつも笑顔で、優しくて、周りの事ばかりを考える」、「とか言ってた気がする。あと…、「そのためなら、平気で土下座もする」、「とかも言ってたっけな、確か。

前者は全く覚えに無いが…、後者は、確かにした記憶がはつきりがある。確かに…、目的遂行に土下座が必要なら、まあするけど。俺、そんな梨子ちゃんの「男に対するイメージ」を帰るような事をした覚え

はないぞ…？

と、一人でうんうん唸っていると、梨子ちゃんがクスツ、と笑って、「そういうところだよ。」と俺に言っ、そのまま布団をかぶってしまった。…ど、どういうところなんだろうか。

「ま、まあいいか。…じゃあ梨子ちゃん、今度こそ、おやすみな。」

「あ…、ちよつと待って。最後に…、お願いと言うか…。」

「ん？なんだ？」

俺が聞き返すと、もぞもぞしていた布団から頭と目だけが出てきた。

「私の事…、『梨子』って呼んでほしいな。だ、だめ、かな？」

「ああ、わかった。…梨子。」

「ありがと…。お、おやすみ、『翔くん』っ。」

えへへ、とはにかみながらの表情十名前呼び。最後にとんでもない爆弾を投下して、梨子は夢の世界に落ちて行った。

俺はその爆弾をまともに食らい、その後2時間は眠ることは出来なかった…。

………

次の朝、俺が起きると、隣には梨子はすでにおらず、綺麗に畳まれた布団のみだった。俺は後頭部を掻きながらあくび交じりに下へ降りると、テーブルにはみんなの姿が。

「あ、おはよーっ！翔くん！」

「おはヨーソロー、翔くん！」

「やっと思覚めたわね…、翔。」

「師匠、寝坊ずらよ。」

「お、おはようございますっ！」

俺はみんなに挨拶をしながら、席に着く。…すると右肩にちよんちよん、と指が。

「ああ、おはよう、梨子。」

「おはよう、翔くん♪」

「翔くん?!?!」

「おお、進展したずら。」

「わっ。き、昨日何が…!」

その瞬間、梨子ちゃん以外の全員が俺の方を向く。

「翔くん!? どういうことなのか、説明するのだあ!!」

「翔くん!? 昨日、何があったのか詳しく教えてもらうからね…!」

「梨子…。侮れないわね…。」

「は!? なんだよみんなしていきなり!? ま、まずは朝食を…!!」

「問答むよおお!!」

なにがなんだかわからないまま、俺はみんなに囲まれて。

にぎやかか…? な中、合宿2日目は始まっていくのだった。

第28話　　GW合宿2日目

「はえああ…。つかれたよおお…。」

「はっ、はっ、はっ…。」

「ま、待ってよ曜ちゃん…！」

「こ、これは…キツイ…わ、ね…！」

「はっ、はっ…。は、花丸ちゃん！頑張ろう！」

「っ、つらいすらあ…！」

GW合宿、2日目。

午前中は昨日と同じく、体力作りから始めようという事になり、「それならお勧めの場所があるよ！」と言う曜に引きつられ、俺にとつては2度目である、淡島にやって来ていた。

「こ、これは…。かなりきついぞ…。」

2度目の船に乗り、若干テンションが高かった俺だが、曜が言うトレーニング場所である淡島神社の入り口を見た瞬間に、一気に絶望へと落とされた。鳥居の先に見えるのは、階段、階段、階段。終わりの見えない階段に、俺の体は正直、始める前から悲鳴を上げていた…。

というか正直、俺は曜を舐めていた。ここに来るまでに多少なりとも曜の超人っぷりに気づいていれば、心の準備もできたのだけでも…。と、俺はもう見えなくなりそうな曜の背中を見ながら、内心そんな事を考える。

今、思い返してみると、曜の体力は普通の女の子レベルではない事にはなんとなくは気付いてはいたのだ。…こんなに凄いレベルだとは思っていなかっただけで。

昨日の練習だって、ただでさえ足場の安定しない砂浜で筋トレ+長距離をみっちりしたにも関わらず、「動かしたりないよ」とぶうぶうと不満げに言っていた。その時は『ああ、元気な奴だな…。』とほほえましい感じで見えていたがあれが仇となっていたのか…。

「…まあ、曜にぶつくさ言ってもしょうがない。体力があるのは良い

事だし。：男の俺よりもあると、ちよつとへこむけど。」

もう一度曜前を見ると、曜の姿は完全に消えていた。自分との体力差にへこみつつ、呼吸を意識しながら、自分のペースで走って行く。ちなみに、順番は曜、千歌、梨子、善子、俺、ルビイちゃん、花丸ちゃん。：あれ、曜どころか、2年生+善子にも抜かれてる。：もしかしくなくても、俺ってかなり体力ない奴なんじゃ!?

「はあ…、はあ…。る、ルビイちゃん。マルの事は気にしなくて良いから、先に行つて?人のペースに合わせてたら、余計に疲れるでしょ?」

「で、でも…。花丸ちゃん…。」

「ほ、ほら…っ。早く、行つて…?マルは、後から行くから…。」
「…う、うん。わかった。」

しばらく階段を上り進めたところで、看板に『ロックテラス』と書かれている、ベンチが設置されている、休憩所のような場所が。そこで一度立ち止まった俺が息を整えていると、後ろから声が聞こえてきた。会話から、花丸ちゃんがルビイちゃんを先へと促している様だった。：しばらくすると、ルビイちゃんがやってきて、俺にぺこりとお辞儀をすると、そのまま立ち止まることなく先へと進んでいった。と
「うか、ルビイちゃん結構早い…。下手したらさっきの俺のペースより早いんじゃない?」

「はっ…。はっ…。はっ…。…はあ、はあ、はあ。」

ルビイちゃんが先に行つてから数十秒。：ふらふらとしながら花丸ちゃんが階段を上ってきた。相当参っているようで、足元がかなりおぼつかない。俺は花丸ちゃんの元へと駆け寄ると、花丸ちゃんは俺の目の前で止まり、膝に手をつけて息を荒げる。

「大丈夫か…?花丸ちゃん…?」

「だ…、だい、じょうぶ…ずら…。」

「大丈夫じゃないだろ…。ほら、そこにベンチがあるから。そこまで歩けるか?」

「ず…。ずら…。」

俺は花丸ちゃんの背中に軽く手を当て、ベンチまでゆつくりと誘導する。そしてベンチに座らせると、俺は腰につけているポーチからペットボトルの飲み物を取り出し、花丸ちゃんに手渡す。相当しんどそうにしている花丸ちゃんは、俺からそれを受け取ると、よつぽど喉が渴いていたのだろう、すぐに飲み始めた。

「…つく。ぶはあつ。…ふう。師匠、ありがとうずら…。」

「いやいや。そんな事より、大丈夫か？」

「少し休めば、大丈夫ずら…。…えへへ、なんか最近、師匠から飲み物ばっかり貰ってる感じがするね。」

「そりゃあ、一応君たちの裏方だからな。そういう準備はしてきてるんだよ…。あ、今日はタオルもあるぞ。…ほれ。」

俺は再度ポーチの中を漁り、花丸ちゃんにタオルを手渡す。花丸ちゃんはお礼を言いつつそれを受け取ると、顔に当てて、汗を拭きとった。…が、体が未だ火照っているままなのか、貌からツーンと汗が一筋、また一筋と流れる。大丈夫だろうか。確かに最近暑くなってきたとはいえ、少し汗をかきすぎな気もするが…。

「…ふう。少し落ち着いたずら。ごめんなさい、師匠。足を止めさせる事しちやって…。マルはもう大丈夫だから、先に行つて欲しいずら。」

「何言つてんだ、さつきも言つたろ？俺は君たちをサポートするんだから。回復するまで、一緒にいるよ。何かあったら大変だしな。」

「で、でも…。マル、凄く足遅いし…、体力ないから。迷惑になつちやうずら。」

「俺も体力無いから、一緒だよ。…さつき善子の後ろ走つてたしな。はは…。」

さつきの事実をもう一度自虐し、乾いた笑いをする俺。やっぱりこの辺に住んでる人達って、体力あるのかなあ…。『田舎の人は元気いっぱい』っていう、俺の勝手な偏見だけど。でも…、あながち間違いでないよなあ。曜はめっちゃ速いし。さつきのルビイちゃんのペースも、結構ハイペースな感じに見えた。うん、やっぱりそうなん

だろう。自然に囲まれて育った子は、自然と基礎体力もついていくんだろう……。あ、梨子……。都会から来たのに俺より速い……。……………」

「師匠？どうしたずら？」

「……え？ああいやなんでもないよ……。うん……。はは……。」

もうこの事を考えるのはやめよう。うん。どんどん自信がなくなってくる……。

「……師匠は、運動苦手ずら？」

「あ、ああ……。人並みの体力だとは思ってたんだけどね……。」

「マルもずら……。マル、小さい時から本ばかり読んでたから。外で遊ぶ、とか全然してこなくて……。そのせいか、今ではこんな感じで……。」

「そうか……。俺も、一応部活とかはやってたけど。そんなに走り込みだとか、筋トレだとか熱心にやった記憶は無いからなあ……。」

俺の心を見透けているかのようなピンポイント、どんぴしゃタイムングの話題に、内心ドキリとしたが、どうやら花丸ちゃんの悩みを俺に打ち明けてくれたのがたまたま重なっただけらしい。……しかし、初めて見たときから落ち着いている雰囲気の子だな、とは思っていたけど……。そんなに外で遊んだりしなかったのか。まあ、外で遊ばないのが悪い事では全くないし、寧ろ小さいときから本を読むって結構凄い事なんだと思う。俺なんて本なんか全然読まないからなあ……。

「ルビイちゃんに誘われて、スクールアイドル始めたけど……。マル、体力ないし、本ばかり読んでたから、その……明るくないし。『おら』とか、『ずら』とか言っちゃうし……。ルビイちゃんと一緒に入部届けにサインした時は、わくわくドキドキだったけど、最近……。ちよつと不安になってきちゃって。『ちゃんとスクールアイドルやれるのかな。』って、思う時があった。」

「……………」

ぽつり、と話の流れから出た、花丸ちゃんの悩み。いや……。『本音』とでもいうべきか。俺はそれを聞いた瞬間、真剣な表情で花丸ちゃんに向き直る。曜達の時と同じように、悩みを聞いて、相談に乗る。これは裏方としての最重要レベルの仕事だからな。『スクールアイドル

ル』という未知のものに挑戦しようとしているんだ、そりゃあ不安にもなる。だから俺は少しでもその不安を取り除けるように、しつかり耳を傾けないと。

「花丸ちゃんは、スクールアイドルは、あんまり…。って感じなのか？」

「いえ、そんなことはない啦…。ルビィちゃん、善子ちゃん、優しい先輩たちと一緒に過ごす時間は、とても楽しいし。でも…。やつぱり、不安はあつて。本屋さんでスクールアイドルの雑誌を見たら、そこに載ってる子たちは、とつてもかわいくて、キラキラしてて…。マル、『ずら』とか言っちゃうし…。田舎者っぽいから、これから上手くやっていけるか、怖くて。」

「そんなことないぞ。花丸ちゃんはやっていけると思う。そりゃあ、まだ曲もないし、ダンスとかも練習してないけど…。きつと、うまくいくぞ。」

「でも…。マル、体力ないし。今も、みんなは走ってるのに…。マルだけふらふらで。休憩してしまつてる啦。こんなんじや、この先もみんなの足を引つ張つてばかりになりそうぞ…。」

だんだんと口調が弱弱しくなり、顔もだんだんと俯き始める花丸ちゃん。…まだ活動は始めたばかり。というか、まだスタートラインにも経っていない、いわば準備期間のような時だ。俺からしてみれば、花丸ちゃんの見切りは速いと思うし、これからみんなと頑張つて行けば、この先きつと成功する、とも思う。しかし、それを花丸ちゃんに伝え、「だから大丈夫。」と励ましたところで、花丸ちゃんには何も響かないだろう。『自分の事は自分が一番解る』、とはよく言ったものだ。このままでは、最悪の場合「自分にはできない」と部を抜けてしまう恐れもあるかもしれない。それは絶対に避けなくては。もちろん、人数が少なくなつて活動に影響が出る、という部分もあるが、何より、花丸ちゃんがそのコンプレックスを抱え続けたままになつてしまふ。なんとしても、避けなくては。

「…引つ張つたつていいんだよ。」

「え…。。？」

その俺の言葉に、ふっ、と顔を上げる花丸ちゃん。「何を言ってる？」と、不思議そうな表情をしている。

「みんながみんな、全部の事を全員が同じようにできるわけないだろう？ほら、さっきだって曜がぶっちぎりで走ってたし。ああやって、足の速いやつもいれば、花丸ちゃんみたいに、走るのが苦手、って子もいる。そんな事、この先の練習でだって得意不得意が出てくるだろうし、出来ないからって責めるやつじゃないよ、あいつらは。」

「で、でも…。迷惑かけちゃうのには変わらないし…。」

ニヤつ、と笑いながら話す俺の言葉に、少し表情が柔らかくなった花丸ちゃん…だったのが、すぐにシユン、と落ち込んでしまう。花丸ちゃん…、良い子過ぎるだろ。

「そんなに気にする事ないんだよ。花丸ちゃんには花丸ちゃんの良いところだつてあるだろ？得意な事とか。例えば…、そうだな、さつき本ばかり読んでたとか言ってたから、相当な読書家だろ？それで得た知識で、歌詞作りの手伝いとかさ、できそうじゃん！」

「……………」

…と、何か感じたものがあつたのか、そこで花丸ちゃんの表情がはっ、と何かに気付いたように、俺を見つめてくる。まるで、「自分にも出来る事がある…？」と俺に聞いているかのように。

「マルにも、出来る事がある…？」

「そうだよ。花丸ちゃんは足手まといなんかじゃないし、迷惑でもない。大切な、『スクールアイドル部』の一員だよ。」

「…!!」

その瞬間、彼女の両方の瞳から、ぽつ、ぽつ、と涙が流れる。

「自分にも出来る事がある」。みんなに貢献できる、という嬉しさからか、安堵からか。

彼女の瞳からは、何粒も何粒も、涙があふれ出してきて。

「し、ししよっ…！グスツ、師匠…！」

「おいおい、泣くなつて！可愛い顔が台無しだぞ…？」

「ししよお〜！」

「つておいおい、急に抱きつくなくて！ビックリしたわ！」

「良かった……よかつたずらあ……！」

ハンカチでも、とポーチに手を入れようと視線を移したところで、腕にかかる軽い衝撃。それが花丸ちゃんだと気づき少し驚いたものの、俺はふつ、と少し笑うと、花丸ちゃんの頭に手を当てる。

「…大丈夫。絶対、うまくいくよ。…なにせ、俺たちが直々にスカウトしたんだからな。」

「全く、グスツ、う、嬉しさが、ヒック、わからないずらつ……！」

「ふふつ……。泣くか笑うか、どっちかにしろつて。」

頭を撫でながら、俺は腕に顔を埋めている花丸ちゃんに微笑む。いつの間にか高く昇っていた太陽から、木漏れ日が優しく2人を照らしているのだった。



その夜。

一人の少女が、湯船に浸かり夜空の星を見つめながら、物思いにふけていた。

「なーにたそがれてんのよ、ずら丸。」

「…今日の事を振りかえつてたずら。」

そう言つて、親友の事を軽く受け流して、また空を見上げる。「なによ！ちよつとはかまつてよ！」と声が横で聞こえてくるが、…気にしない。

…今日は、色々あつたはずなのに。

みんなで淡島に行った。凄い量の階段を上つた。おいしいご飯を食べた。

「それでも……。」

色んな事があつたはずなのに。なぜか、頭の中があの人々の事ではいっぱいになってしまう。意識してるわけではないのに、自然と、今日のあのベンチでの出来事ばかり繰り返し再生してしまう。

「ふわあく。やっぱり温泉は気持ちいいねー！」

「ホントだねー！ヨソローー！」

「曜ちゃん？泳いじや駄目だからね？」

「よ、善子ちゃん。ここの温泉、ちよつとあついよお…。」

続々と、みんなが湯船に入ってきてても、夜空を見上げ続ける。

…なんで、あの人の事ばかり考えてしまうんだろう。なんで、あの人の言葉が頭を回り続けるんだろう。

「大切な、『スクールアイドル部』の、一員だよ。」

その時、夜空に一筋の光が流れた。

「花丸ちゃん？」

「おーい。どうしたのー？」

ああ、そうか。

「た、大変。湯あたりしてるかも…!？」

「ええっ!?!は、花丸ちゃあん！」

本で、何度も読んだ事がある――

「ずら丸!?!大丈夫なの!?!」

そうか、これが――

「これが、恋なんだ。」

第28話　　GW合宿3日目

「師匠。マル、師匠の事が好きです。」

合宿3日目の朝。本日もお日柄の良い天気で、窓から入ってくるサンサンと照りつける朝日を浴びながら、各々談笑しながら朝食を摂っていた時――

爽やかな気分を一瞬にして破壊する攻撃力を持った、というか全く予想していない一言が全く予想できない相手から飛び出した。

カッチャーン。と箸を落とす音が5人分聞こえ、その音を試合開始のゴングとするように…、空気が一変した。因みに箸を落としたのは俺と発言の主以外の全員であり、かくいう俺も味噌汁のお椀を持っていたため、これを落とすと大惨事になる。という潜在的意識がなければ、今頃俺の箸もテーブルの上に落下していただろう。もつとも、その意識もすぐにこの動揺で書き消えてしまうような、かなり憔悴したものののだが。

「ま…、まてまてまてまて花丸ちゃん!?まだエイプリルフルには早いぞ…!?!」

「早い、どころかついこの間過ぎたばかりすら…。あ、この漬物おいしい。」

「なんで当の本人がそんなに普通でいられるの!?!」

ひとまず手の中で凄いい勢いでカタカタと震えているお椀を、なんとか溢さずにテーブルに置く事に成功し、安堵すると同時に視線を花丸ちゃんに戻す。…が、当の本人は自分の言った事に微塵も動揺を出さずに、小皿に乗っている漬物を口に入れ、ポリポリと食べている。こゝ、この子…。自分の言った事の意味が解ってらっしゃるのでしょうか?。

「よ、よよよよよよーちゃん?い、今のって聞き違いだよねえ!?!」

「よ、よよよよよよーそろおおお!!」

「よ、曜ちゃん!?!お、おおお落ち着いてええ!」

「ず、ずずずらまるううう?!?!? 何言ってるんのおお?!?」

「は、ははは花丸ちゃん?!?!?」

あつちはあつちで大変な事になってるし。す、凄い動揺してる…。他人を落ち着かせるより、まずは自分が落ち着けよ×5。…というか、今のこの状況、誰もツツコミ役がいなくない?いつものツツコミ役がこの現場を作り出すという特殊な状況、…あれ?一体だれが納めるの?

というか、なんで俺も落ち着いてきてるんだ?あれ…、一応俺、告白されたってことでいいんだよね?と、俺が一番動揺しているハズなのになぜか謎の落ち着きを見せ、周りのこの状況をどうしようかと考えると同時にまず、俺は本当に告白されたのか?と数十秒前の事実まで疑い始めたその時。

花丸ちゃんが俺の方に体を向け、動揺など全くないいつもの表情をしながら、カチャン、とテーブルに箸を置いた。

その瞬間、全員の視線が花丸ちゃんに集まり、しーん、と静まり返る。おお、鶴の一声とはこのことか。いや、箸の力だったから箸の一声か。と意味のわからない事感嘆する俺。すると、俺の考えている事を読んだのか、花丸ちゃんが俺の事をジト目で見てくる(何度か言うけど、なんで俺の頭の中はいつも見透かされて以下略)。あ、どうもすいません、どうぞお話をお願いいたします…。

「師匠はたまに変な事考えてるずら…。」

「もう俺の考えが読まれてる事にはツツコまないぞ…。」

「あ、後、告白したのも本当ずらよ。」

あ、そこまで読まれてるんですね。と俺が少し肩を落とすと、花丸ちゃんがクスツ、と笑う。…もう余計な事考えるの止めよう。

「あ、そうそう。でも、さっきの告白には、少し語弊があっただんです。」

「ご、語弊?」

そうだ、コンビ二行こう。みたいな軽い感じで手をポン、と叩いた花丸ちゃん。

「正しくは、師匠の事が好き』かも』しれない。って言いたかったんです。」

……。

……。

……。

「……いやだから何!?」「……」

数秒の沈黙の後、全くの同じタイミングで同じツツコミを入れる俺たち。あれ、早くも合宿の成果が出てきたのかな?

「か……、『かも』でも、好きなことは好きなんですよ!」

「そ、そそそそうだよ! 全く解決になってないよ!」

「で……、でも! 気のせいってこともあ、あるかも……よ?」

「そ、そうよ! ずらまるの気のせいよ!」

「は、花丸ちゃん……! どっちなの……?」

「もう我慢できない!」とでも言いたげに、荒々しく席を立ち、俺と花丸ちゃんの周りを取り囲むように完全包围をする5人。まあ……、そりゃあこうなるわな。さっきの発言を撤回するのかと思いきや、さらに意味深な発言をぶっ込んでくるんだもの。俺は平静を装ってはいるものの、心臓はものすごいスピードで波打っている。「告白(?)」という今まで経験した事のない人生初イベントを、ただでさえ頭の回転が悪い朝っぱらから経験しているのだ。最初こそ驚きの方が心のパラメータを占領していたからまだ考える余裕が少しはあったものの、時間がたつにつれそれが薄れ、さらに今の意味深なセリフだ。「結局どっちなんだよ!」と、「マジで告白だったら……!」という期待と不安が俺の胸の中を渦巻いている。やっべえマジでどうなるんだ……!」

「……正直なところ、まだ解らないんです。」

「どっちだ、どっちなんだ……」とまるでカジノのルーレットで赤か黒か考えている人の様に血眼一步手前の様な視線を送り続ける2年生+善子と、ただただ心配そうに見つめるルビィちゃん、さらに真正面から見つめる俺の視線を受けながらも全く動揺を見せない花丸ちゃん、少し……、間を置いてから、そう言った。

「わ……、わか、らない……?」

ゆつくりとした口調で、そう告げた花丸ちゃんをぽかん、と見つめる俺。……と+5人。ふと視線をみんなに合わせると、全員が全

員、「???」という顔をしている。あ、良かった、みんな同じ反応してくれてるわ。俺だけ話についていけないのかと思った。

「はい。初めて師匠と会って、正直、初めて見たときは何とも思っていないませんでした。へえ、女子高に男の人が入るなんて、ライトノベルの主人公みたいな事、本当にあるんだなあ。って。」

「お、おう…。そうなのか…。」

ぐふ。…『何とも思っていないかった』というワードが心に刺さる俺。特に悪気があったわけじゃないのだろうが、彼女から語られた出会いがしらの印象がひどかった事にダメージを受ける。

「でも…。師匠と出会ってから、段々と印象が変わっていったというか。不思議な人だなあ、って…。善子ちゃんを一日で学校に連れてきたのも、凄く驚きましたし。…今思うと、『師匠』って呼ばせてもらってる、あの時から、もうこの気持ちが芽生えてたのかもかもしれないら。」

え、だとしたら初めて会ってからたいして経ってないときから、そういう感じだったってことか?!?!…いやあ、周りから唐変木だの鈍感だの言われ続けてきたけど、あながち間違いでもなかったらしい。しかも、その経緯からすると善子が、その…いわゆる『恋のキューピッド』的な立ち位置だったんじゃないか…。これじゃ墮天使の名目丸潰れだな。…といういつものどうでもいい思考は置いておいて。

なんていういつものくだらない思考を読まれたのかは定かではないが、少し話を止めていた花丸ちゃんが、ふっ、と話を続ける。

「…それに、いつも周りの事を見ている、優しい人だつてことも。昨日の練習中の事だつて、マルはとつても嬉しかったです。…でも、マルは『恋』というものが何なのか、よくは解っていないくて。本では良く見る表現、場面ではあるけど、実際に体験したことはなくて。…師匠に興味を惹かれていて、それがどんどん大きくなっているのは事実です。でも、この気持ち genuinely 『恋』なのか、まだ解らない。だから『かも』という風に追加で補足をさせてもらった、という事すら。」

話が終わり、ふーっ、と小さく息を吐いた花丸ちゃんは、満足げな表情で軽く椅子にもたれかかる。俺はその様子を目で追いながら、先

程の花丸ちゃんの話の頭で整理する。

えーつと…。まず、

①「俺に告白をしてきた。」

②「しかし、それは本当に好きなのかどうかは解らない。」

③「でも、俺への興味、関心が段々と大きくなってきたのは事実。」

…という所、か？

…うん。②から③への移行は理解できる。そりゃあ恋をした事のない人にとって、その感情がどのようなものなのか、解らないというのは、当たり前と言えば当たり前だろう。「そんなもん、感じたままだろ。」と言われてしまえばそれはそれなのだが、花丸ちゃんの性格+大量の読書家という事もありその気持ちというのは自分の中で論理的に説明がつくまでは納得できない、というような律義で難儀なものになっていくのだろう。勿論、人の感じ方、考え方は千差万別だし、その事に答えが出るまでゆっくりと考えてくれれば良いと思う。

しかし、謎なのは①のことだ。まだ自分自身のその気持ちに答えが出ていないその状況で、なぜそれを当の本人に告白してしまったのか、という事だ。結局最終的には、これが告白なのかどうかも怪しい、変な雰囲気になってしまった。現に、さっきまで心臓バクバクだった俺の今の心音は、平常値そのものだ。緊張感など微塵もなくなり、ただただ「??」が残っている。

うーん…、やはり何度考えても花丸ちゃん的心情が理解できない。俺に伝えた意味は何なんだ？…でも、『かも』の告白とはいえ、「興味がある」なんて面と向かれて言われたら多少なり、いや大分花丸ちゃんのことを意識してしまうしなあ。俺の事が好きなのか、それとも違うのかモヤモヤしたままだし…。

…。

…あれ？

もしかして、これって…。

「…師匠が自分で気づくなんて、ちよつと予想外すら。そうです、この告白は、『師匠の意識をマルに向けてもらう』為の意味も含まれているんです。」

…。

……当たってたあ!?嘘お!?

「他人の思考を読む」という俺には不可能かと思われた所業を意外や意外、初成功し内心舞い上がる俺。だっていつつも俺の頭の中読み散らかされてたんだよ!?これで俺もスキルを会得して……、おっと調子に乗るのはやめよう。花丸ちゃんの視線が痛い。さつきはマグレマグレ、はははは……。

「…師匠はすぐに調子に乗るずら。」

「いや…、面目ないです。」

「…まあそれはいいとして。とにかく、これで師匠はマルの事を意識せざるを得なくなったずら。えへへ。改めまして、これから宜しくお願いしますね。」

『この気持ちの意味が解るまで、興味の対象にこちらに意識をしてもらう』

なるほどなあ……。花丸ちゃんの気持ち genuinely 『恋』だった時のための布石だつて訳だな。確かに、「部活の仲間」としての目線と、「恋愛対象」としての目線は違うしな。予め俺に「恋愛対象」としての意識を花丸ちゃんに向けさせるようにした。例えば、ダンスを踊っている花丸ちゃんを俺が可愛い、と思った時、「部活の仲間」だとそれ止まりの可能性が高いが、「恋愛対象」として意識していれば、その可愛い、と言う感情がさらに発展するかもしれない。今は俺は花丸ちゃんに対してそういう感情は無いが、そうやって意識し続けているうちに、自然と……。という可能性もある。その時に花丸ちゃんの気持ち genuinely 当に『恋』だったら、見事相思相愛カップルの完成———という、「告白の先行投資」って感じか。

と、俺がそこまで考えたところで、ジト目だった花丸ちゃんが、元の朗らかな表情に戻った。そして、軽くお辞儀をして俺にニッコリと笑顔を向けてくる。それにつられて、俺も…に、にっこり。

花丸ちゃん…、相当策士でございました。

だが、だとすると最後に一つ、素朴な疑問が残る。

「なあ…、花丸ちゃん。こんなに直接的な方法じゃなくても、方法は他

にもあつたんじやないか？勿論、花丸ちゃんの方法を悪いって言うわけじゃないけど。：俺が言うのも大分変で何様だよって感じだけど、ちよこちよこアピールをするとかさ、じわじわと距離を縮めていく方法もあつただろ？というか、むしろそっちの方がベーシックな感じだと思っけど。」

え???

その瞬間、全方位からの「何も解ってないよこの人…。」とでも言う様なため息が俺に向けて放たれた。花丸ちゃんなんて、「ずらあ…。」と、もはや声が出てしまうほどの深いため息だ。：え？なんで？普通、そんな感じだよな？漫画とかドラマとか、大体じわじわタイプだよな。

「それが効かない前例がありまくるから、これしかなかつたんずら…。」

…。

…：全員の目が湿度100%を超えるジトジトさになっている。

「はあ…。結局翔くんは翔くんだね…。」

「私、これからどうしたらいいか解らないであります…。」

「私たちも、こうするしかないんじゃないかな…。」

「意識ゼロだから、余計にタチが悪いのよね…。」

「が、がんばるびい…、です…。」

はーい、撤収撤収…。と、追加で全員一回ずつため息をつきながら各々の席に戻り、朝食を再開していく。彼女たちから流れる苦々しい雰囲気。：その後は、各々の咀嚼音が小さく響くばかり。俺は、話の後朝食が終わるまで誰とも会話をすることは無かった。

とまあ、そんな様子で俺の人生最初の告白イベントは、何とも言えない終わり方をするのだった…。

第28話　　GW合宿4日目

「…みんな、グラスは持ったか？」

「…では、みんな、4日間の合宿、お疲れ様！乾杯!!」

「!!!「かんぱーい!!!」!!!」

チン、とグラス同士が合わさる音が、部屋に響き渡った。

「いやあ…、短いようで、長かったなあ。この4日間は。」

「あはは、かけるくーん。それを言うなら『長いようで短かった』でしよー?」

「なんか千歌に言葉を指摘されると若干イラっとくるな…。」

「うにゃー!またばかにしたなー!」

先程の俺による乾杯の音頭により始まった「GW合宿打ち上げ」。

…若干語呂が悪いのは気にしないでおこう。

打ち上げが始まるや否や、いきなり俺の隣にやってきた、この宴の企画者であり主催者の千歌と一緒にテーブルにある料理をつまみながら、この合宿を振り返っていたのだ。

「…それにしても、今日はびっくりした。まさか梨子が曲を完成させてるとはな。」

「うんうん、そうだよね!曲を聞いた時、感動してチカ、泣いちゃいそうだったよ。『ああ、これから始まるんだ!』って感じがして!」

「そうだよな。これでダンスの練習もできるようになるし、歌の練習だってできるしな。…頑張れよ?千歌。」

「なくんか、最後の言葉がばかにしてる感じがする…。」

「……………気のせいだろ。期待してるんだから頑張れよ?」

「今の間はなんだー!!」

そう、今日はこの合宿一番と言っても良いほどの大ニュースがあったのだ。夕方、梨子が『曲が出来たの』、という言葉と共に俺たちにC

Dを手渡ししてきた。勿論、俺たちはすぐさまパソコンに取り込み再生。そこから流れ出す曲は、先日千歌が書きあげた歌詞と絶妙にマッチしていて、それでいて曲自体も良い意味で耳に残る、軽快なリズム。

聞き終わった瞬間、俺たちは自然と拍手をしていた。素晴らしい曲だから、という理由が大部分を占めているのだが、このライブまでもない過密スケジュールの中で、こんなに早く曲を作り上げてくれた梨子の作曲センスについてもだ。まだ歌詞の入っていない原曲の状態でこれなのだ。彼女たちの歌声が入った瞬間、この曲はどんな様子に化けるのだろう——と、とても楽しみになった。

「…もう、さつきから大きな声で。恥ずかしいからやめてよ…。」

「お、噂をすればこれはこれは。天才作曲家桜内先生じゃないですか。」

「それが恥ずかしいって言ってるのよお…。」

と、俺たちが梨子についての話題に触れていると、それを聞きつけたのだろう梨子がグラスと一緒に俺たちの元へとやってきた。先程の彼女の言葉通り、俺たちの会話が全て聞こえていたのだろう。頬がほんのりと赤く染まっている。

「いえいえ、そんなに謙遜しないで下さいよ先生。」

「そうそう。チカ達すつごく感動したんですよお?」

「…:…なんかバカにされてるみたいだから戻ります。」

「まってまってまって!!!」

「ごめんごめんごめん待って梨子!!」

その彼女をにやにやしながら迎える俺たち。それを見た梨子が冷たい視線を浴びせ、踵を返して戻ろうとしてしまうので、慌てて引きとめる。

「ほらほら、こっちにおいで、梨子ちゃん!」

「そうそう、ほら、俺の隣が空いてるから。一緒に楽しくお話ししようぜー。」

「…:やっぱりバカにされてるみたいに聞こえる。」

「気のせい気のせい。」

そうしてなんとか梨子を引きとめ、席に座らせることに成功した俺

たち（特に俺）は、ほつと息をつく。ここで梨子の機嫌が悪くなってしまうたら、大変だもんな…。個人的にだが、このメンバーの中で怒らせるが一番ヤバそうで怒りが長そうなのは、梨子だと思っている。本気で怒ってるのを見たことがない、しかも、いつもおしとやかな感じで落ち着いてニコニコと笑っている印象だから、恐らく怒る時は笑いながら怒る、という感じだと思う。顔は笑顔だけど、目が笑っていない。…そんな感じだろう多分。おお怖い怖い。

「…翔くん？」

「いえなんでもないです何も考えてないですよ。」

って言ったそばからの梨子。そうだ忘れてた、ここにいる人は全員俺の思考が読めるんだった。いい加減学習しよう。

…というかやっぱり梨子は怒らすと怖いな、確実に。今の俺への表情だつて、笑顔だったけれども、若干闇が見えた気がするもん。瞳を見つめると石化でもされんじやないかな。

「…翔くん？」

「お疲れさまでした桜内先生。ささ、ぐいっと一杯いっちゃってください。」

だからいい加減学習し以下略。さつきから俺への笑顔の威圧が半端じゃないと感じた俺は、すぐさまジュースを梨子のグラスに注ぐ。…よし、もうこれ以上は何も考えない、考えない。梨子の笑顔は純粹そのもの、怖くない怖くない。はははは…。

「…はあ、もういいよ。んくっ、んっ…。ぶはっ。…はい、翔くん、もう一杯。」

「はい喜んで!!」

ダメだああ体がビビっちゃってるううう!!と受けとったグラスに迅速にジュースを注ぎながら、梨子の視線にビクビクしていた。

…あれだよな、絶対。梨子は結婚したら旦那を尻に敷くタイプだと思おうよ。

「あはは、翔くん。梨子ちゃんにビクビクしすぎだよー。」

「そうよ。私が何をしたっていうの?…ねえ翔、くん?」

「そ、そうですよね!あ、あはは、あはははは…。」

今の間は何だったんだ…!! 蛇に睨まれた蛙状態のまま、残りの時間は梨子のグラスに全神経を集中させ、飲み物を迅速に注ぎ続けるのだった。

…今度から考え事するときにはホントに気をつけよ。

……

「……ふう。疲れたー。」

ボスン、とベッドにダイブした俺は、枕に顔を埋めながら全身の力を抜き、完全なリラックスタイム状態になった。

「みんな、結構テンション高かったからな今日は…。雰囲気は飲まれちゃったよ。」

結局、あの後もどんちゃん…。とまでは行かないが。普段おとなしめな彼女たちにしては珍しい(特に花丸ちゃんやルビイちゃん)、陽気な感じで盛り上がっていた。その為、終了予定時間を大幅にオーバーし、美渡さんにお説教をくらう羽目になってしまったわけで…。

「……ま、たまにはいいだろ。美渡さんめっちゃ怖かったけど…。」

思い出しても背筋が軽く震える…。しかし、俺と千歌が怒られただけで、彼女たちの笑顔は守られたのだ。普段見せない表情を見せてくれた代金だと思えば、まあ容易いものだろう。それにしても、千歌の美渡さんに対する腰の低さ、謝罪の速さには驚いた。慣れすぎだろ。あいつとんだだけあの人怒らせてんだよ…。説教が終わった後もへらつとしてたし。あの説教に怒られ慣れてるって、ある意味最強かもしれない…。

…と、そんなこんながあつてみんなと解散した後、ペナルティである皿洗いをみっちりこなした俺は、このまま眠つてしまおうとベッドに横になり瞼を閉じようとしていたわけだった。

コンコン。

…と、俺がまさに寝るか寝ないかの瀬戸際、個人的には一番気持ちのいい時間に、それを阻害する外的要因が現れた。俺はこの時間が好

きで、そのまま眠ってしまうのが一番最高の気分なのだ。先程の言葉は悪かったとは思いますが、俺の好きな時間を妨害された事に若干の憤りを感じてしまうのも事実。しかし、俺はここに住まわせてもらってる身であり、そのノックの主が美渡さんだったりしたら一刻も早く迎え入れないと先程の地獄が再来してしまう。それに俺はまだ風呂も入っておらず、寝間着にも着替えていない。ここは起こしてくれた事に感謝するでしょう。と、若干回転が緩やかになっていく脳を使ってそう答えを出した俺は、ベッドから起き上がるそのその扉まで赴き、そこを空ける。

「……なんだ、千歌か。」

「なんだとはなんだっ！お風呂上がったから呼びに来てあげたのに。」扉の前に居たのは、地獄の審判者（これ言ったら死ぬな……）ではなく、湯上りの蒸気をほこほこと立てている、みかん色の髪の少女だった。

「そっか、ありがとな。……じゃあ、もう少ししたら入るよ。」

千歌に俺は素直に礼を告げると、扉を閉めようとする。……まだ目が覚めていない。このまま風呂に行くのも良いかもしれないが、この合宿の疲れからか、このまま入ったらそこで眠ってしまう気がする。それだと合宿終了と同時に人生が終了してしまうので、部屋で少し眠気がとれるまで落ちついてから行こう、と扉に手を掛けると――

「……待って。」

「まだお風呂はいらないなら、翔くんと、少しお話したいな……。……入れてくれる？」

その言葉と同時に、俺の服の袖を握ってくる千歌。それと共に、湿った艶やかな髪と、いつもの元気な千歌からは想像もできない潤んだ表情。

「……！」

それに魅入った俺は、反射的に首を縦に振ると、千歌を部屋の中まで誘導した。……眠気は、あつという間に無くなっていった。

.....

「…で？いきなりどうしたんだよ、千歌。」

部屋に戻ると、千歌をベッドに座らせ、俺は畳にそのまま座る。そこでもう一度千歌を見ると、まるでさっきの表情が俺の見間違えだったかのように、いつもの表情でえへへ、と笑っていた。

「…えへへ。合宿、終わっちゃったねって思ってたさ。」

「…そうだな。」

どうやら、合宿の思い出でも語り合うつもりらしい。…さつき打ち上げで散々話したのに、まだ足りないのか。と内心苦笑しながら、千歌の話に乗る事にする。

「4日間って、長いものだと思ってたけど、ホントにあつという間だったよー…。」

「そうか？俺は凄い長い4日間に感じたけどな…。」

「えーっ？楽しい時間はあつという間に感じるじゃん。…もしかして、楽しくなかったの？」

「いやいや、んなことあるわけないだろ。十分楽しかったさ。…ただ、その。色んな事がいっぱいあつてさ…。」

若干ニヤけ顔で聞いてくる千歌にそう答えながら、俺はその『色んな』事を思い出す。…初日から、いきなり俺の部屋の謎の争奪戦が始まるし。梨子との同室は緊張したし。…まさか花丸ちゃんから告白されるとは思わなかったしな。

「…ん？何を思い出したの？」

「…そりゃあ、まあ。色々だよ。」

「…：梨子ちゃんと一緒に寝たり、花丸ちゃんに告白されたり？」

「やつぱりさっきのニヤけ顔は、狙ってたな…！と若干顔を赤くして俯く俺。」

「…ここまで、いつも通りの風景というか、日常の軽口だった。」

「ちよっ…！お前なあ…、気付いてるなら、わざわざ言わせるんじや、

な……!？」

いつもの軽口を言い合う、冗談めかした千歌の口調。…またいつも通りの言い合いが始まるな、と内心思いつつ千歌に言い返そうとして顔を上げた、その時。

……俺は訳が解らなかつたんだ。

千歌の目から、涙がこぼれている事に。

…完全に思考が停止した。

意味が…、わからない。さつきまで笑顔で俺と会話をしていた筈なのに。と、完全にパニック状態になると同時に、俺はさつきまでの言動を全て思い返し、何か傷つけた事でも言ったのか…?と必死に記憶を探る…、が。変な事は言っていないと思うし、いつもの言い合いより、今日はよっぽど落ち着いている。

「…あのね、千歌、ずっと寂しかったんだ。」

しかし、それは俺が思っているだけで、千歌は俺の何かの言動で傷ついたのかもしれない。…まずは謝罪しなければ、と思いい口を開こうとした瞬間。

千歌の口から、そんな言葉が呟かれた。

……「寂しかった?」

千歌の言葉に疑問を持った俺は、千歌の言葉の解釈に脳をフル回転させる。

数秒間訪れる沈黙。

……そんな俺の内心を知ってか、千歌は話を続けていった。

「…この4日間、翔くんと。…二人つきりで居た事、なかつたでしょ?」

「最初はね、そんな事思ってもいなかっただの。『みんなとお泊りできる。みんなとずっと一緒にいれる。』って。実際、とっても楽しかったし、またやりたいなあ、って思った。…でもね。段々合宿が進んでいってね、この気持ちがどんどんおつきくなっていっただの。『寂し

い』って。」

そこから、千歌の表情が変わった。涙を流していただけで、声色はとも落ち着いていたのだが、段々と表情と共に、言葉に嗚咽が入り混じった。…俺は、何もできずに。千歌の話を…黙って聞くことしかできなかった。

「…翔くんと、お話がしたかった。みんなとじゃなくて、二人きりで。」
「…話したかった？」

俺がそう聞き返した瞬間、…千歌の肩が小刻みに震え、まるで理性のダムが決壊したかのように、嗚咽が入り混じった声で、次々と感情を爆発させた。

「私だって…、翔くんのお部屋に行きたかった!!梨子ちゃんみたいに、隣で一緒に寝たかった!花丸ちゃんみたいに、翔くんに助けてもらいたかった!!ご飯の時だって、二人で食べたかった!練習だって、一番近くにいて欲しかった!」

「……………!!」
…他のメンバーに対する、嫉妬心。それを理解した瞬間、俺の心臓の鼓動が急激に加速する。

「…このお家にいるときだけは、翔くんを独り占めできてた。会いたいときは、隣のお部屋に行けばいつでも会えるし、ご飯も、一緒に食べてた。…でも、みんながいたこの合宿は、そんなこと一回もなかった。翔くんは、みんなに優しくしてて、みんなと仲良くしてて。…解ってるよ。私だけ、なんて無理だって。でも、私と翔くんだけのこの場所が、みんなに荒らされちゃったみたいって…!思ってる…!」
「解ってるの!私、今最低な事言ってるって!!みんなの事を凄く悪く言ってるって!!…でも、思っちゃうんだもん!」私と翔くんだけの場所を取らないで』って!」

「お、おい…!千歌…!?!」
その感情って。

…と、俺が『千歌の気持ちに気付いた』その時。

ベッドから立ち上がった千歌が、勢いよく俺に抱きついてきた。

「ちよっ…!千歌!」

「流石に翔くんでも解るでしょ…？…そうだよ。」

いつの間にか、嗚咽の入り混じった声ではなくなっていた。信念のこもった、まっすぐな、はっきりとした声で、千歌はその言葉を告げた。

「好きになっちゃったんだよ。翔くんの事を。」

くスクールアイドル活動、始動く
第29話 く芽生えた感情。気づいた感情。く

合宿が終了してから、3週間が経った。

部活のことで忙しく、全く触れていなかったが、合宿終了後すぐにあつた中間テストもなんとか乗り切る事も成功。来るべき今月末、というか今週末にあるライブに向けて、メンバー一丸となつて練習を重ねている。

「ワン、ツー、スリー、フォー……。……はい、ストップ！花丸ちゃん、ちよつと遅れ気味だね。梨子ちゃん、ステップが小さい！もつと自信持って！善子ちゃんは、逆にちよつと早いよ！」

「ヨハネよ！」

……と、西日に照らされて輝く海の水面を背中に、今日も砂浜で練習。本当は学院内で手ごろな場所があればよかったのだが、正式に部活に認められていない俺たちに、割り当てられている場所は無い。

という訳で、毎日放課後になるやすぐにバスに飛び乗り、十千万の前の砂浜でダンス、発声、筋トレ等を日が落ちるまで。……ここが有名な観光地で真夏のシーズン中、とかなら恐らくここも使えなかったのだろうが、ここは超田舎の、さらにシーズンオフ中。人などいるわけもないため、遠慮することなく毎日ここを使用している。

「うん、良い感じだよ！ルビィちゃん。そう、その感じ！いいね、花丸ちゃん。リズムが戻ってきてる！」

今はダンスのステップ確認中。曜がほかのみんなの振りを確認し、各々に修正を促す——という状況で、曜の隣に立ちみんなのステップと一緒に眺めながら、俺はその中心である彼女を横目でちら、とみる。……この3週間、俺は彼女に驚きっぱなしだった。

天才肌——というのはこういう事なのだろう。ダンスの振り付けを誰よりも早く……、というか2く3回やっただけで覚え、踊りも素人ではないだろ!?!と言いたくなるほどのキレ。さらに歌唱の方も才能があつたようで、ダンスと合わせながらも全く声がブレることな

く、安定した綺麗な歌声。……おまけに、ライブの時の衣装も「あ、私裁縫できるから、作っちゃうよ。」とのこと。とどめに、衣装のスケッチをその翌日には大量に描きあげ、「どれがいい？」とか言い出す始末。

ダンス、歌の時までは「運動できるって、いいなあ」くらいの軽い気持ちだった（軽い、と言っても大分驚いてはいたのだが）のだが、「衣装を作る」発言から、翌日にスケッチの紙束をバサバサと広げてきたときは、流石に開いた口が塞がらなかった。……ちなみに、その衣装は既に完成済みらしい。仕事出来過ぎだろ…。

そんな俺の眼差しには全く気付かないまま、曜は横一列の中心で踊っている——千歌に声を掛けていた。

「千歌ちゃん！全体的に細かいミスが多いよ！一モーシヨン一モーシヨン、丁寧にな〜！」

「う…、うん！」

その人物の名前を聞いた瞬間——ドキリと胸の鼓動が一瞬加速する。

…もう3週間。流石に過敏な反応はしまいと思っていたんだけどな…と軽く頭を掻きながら、目の前で踊っている彼女の方に視線を移す。

その俺の視線に気づくことも無く、真剣な表情でステップを踏む千歌。頭のとっぺんにあるアホ毛を揺らしながらのその様子は、まるで俺との事など一ミリも悩んでいないような、そんな印象に見える。

「少し…、考えさせてくれないか。」

合宿の最終日。涙ながらの千歌の告白をそうやって受け流してから、もう3週間。

自分でも、この返事が最低なものだったというのは、重々理解している。『悩む』というのは、決めかねている、という事と同意義で、言い方を変えると『好き』という感情はないが、付き合ってもいいかな』というような、いわばキープ。上から目線な、それでいて最低な事だと

思われても可笑しくない事だからだ。

本来、返事を待たせるなんてことはあつてはならない事だと個人的には思っている。返事を「考える」時点で、それはもう「好きではない」事と、一緒だと思うから。

しかし、俺はその行為をしてしまった。相手を待たせる事、キープ行為と言つても違わないだろう。それも3週間も。

…だが、その最低な事をしてしていると解つていて尚、俺は答えを出せないでいるのだ。

先程の通り、『悩んでいる』時点で、『好きではない』のだと、心の中では思っている。…しかし、「本当にそうなのか？」と言うもう一人の自分が、そう結論付けるのを妨げている。

現に、この3週間の間、俺は千歌の事ばかりを見ていた気がする。…それは、告白されたから意識しだした、という後付けの思いなのかもしれないが。…いや。思い返すと…、そうじゃない。

あの告白を境に、彼女への見方が変わったただけで。十千万に居候になり始めた時から、俺は彼女の事を見続けていたのだ……。

「だとすると。…結局、俺は。千歌の事を……。」

「よーしっーそれじゃあ今日はこのくらいにしておこっか！」

そんな俺の考えを遮るかのごとく、曜の声が砂浜に響き渡る。その言葉が言い終わるや否や「疲れたずらあ。」も、もう動けない…。」「こ、この程度で私の冥界の門は閉ざされない…。」と1年生、sが口々に疲労を嘆きながら俺の方へとやって来る。1度思考を中断した俺はみんなにタオルと飲み物を渡しながら、「お疲れさん。」と労いの言葉を送る。

「はあああ…。今日もはーどだったずら……。」

「でも、中々いい感じに動けるようになってきたんじゃないか？最初の頃からは、見違えるようだぞ。」

「そうよ。花丸ちゃんは頑張ってるから、自信もって大丈夫よ。」

そんな花丸ちゃんの肩にぽん、と手を置き、柔らかい表情で現れた梨子。俺はすかさず梨子にもタオルと飲み物を渡す。

「……なんか、まだ怖がつてない？」

「気のせいに決まってるじゃないですか桜内先輩。」

「……………」

流れる沈黙。ちら、と梨子を見ると、案の定ジト目で俺の方を見ている。…何度も言っていると思うが、別に怖がってる訳じゃない。何となく、梨子から溢れてるオーラのようなものが俺をこの様にしているのだ。多分。

「なーに？また梨子ちゃんのこと怒らせたの翔くん？」

そんな俺たちの間にぴよこん、と入ってきたみかん色の少女。その瞬間、またドキリと胸が高鳴るが、それを表情に出さないように気をつけながら、いつも通りの自分を振舞う。

「…いや、そんな事ないない。俺と梨子は仲良し。はははは。」

「すつごく不自然なんですけど…」

俺の精一杯の「いつも通りの対応」は、簡単に梨子に不自然がられる。

俳優には絶対なれないな…、と内心想いつつ、しかし何とか表情だけはこわばらずになっていたらしく、千歌は特に気にしてはいないようだった。

…しかし、何故千歌はこんなにもいつも通りでいられるのだろうか。

あの告白の次の日から、今までも全く変わりようのない様子に不思議がりながら、しかしそのいつも通りの振る舞いをしてきているおかげで若干の気まずさを感じながらもやってこれているのでそこは本当に感謝しかないのだ…。

だが、気のせいかもしれないが…、あの告白の瞬間から、千歌の俺を見る表情が違って見える時がある。

「…じゃあ、今日はこれで解散ってことで！さっ、梨子ちゃん、翔くん、かえろかえろ！」

そう、今の千歌の表情のように。

「……………」

.....

「翔君……。ちよつといいかな。」

帰路に着く直前の、十千万の敷地の少し手前。梨子とのいつもの分かれ道で、彼女は唐突に俺を呼び止めた。

「ん？なんだ梨子？」

「どしたの梨子ちゃん？」

その声で足を止める俺と千歌。梨子を見ると、特に別段変わったこともなさそうな様子なのだが……。

「ごめんね、ちよつと翔君にだけお話があるの。千歌ちゃんは先に帰っててもらえる？」

『俺だけ』に……？

というイレギュラーな言葉が出た。思わず顔を見合わせる俺たち。千歌に話すことのできない内容なのだろうか。「俺だけ」に話すことの用件などあっただろうか……？

しかし、梨子の表情には千歌仲間はずれにしようだとか、そういう気持ちはまるでないであろう真剣な表情。それを見取ったのだろう千歌は、「後で教えてよっ」と言い残して敷地の中へと消えていった。「……っ。」

「千歌ちゃんと、何があったの？」

それは、何を言われるのか全くわからなかった俺の疑問を一瞬で払拭するとともに、俺を驚愕させる一言でもあった。

「……はい。粗茶ですが、どうぞ。」

「……ありがとう。」

またしても訪れることになった梨子の部屋。女の子の部屋ということで、これは何度入っても胸が落ち着くことはないのだろうが、今の俺はそんな場合ではないくらい、緊張をしていた。

「……いつから何かあるんだって、わかってたんだ？」

一口お茶をすすり、先程の話題を切り出す俺。

「……ということは、やっぱり何かあったのね。正直、分かりやす過ぎるよ」

…。特に翔君。」

「うぐつ…。やっぱり俺か…。」

いつも通りを振舞ってただけだな…。どうやらばれていたらしい。

「合宿が終わった辺りからかな…。なんか妙によそよそしさを感じたのよね。…喧嘩でもした？」

日時まで完璧である。ますます落ち込むとともに、この場をどのようにして乗り切るか俺は考えていた。

「たぶん私しか気づいてないと思うから…。いいにくいことだったら内緒にするし、大丈夫だよ？」

…本当は相談したい。気持ちを抑えたい。千歌の『違う』表情を見たくない。しかし、それをしてしまうと、彼女のまっすぐな気持ちから逃げているようで。それで出した答えは本心じゃないような気がして。

「実は、千歌のみかんを勝手に食べちゃってさ。ちよつと怒ってて。若干気まずい雰囲気…。さ。」

当初のとおり、俺は誤魔化すことにした。

その後、千歌と喧嘩をしたという体をなんとか貫いた俺は、少し梨子と雑談を交え、帰ることを切り出した。

「じゃあ…。そろそろ帰るよ。」

「うん…。気をつけてね。」

「気をつけるような距離じゃないだろ…？」

「ふふつ。それもそうだね。」

そうして玄関先まで送ってくれた梨子に別れの挨拶をし、十千万へと向きなおすその背中に、

「自分の思ってること…。ちゃんと伝えてあげてね。」

そんな、梨子の声が聞こえた。

「…本当に、俺は俳優にはなれないみたいだな。」

その一言で、腹が据わった気がした。
つたなくてもいい、それで気持ちがあまく伝わらないとしても、千歌に話そう。

そうして、俺は千歌の待つ十千万へと駆け出した

……

「…予想はしてたけど、やっぱりそうみたいだね。」

自室に戻り、飲みかけの湯飲みを持ち上げながら、そう呟いた。
やっぱり、不自然すぎるよ…？翔君。

思い返して、クスリと笑う。

この3週間、千歌ちゃんの翔君への表情でほぼ確信してた。

「千歌ちゃんは、本当にすごいよ…。」

「私は、そんなに積極的にいける度胸もない。」

さらにそう呟きながら、自室の出口へと向かい、ドアを開く。

「でもね…、千歌ちゃん。」

私も、今日で気づいてしまったから。

合宿のあの時から、いや、もつと前から…。もしかしたら、出会ったときからかもしれない。

——扉の閉まる、音がした。

「私だって…。負けないよ。」

翔君の事が、好きだから。

第30話　　彼女の思いと自分の答え

「かつてこんなにも開くのには勇気のいる扉はあっただろうか。」

梨子と別れた後、俺はすぐさま十千万に戻り、勢いそのまま千歌の部屋のドアをノックしようとした。…したのだが。

「……………」

ドアを叩こうとする右手が、ドアに触れる数センチ手前で強張ったまま動かない。後ほんの少し前へ拳を出すだけで、いつも通りの音が鳴る。「コンコン」、というなかなか心地よい音。普段あまり気にしていないものの、あのだこか爽やかさを感じさせる音を俺は少しだが好んでいた。

しかし、今はあの音を出すのをためらっている。ノックをすると、当然ながら部屋から返答があり、部屋の主、千歌がいつも通りの笑顔で迎え入れてくれるだろう。いつもなら何とも思わないが、今俺がここに入ろうとしている理由が理由だから…。

と、梨子との会話で腹が据わったとか何とかぬかしていた癖に、今現在俺はへたれてしまっている。握った拳からは手汗がにじみ出て不快感が発生し、相変わらず体は動かない。心なしか呼吸も若干荒くなってきたような気もしてきて…。傍から見たら完全に変態だろう。

しかし、いつまでもここでフリーズしていても何も始まらない。大きく深呼吸をすると、俺は映画に出てくる突撃部隊の兵士の様な面持ちで、カウントを始め。

「よ、よし…。いくぞ。3…、2…、1…。」

「…ゼロ。」

「ほえ?」

ガチャ。

ゼロ、のカウントリミットと同時に振りだされた俺の拳がに触れる…と全く同タイミングで開け放たれたドア。その向こう側から部屋の主が目をまんまるにして俺の目の前にいきなり出現した。…のだが。

漫画じゃあるまいし。と、まさかそんな事を思ってもいなかった俺

は、驚きが勝ってしまい。目では認識していたものそこから腕の停止信号を発することをしないまま、千歌のおでこめがけて動作を続行していた。

つまり、何が起こったのかと言うと…。

こっつーん。

「あいたあーっ!？」

…全く予想していなかった一撃による彼女の悲鳴が、部屋中に響き渡ったのだった。

「い、いやあー。まさか…、ねえ？あんなにタイミング良くなることなんて想像できないじゃないですか。は、ははは…。」

「…悪いと思ってる?」

「はいすみませんでした誠に申し訳ございません大変失礼いたしました。」

西日が水平線のかなたに5割方落ち始め、当たりが薄暗くなり始めている中。俺は電気も付いていない千歌の部屋の中心で若干の冷や汗をかきながら正座をしていた。

「結構痛かったんだからね?」

そして俺が精一杯の誠意を向けている方向の先には、未だ痛むのかおでこを軽くさすりながら、こちらをジト目で見つめてくる千歌。確かに、おでこの部分を見ると赤くなっている。

改めて「すまん…。」と謝ると、偶然が重なった上での現象のために怒るに怒れないのか、「…まあいいよっ」と案外すんなりと許してくれた。良かった。お詫びになにかする事になったら恐らく(みかん100個)とか言い出すだろうからな…。

「それで?何か用事があつてきたんでしょ?なにかあるの?」

と俺が内心安堵していたところで、いつもの無邪気な表情に戻った千歌から尋ねられる。

「…っ。お、おう。」

そう。俺の目的は千歌のおでこにノックをしに来た事ではない。

千歌に長い間待たせてしまった返事を、自分の思いを伝えに来たのだ。

それを意識した瞬間、激しく胸の鼓動が高鳴り、ひどく口周りが乾燥してきた。体が強張り、思うように制御できない。指先は細かくだが、確かに震えている。今千歌の顔を見続けていられているのが奇跡なくらいだ。それくらい、俺は一瞬で緊張具合の最高潮に達していた。

「…千歌。…あの時の、返事なんだけど。」

「…っ！」

しかし、声はすんなりと出た。千歌もこんなに緊張をして、こんな思いをして、俺に思いを打ち明けてくれていた。そう考えただけで、自然と口は動いた。

その言葉に反応した千歌が、ビクツ、と小さく反応する。さっきまで合っていた目線が外れ、少しうつぶわいてしまう……。が、決心したのだろう。数秒後目線を俺の瞳へと戻した。

「うん…、聞くよ。」

先程の無邪気な表情とは一転、真剣な面持ちになる千歌。

俺は軽く息を吸い込むと、…3週間考えた、俺の『答え』を告げた。

「俺は、千歌のことが…」

「好き、なのかもしれない。」

「……………えっ？」

肯定とも否定ともとれない曖昧な俺の答えに、千歌は困惑の表情を浮かべる。

確かに、この一言では全く返事にはなっていないだろう。…そう。俺の『答え』はまだ終わっていない。

俺は軽く一呼吸置くと、目の前でやはりしどろもどろしている千歌に向かって、頭を下げた。

「…まず。これだけは謝らせてほしい。返事、こんなに遅くなつてごめん。まさか、俺なんか告白されるなんて思つてもみなかつたからさ。しかも、一番距離の近い人から。」

「…ほんとだよ。3週間も待つなんて。すつごく不安だつたんだからね…?」

頭を上げ、再度千歌の顔を見上げると、その瞳からは一筋の涙が伝つていた。彼女はこの3週間、さつき俺が返事を返そうとする時に味わつたような緊張と、さらに告白に対する不安をずっと抱いていたはずだ。俺はさつき一瞬感じただけでもとても苦しいものだったのに、それを3週間も。…俺は罪悪感でいっぱいになり、再度頭を下げる。

しかし、彼女が欲しているのは、謝罪ではなく、告白への返事なのだ。これ以上彼女にこんな思いをさせないためにも、俺は更なる沈黙の後、続きを切り出した。

「…この3週間、ずっと。千歌、お前のことを見てきた。考えた。何度も何度も自分に問いかけた。『俺は千歌のこと、どう思つてるのか?』って。…でも、答えは出なかつた。」

千歌は黙つて俺の話を聞いている。いつの間にか彼女の目から涙は止まっていた。

「ここにやつて来た最初の日から、俺は千歌と一緒にいたよな。まだ大して時間は経つてないけど…、俺が今まで出会つてきた人の中で、一番親しい、近い関係になつたと思つてる。だから。だからこそ。俺は答えが出せなかつたんだと思う。」

「…今日やつと答えが出たんだ。近すぎたが故に、出せなかつた結論。…これから言う事は、かなり最低な部類に入る事だと思う。…それでも、これが俺の『答え』なんだ。」

俺はここで一旦話を区切ると、ゆつくりと深呼吸。

前置きは話した。次。次の一言で、俺の『答え』が出る。

小刻みに震える唇を感じながら、言葉を、『答え』を、発した。

「千歌の事、『好き』だとはまだ言えない。だから…、この気持ちも千歌に向かっているものなんだと俺の中ではつきりした時…、今度は俺から言わせてほしいんだ。」

そして俺は頭を下げた。…自分では解っている。こんな告白の返事、傍から見たら「とりあえずキープで、後々いいなと思っただけ付き合おう。」という様な解釈になる。しかし、これが俺の今の結論であり『答え』。今はどれだけ時間を与えられても変わる事はないだろう。

…千歌のことも傷つけたに違いない。「最低だ」と思われただろう。こんな男からの告白を後にまた受けるなんて地獄だ。と思われているのかもしれない。

「…かける、くん。」

数秒、あるいは数分。長いようで短かったような、そんな曖昧な沈黙の時間の後、頭を下げ続けていた俺の頭上から、彼女の、俺を呼ぶ声が聞こえた。

「…っ。」

…頭を上げるのが怖い。千歌の表情を見るのが怖い。何を言われるのか…、想像が怖い。

しかし、俺はそんな事を考えてはいけけない。思っただけはいけけない。どんなに考えた末の結論でさえ、俺は千歌の事を傷つけたのだろうか。

100分の1秒にも満たないであろう一瞬で俺は息を吸うと、ゆっくりと…、彼女の、千歌の表情と目線を合わせた。

「ありがとう…っ！」

そこには、これ以上ないくらいの笑顔で俺を見つめている彼女がいた。

「……は。」

思わず漏れる俺の疑問符。当然だ。感謝されることなんて俺は何一つしていない。中途半端な返事で彼女を困惑させ、傷つけた筈だ。なのに、……なぜ。

『かもしれない』『まだ』、つて事は、まだ千歌にチャンスはあるつてことだよね…？少しでも私に惹かれてくれたんだよね？…嬉しいな。ホントに嬉しいよ…！』

「っ…!?」

…俺の両目から、止めどなく涙が流れ始めた。

胸が締め付けられる思いだった。こんなに純粋な彼女の気持ちに応える事が出来ない自分と、最低な返事に輝く目で、それでも俺に好意を向けていてくれる彼女に。

俺に泣く資格なんてないのに。早く泣きやまなくてはいけないのに。その思いとは裏腹に、そう思えば思うほど涙の粒は大きくなる。

「…え!?ちよ、ちよつと翔くん！なんで泣きだすの!?と、とりあえず泣きやんでよく！」

それを見て慌てた千歌が、どこからかタオルを持ってきて俺の顔に押し付ける。俺は嗚咽を混じらせながら何度も深呼吸し、何とか涙を全てタオルに落とす事が出来た。

「…落ち着いた？」

優しく問いかけながら、俺の顔を軽く覗き込む千歌。その優しさがまた俺の涙腺を刺激したものの、「ああ、大丈夫」と答えながら頭にタオルを押しあてそれを抑制した。

「いきなり泣き出しちゃうんだもん。びつくりしたよー。…なんで泣いちゃったの？」

「はつきり決められない俺自信と、俺のあんな答えに笑顔のお前が、…眩しすぎて。」

そう答えた俺の言葉に、ピンと来ていないような表情をする千歌。俺はそんな千歌にこう、掠れた消え入りそうな声で質問を投げかけた。

「…なんで、あんな中途半端な俺の答えに、そんなに…、前向きでいてくれるんだ。なんで、まだ俺の事を好きでいてくれるんだ。…3週間だぞ?3週間。こんなに長い間お前の事を不安にさせて、拳句の果てにあんな返事をしたんだぞ?なんで…、なんで笑ってくれるんだよ…?」

「だって、好きなんだもん。それだけだよ。」

そうやって、いつもの笑顔で千歌は答えた。

「普通に聞くとひどいように聞こえるかもしれないよ。なんていうんだろ…？あ、そう！『キープ』発言。そんな風に聞こえるような翔くんの言葉だったけど、私は知ってるから。翔くんが優しい事。」

「きつと、私のためにいっぱいいっぱいーい悩んで、考えてくれて。それであの答えになったんだよね？確かに、あの3週間はとつても不安だった。それでも、こうやって翔くんの気持ちを聞く事が出来たから。…さつきはちよつと泣いちゃったけどね。」

えへへ、と笑う千歌を見て、俺はまた涙をこぼしてしまふ。膝元に置いていたタオルに涙が落ち、シミがひとつ、またひとつと増えていく。

「だから、さつきの返事はとっても嬉しかったんだ！翔くんがたっくさん悩んだ上での、あの答え。少しでも千歌の事が気になってくれるってことだもん！」

「ち…、ちか……。」

「だからね!!」

そう言つて俺の鼻先15センチまで距離を詰めると、

「これからばんばんアピールしていくから、覚悟しといてねっ！」

と、腰に手を回して俺を抱きよせながらそう言った。

その瞬間、まるで洪水といつても事足りないくらいの涙が両目からあふれ出た。

「…っ。くっ……。ううううう……。」

そうして抱きしめられた俺は、ついに抗う事を止め、彼女の肩で何時までも泣き続けた。

強く抱きしめる彼女の両腕とは裏腹に、俺の両腕は最後まで彼女の腰に回る事は……、無かった。